京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2022-2

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二二-二
平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡
公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡

2022年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京一条四坊十町跡・
公家町遺跡・京都新城跡

2022年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、消火施設整備に伴う平安京跡・公家町遺跡・京都新城跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

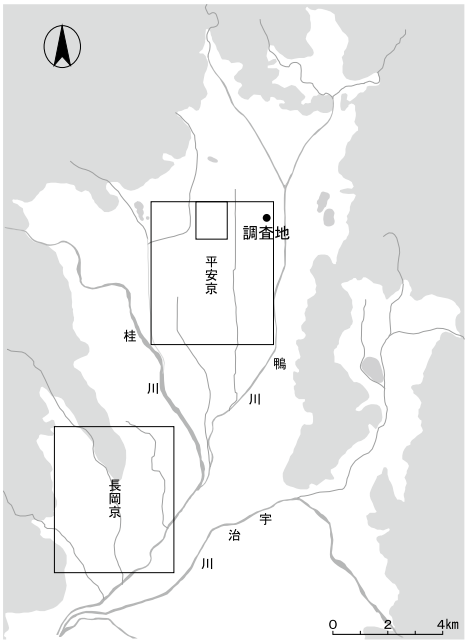
令和４年12月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	平安京跡・公家町遺跡・京都新城跡（京都市番号　20Ｈ383）
2	調査所在地	京都市上京区京都御苑３（京都大宮仙洞御所内）
3	委　託　者	株式会社大亀工務店　代表取締役　山本勝廣
4	調 査 期 間	2022年６月６日～2022年８月12日
5	調 査 面 積	278㎡
6	調査担当者	中谷俊哉・三好孝一
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「相国寺」・「御所」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器類は番号のみとしたが、金属製品は「金」を頭に付した。
13	本 書 作 成	中谷俊哉
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
15	協　力　者	調査ならびに本書作成には、下記の方々のご協力を得た。 市村慎太郎、辻　康男、能芝　勉、平尾政幸　　（五十音順／敬称略）



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 3
（１）歴史的環境と立地 …… 3
（２）既往の調査 …… 3
３．遺　　構 …… 8
（１）基本層序 …… 8
（２）室町時代から江戸時代前期（断割調査区）の遺構 …… 8
（３）江戸時代前期（第４面）の遺構 …… 10
（４）江戸時代中期（第３－ｂ面）の遺構 …… 11
（５）江戸時代後期（第３－ａ面）の遺構 …… 13
（６）江戸時代後期（第２面）の遺構 …… 14
（７）近代（第１面）の遺構 …… 16
４．遺　　物 …… 18
（１）遺物の概要 …… 18
（２）土器類 …… 18
（３）金属製品 …… 22
５．ま と め …… 24
（１）遺構の変遷 …… 24
（２）洪水堆積層について …… 28

図　版　目　次

図版１　遺構　第４面遺構平面図（１：120）
図版２　遺構　第３－ｂ面遺構平面図（１：120）
図版３　遺構　第３－ａ面遺構平面図（１：120）
図版４　遺構　第２面遺構平面図（１：120）
図版５　遺構　第１面遺構平面図（１：120）
図版６　遺構　調査区北壁断面図（１：60）
図版７　遺構　調査区西壁断面図（１：60）

図版８　遺構　溝95実測図（１：50）

図版９　遺構　土坑32・117・122、溝75、石室89実測図（１：50）

図版10　遺構　石室98実測図（１：50）

図版11　遺構　石室70実測図（１：50）

図版12　遺構　溝15実測図１（１：50）

図版13　遺構　溝15実測図２（１：50）

図版14　遺物　溝95、石室98出土土器実測図（１：４）

図版15　遺物　土坑50・59、土器溜60、石室70出土土器実測図（１：４）

図版16　遺物　土坑11・66、溝７出土土器実測図（１：４）

図版17　遺構　１　第４面全景（北から）

２　礎石列１（南東から）

３　溝95（北東から）

図版18　遺構　１　第３面全景（北から）

２　土坑117（東から）

３　土坑117半裁（南から）

４　階段113（北東から）

図版19　遺構　１　石室89（西から）

２　石室89北東隅　細部（南西から）

３　石室98（北から）

４　石室98北西隅　細部（南東から）

図版20　遺構　１　石室70（東から）

２　石室70北西隅　細部（南東から）

３　溝75東部（北東から）

４　溝40西部　（南から）

図版21　遺構　１　第２面全景（北から）

２　土坑66（北から）

３　集石30（東から）

図版22　遺構　１　溝15　地点Ａ～Ｃ（東から）

２　溝15　地点Ｃ～Ｄ（北から）

３　溝15　地点Ｄ（南西から）

４　溝15　地点Ｄ～Ｆ（北西から）

図版23　遺構　１　第１面全景（北から）

２　土坑８　炭層検出（北から）

３　土坑８　構築土半裁（南から）

４　土坑11（北東から）

図版24　遺構　１　断割２　東壁（西から）
２　断割４　西壁（東から）
３　調査区中央部　洪水堆積層（北から）
４　調査区中央部　洪水堆積層（西から）
図版25　遺物　溝95、石室98出土土器
図版26　遺物　土坑11・50・59・66、石室70出土土器

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：5,000）　……　1
図２　調査区配置図（１：1,000）　……　2
図３　調査前全景（北から）　……　2
図４　作業状況（南東から）　……　2
図５　宮内庁職員向け説明会（北西から）　……　2
図６　調査後状況（北から）　……　2
図７　周辺調査位置図（１：2,500）　……　4
図８　断割位置図（１：150）　……　9
図９　断割１・２実測図（１：50）　……　10
図10　礎石列１実測図（１：50）　……　11
図11　土坑133北部断割断面図（１：50）　……　11
図12　階段113実測図（１：50）　……　12
図13　溝40実測図（１：50）　……　14
図14　礎石34、集石30、土坑66実測図（１：50）　……　15
図15　土坑８・11実測図（１：40）　……　16
図16　溝７・13断面図（１：40）　……　16
図17　その他の出土土器　……　22
図18　金属製品実測図（１：２）　……　22
図19　土層模式図（１：40）及び遺構変遷図１（１：500）　……　26
図20　遺構変遷図２（１：500）　……　27
図21　堆積構造模式図　……　28
図22　調査地周辺で確認された洪水関連の堆積層分布図（１：7,500）　……　30
図23　半世紀ごとの鴨川の洪水回数　……　31

表　目　次

表１　周辺調査一覧表 …… 5
表２　遺構概要表 …… 8
表３　遺物概要表 …… 18
表４　石室98出土土師器の口径分布表 …… 19
表５　調査地周辺における洪水関連堆積層一覧表 …… 29

付　表　目　次

付表１　土器観察表 …… 33
付表２　金属製品観察表 …… 38

平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡

１．調査経過

本調査は京都大宮仙洞御所消火施設整備工事に伴う発掘調査である。調査地は平安京左京一条四坊十町跡および公家町遺跡、京都新城跡に該当する（図１）。今回の調査に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）により調査地内で試掘調査が実施された。その結果、江戸時代の遺構面が良好に遺存していることが確認されたため、宮内庁に発掘調査の指導がなされた。発掘調査は工事施工者である大亀工務店から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

調査は、文化財保護課の指導により南北22.5ｍ、東西12ｍの計約270㎡が対象範囲となった（図２・３）。のちに遺構の規模を確定するため拡張を行い、調査面積は総計約278㎡となった。2022年６月６日から開始し、４面の調査を行った。なお、工事掘削深度の関係から、標高48.27ｍよりも高い位置で検出した遺構面までを調査対象とした。その結果、江戸時代の建物、石垣、溝などの遺構を検出した（図４）。さらに下層確認のための断割調査を実施したあと、図面作成・写真撮影などによる記録作業を行い、2022年８月12日に調査を終了した（図６）。

調査中は適宜、文化財保護課による臨検および、検証委員である同志社大学歴史資料館の浜中邦弘准教授の視察を受けた。また、2022年８月５日に宮内庁職員向けの説明会を行った（図５）。

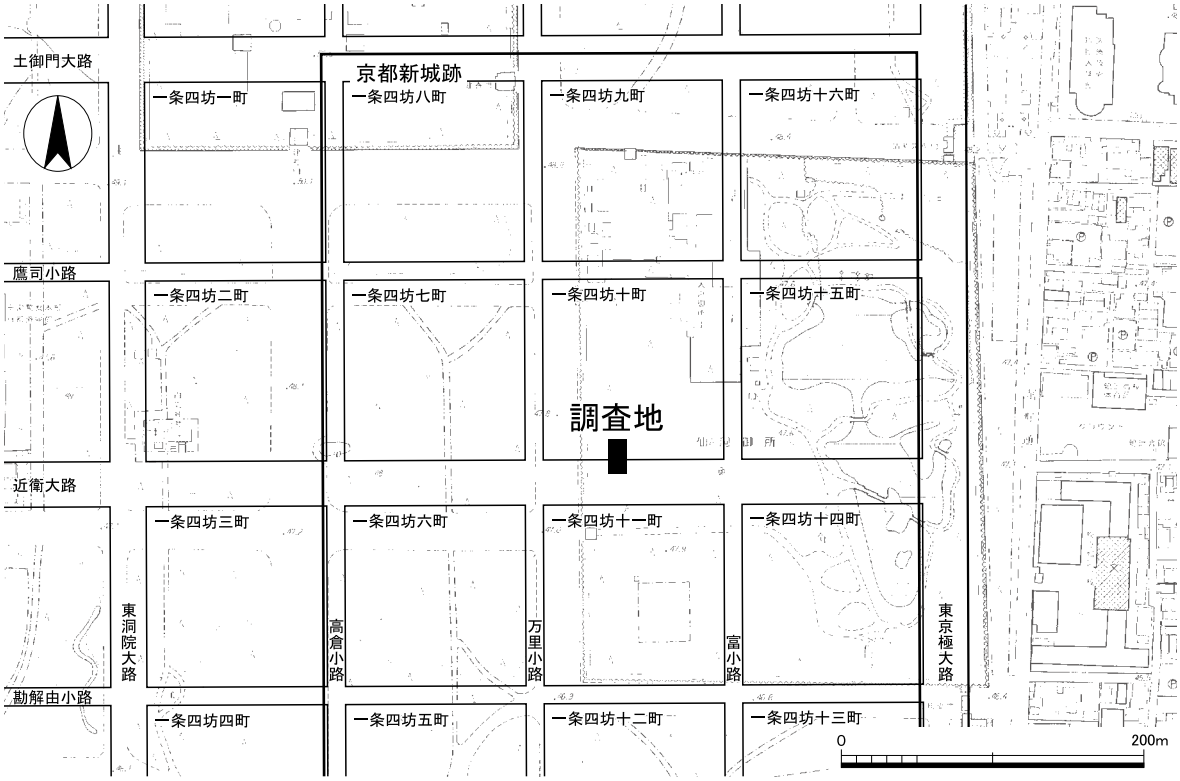


図１　調査位置図（１：5,000）

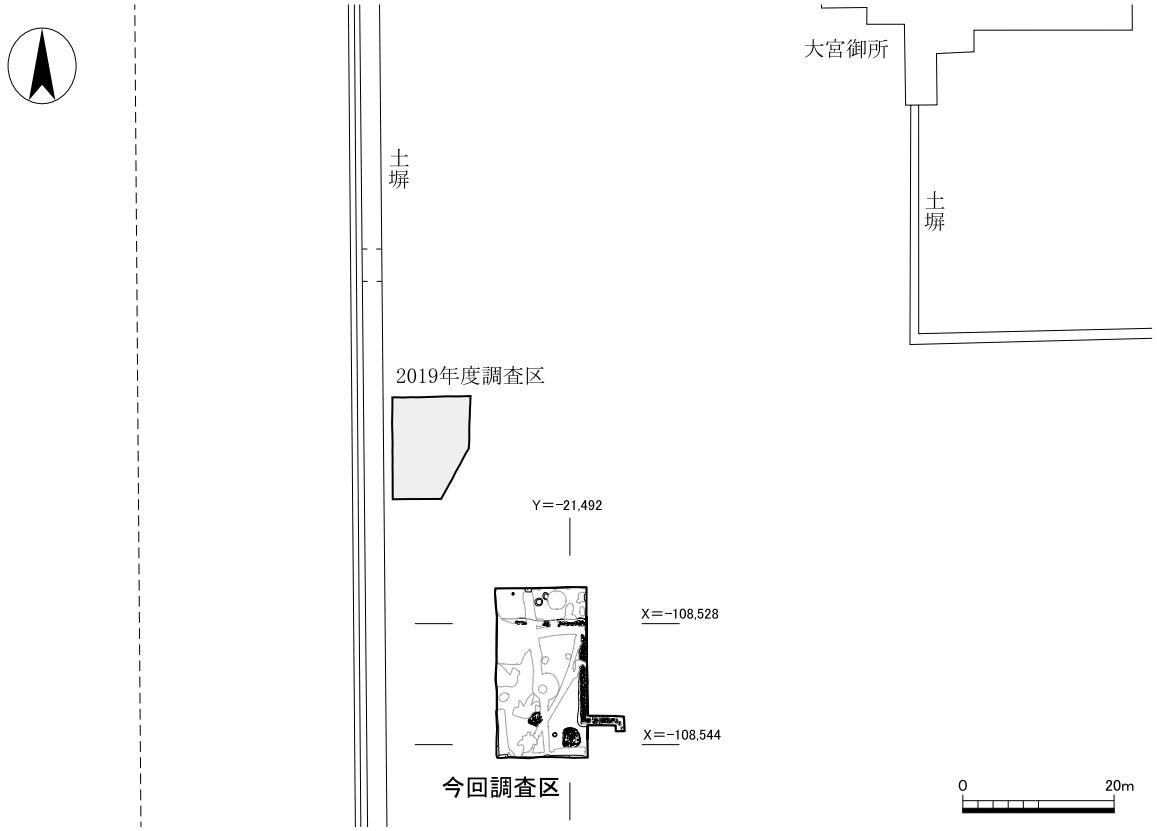


図２　調査区配置図（１：1,000）

図３　調査前全景（北から）

図４　作業状況（南東から）

図５　宮内庁職員向け説明会（北西から）

図６　調査後状況（北から）

２．位置と環境

（１）歴史的環境と立地

調査地は、京都盆地東部を北から南に流れる鴨川右岸の扇状地上に位置する。この扇状地は、鴨川上流の賀茂川・高野川一帯に分布する砂岩やチャートが堆積して形成される。

調査地は、平安時代には平安京の北東部に位置する。調査地である京都大宮仙洞御所は、平安京の条坊では左京一条四坊九・十・十一・十四・十五・十六町に該当し、平安時代中期には十町に藤原惟憲（これのり）邸、十五町に藤原道長邸が、後期には十四町に藤原重方邸が存在したとされる[1)]。この時期、調査地北西部にあたる左京北辺四坊二町の土御門東洞院邸は、たびたび里内裏とされた。当邸は、鎌倉時代後期以降に常置の内裏となり、現在の京都御所の原形となった。内裏は、火災による焼失と再建を繰り返しながら、天正17年（1589）に豊臣秀吉により改修され、周辺には公家町が成立する。

慶長２年（1597）、調査地の位置する内裏南東側で、豊臣秀吉が京都新城を築造する。しかし、同３年（1598）に秀吉が死去し、京都新城は同４年（1599）に秀吉の正室である高台院の屋敷に利用される。同５年（1600）には堀・石垣などの防御施設が撤去された。寛永元年（1624）に高台院が死去した。

寛永４年（1627）、幕府は高台院屋敷地を利用して仙洞御所の造営を開始、同７年（1630）後水尾上皇が移徙（いし）した。仙洞御所は、東宮御所や仮内裏として利用される時期を除き、上皇の住まいとなる。江戸時代を通して、後水尾、霊元、中御門、桜町、後桜町、光格の６名の上皇によって利用される。なお、仙洞御所北隣には女院御所が造営された。仙洞・女院両御所の建物は、万治４年（1661）、寛文13年（1673）、延宝４年（1676）、貞享元年（1684）、宝永５年（1708）、天明８年（1788）、嘉永７年（1854）の計７回、火災により焼失しており、その度に再建が繰り返されたが、嘉永７年（1854）の焼失後は女院御所（現在の大宮御所）のみ再建された。

仙洞御所跡地は、明治６年から13年（1873～1880）にかけて、第２～９回京都博覧会の会場として利用される。また大正４年（1915）と昭和３年（1928）には、大正・昭和両天皇の即位に伴い大嘗宮が建てられた。昭和３年（1928）以降は、現在まで空地となっている。

（２）既往の調査

周辺では、これまでに多数の調査を実施している。そのうち遺構が検出された調査について図７・表１にまとめた。以下では室町時代以降の御所造営に関わる遺構を検出した主要な調査を時期ごとに取り上げ、概要を述べる。

宝永の大火まで（～1708年）の遺構

調査２では、公家町成立直前の遺構を検出した。富小路路面、16世紀中頃から17世紀初頭までの南北方向の堀（幅約６ｍ、深さ約２ｍ）などがある。また、17世紀後半頃の洪水堆積層を検出し

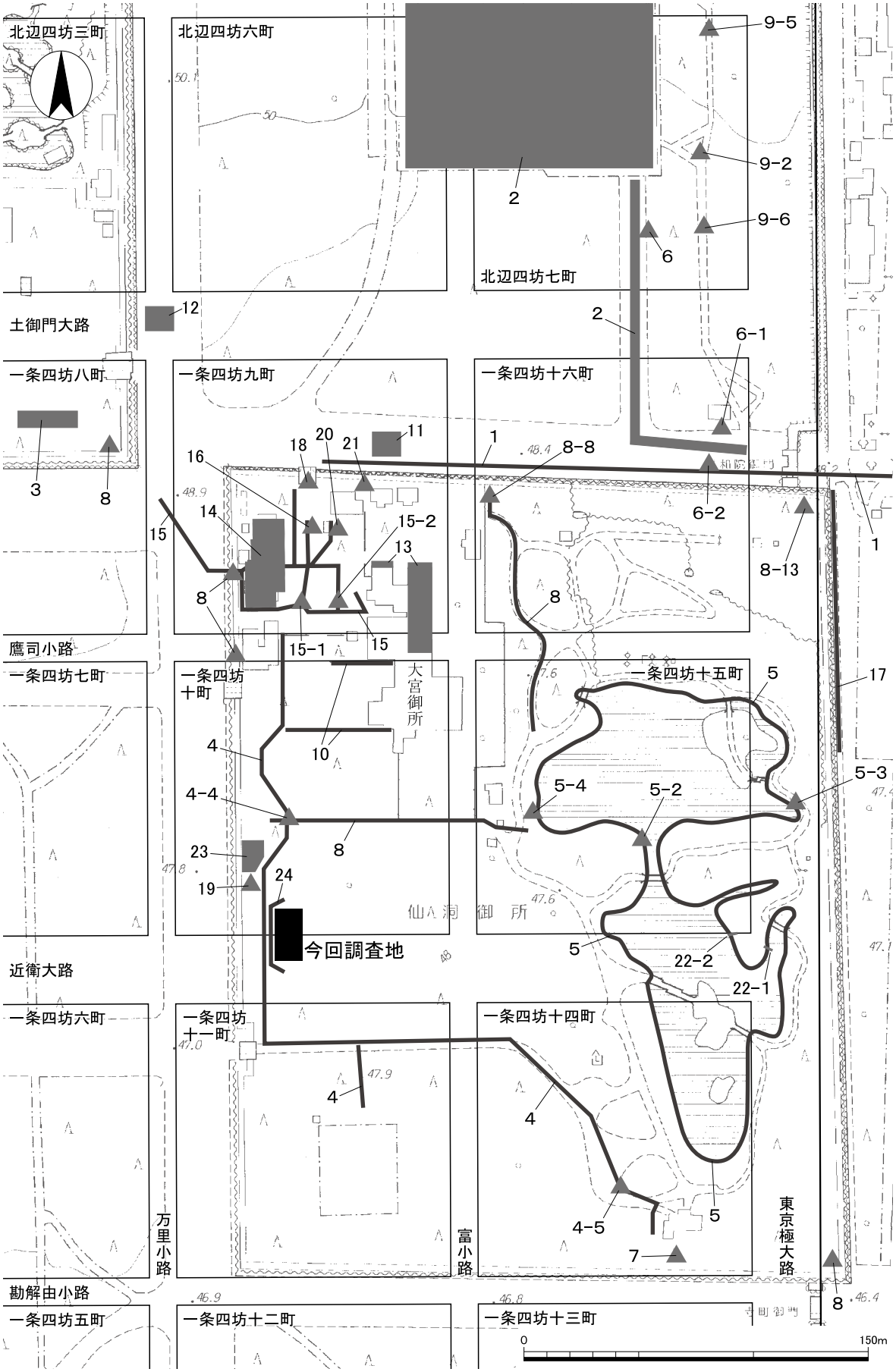


図７　周辺調査位置図（１：2,500）

表１　周辺調査一覧表

番号	条坊・遺跡名	調査方法	調査期間	調査概要	調査記号	文献番号
1	一条三・四坊、二条三・四坊	立会	1983/10/01～12/16	平安時代(10世紀後半)の遺物包含層、近世の南北方向の築地状遺構・土坑。	83HK-G-010-16	1
2	北辺四坊五～八町、一条四坊十六町跡	発掘	1997/05/19～2001/11/30	飛鳥時代以前の流路、平安時代の園池・道路、鎌倉時代の地業・道路、室町時代の堀、桃山時代から江戸時代の公家町の成立と変遷をたどる遺構群を検出。		2
3	一条四坊八町跡	発掘	1999/03/01～03/26	寛政期造営の築地を検出。		3
4	一条四坊九～十一・十四町跡	立会	1999/07/15～08/24	№４：江戸時代の境界築地とそれに付随する東西溝を検出。 №５：宝永・寛政期造営の御文庫の雨落ち溝を検出。	99HL125	4
5	一条四坊十四・十五町跡	立会	2000/01/25～03/07	№２・３：地表下－0.3mで近世の包含層、－0.5mで平安時代から鎌倉時代の遺物包含層を検出。 №４：東西方向の石組溝を検出。	99HL370	5
6	北辺四坊七町、一条四坊十六町跡	立会	2000/10/31～11/13	№１：地表下－0.8mで平安時代の池状堆積・景石を検出。土御門殿の庭園遺構の可能性がある。地中保存した。 №２：平安時代後期の包含層を検出。－0.7mで江戸時代の東西方向の石組溝を検出。	00HL228	6
7	一条四坊十四町跡	立会	2001/01/16	地表下－0.35mまで現代盛土。	00HL300	7
8	一条四坊十・十五・十六町跡	立会	2001/03/06～04/10	№８：江戸時代前期の流れ堆積、江戸時代中期・末期の焼土層を検出。№13：現存の築地塀基礎下から石組を検出。	00HL362	7
9	北辺四坊七・八町跡	立会	2001/05/25～06/01	№５：地表下－0.38mで江戸時代の水抜施設の石組土坑を検出。№６：－1.05mで室町時代前期の包含層、－1.6mで鎌倉時代の包含層を検出。	01HL054	7
10	一条四坊十町跡	立会	2001/09/17～09/25	地表下－0.2mで焼土を含む整地層を検出。	01HL196	7
11	一条四坊九町跡	発掘	2002/07/22～09/04	江戸時代前期の鷹司邸の築地や土蔵を検出。		8
12	一条四坊九町跡	発掘	2001/09/17～10/24	江戸時代中頃の礎石建物、江戸時代後半の道路を検出。		8
13	一条四坊九町跡	発掘	2006/01/06～01/23	江戸時代後半の土坑を検出。		9
14	一条四坊九町跡	発掘	2015/09/07～12/08	大宮御所(女院御所)跡地。宝永の大火(1708年)後から慶応３年(1867)の建物跡、宝永の大火後に撤去された塀の基礎を検出。		10
15	一条四坊九町跡	立会	2015/07/23～2016/01/28	調査11の延長と思われる東西方向の築地基底部を検出。推定宝永火災前の女院御所北築地。	14HL067	11
16	一条四坊九町跡、公家町遺跡	立会	2017/01/23～11/17	地表下－0.21mでオリーブ褐色泥砂、－0.28mで鈍い黄褐色泥砂(時期不明包含層)、－0.41mで灰黄褐色粗砂(時期不明洪水層)、－0.47mで灰黄褐色微砂、－0.55mで赤褐色炭混泥砂(時期不明焼土層)、－0.66～0.7mで灰黄褐色泥砂。	16H154	12
17	北辺三坊八町・一条四坊十六町跡、公家町遺跡	立会	2017/02/21	地表下－0.31mで鈍い黄褐色泥砂(近世包含層)、－0.54mで褐色泥砂(時期不明包含層)、－0.63～0.7mで暗褐色泥砂(時期不明包含層)。	16H631	12
18	一条四坊九町跡、公家町遺跡	立会	2017/12/06	地表下－0.22mで大宮御所北築地基礎石を検出。－0.1～1.67mで青灰色粘質土(時期不明包含層)。	17H081	12
19	一条四坊十町跡、公家町遺跡	試掘	2017/11/26	地表下－0.2m以下、公家町遺跡に関する遺構面を複数確認。	17H330	13
20	一条四坊九町跡	立会	2018/01/29	地表下－0.7mまで盛土。	16H154	14
21	一条四坊九町跡	立会	2018/03/12～03/13	地表下－0.75mまで盛土。	17H774	14
22	一条四坊十五町跡、公家町遺跡	発掘	2019/07/20～08/02	出島が江戸時代後半に構築されたことが判明した。		15
23	一条四坊十町跡、公家町遺跡、京都新城跡	発掘	2019/11/05～2020/03/26	地表下－0.35m以下、仙洞御所に関する遺構面を複数確認。－1.75mで京都新城堀の西肩石垣を検出。		16
24	一条四坊十町跡、公家町遺跡、京都新城跡	試掘	2021/03/23～03/24	地表下－0.1m以下、仙洞御所に関する遺構面を確認。	20H631	17

た（標高48.6ｍ前後）。さらに、宝永の大火以前の公家町を検出した。中筋通（内裏東側の公家町内の南北道路）東側溝、二階町通西側溝、旧清和院通南側溝、宅地境界塀、建物、蔵、穴蔵、竈、井戸、石組、埋甕、池などの遺構がある。

調査３では、宝永の大火以前の洪水堆積層（標高49.3ｍ以下）と、大火で被災した内裏南側路面を検出した。

調査８－８では、江戸時代前期の流れ堆積（洪水に関連か）を検出した（標高48.4ｍ前後）。

調査11では、寛文の火災（1673年）で焼失した鷹司邸の土蔵、石室、瓦積み築地、鷹司邸北限溝（中筋通の側溝南西隅でもある）を検出した（第４面）。また、宝永の大火で焼失した鷹司邸（のち後水尾院、朝仁親王仮御所）の建物を検出した（第２面、標高49.2ｍ前後）。

調査12では、宝永の大火以前の公家屋敷に関する通路状遺構、土坑を検出した（第３面）。また、宝永の大火で焼失した花山院邸の建物（第２面）を検出した。

調査14、調査15－１・２では、宝永の大火以前の鷹司邸南限（女院御所北限）とみられる塀基礎を検出した。調査11では塀基礎には被熱痕が確認できた。

宝永度造営から天明の大火まで（1708～1788年）の遺構

調査２では、宝永の大火後から天明の大火までの公家町を検出した。中筋通東側溝、二階町通東西側溝、旧清和院通南側溝、宅地境界溝・塀、建物、穴蔵、井戸などの遺構がある。

調査３では、天明の大火で被災した内裏南側路面を検出した。

調査12では、宝永の大火以降の内裏東側路面を検出した（第１面）。

調査13では、天明の大火で被災したと考えられる遺構面を検出した。また、遺構面直下で砂礫層（洪水に関連するか）を検出した。

調査14では、宝永度造営の女院御所に伴う塀、溝、埋甕（手水か）、集水桝を検出した（第４面、標高48.7ｍ前後）。また、天明の大火で被災した遺構面を検出した（第３面）。

寛政度造営から嘉永の火災まで（1789～1854年）の遺構

調査２では、天明の大火後から明治時代初頭までの公家町を検出した。中筋通東側溝、二階町通東西側溝、旧清和院通南側溝、宅地境界の溝・塀、建物、蔵、穴蔵、能舞台、井戸、埋甕、池などの遺構がある。

調査３では、寛政度内裏の造営面（嘉永の火災で被災）と東築地を検出した。

調査14では、文化度造営の女院御所（1817年）に伴う地下道（嘉永の火災で被災、慶応度に修復）、溝、土坑（井戸か）などを検出した（第２面）。

安政度造営以降（1855年～）の遺構

調査２では、昭和御大典（1926年）に伴う饗宴場を検出した。

調査３では、安政度内裏の造営面を検出した。

調査14では、明治時代の土蔵、大正御大典（1915年）に伴う御車舎、昭和御大典（1926年）に伴う遺構を検出した（第１面）。

註

１）　古代学協会・古代学研究所『平安京提要』角川書店　1994年　pp205-206

文献一覧表（表１　周辺調査一覧表の文献番号に対応する）

１　百瀬正恒「平安京左京一条三・四坊、二条三・四坊」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年

２　丸川義広ほか『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年

３　長戸満男「平安京左京一条四坊」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2000年

４　吉本健吾ほか「平安京左京北辺四坊二町、一条三坊十六町、四坊一・九・十・十一・十四町（98HL348・375、99HL125）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成11年度』 京都市文化市民局　2000年

５「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報　平成12年度』 京都市文化市民局　2001年

６　内田好昭ほか「平安京左京北辺四坊七町、一条四坊十六町（00HL228）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成12年度』 京都市文化市民局　2001年

７「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報　平成13年度』 京都市文化市民局　2002年

８　鈴木久男ほか『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002－８　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年

９　木下保明『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005－14　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年

10　持田 透『平安京左京一条四坊九町跡・公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015－13　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2016年

11　奥井智子「平安京左京一条四坊九町跡・公家町遺跡（14H067）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成28年度』 京都市文化市民局　2017年

12「調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成29年度』 京都市文化市民局　2018年

13「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成29年度』 京都市文化市民局　2018年

14「調査一覧」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成30年度』 京都市文化市民局　2019年

15　近藤章子『平安京左京一条四坊十五町跡・公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019－３　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年

16　小檜山一良『平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019－11　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2020年

17　鈴木久史「平安京左京一条四坊十町跡，公家町遺跡，京都新城跡（20H631）」『京都市内遺跡試掘調査報告　令和３年度』 京都市文化市民局　2022年

３．遺　　構

（１）基本層序（図版７、図９）

西壁X=-108,541付近の土層堆積を基本層序として概略する（図版７）。層序は、現地表面から順に近現代盛土、整地層Ⅰ～Ⅴである。整地層Ⅰ～Ⅴは、それぞれ第１面・第２面・第３－ａ面・第３－ｂ面・第４面の造成に伴う整地層である。各遺構面の標高は、第１面が48.5～48.7ｍ、第２面が48.5～48.6ｍ、第３－ａ面が48.4～48.5ｍ、第３－ｂ面が48.3～48.4ｍ、第４面が48.1～48.3ｍで、北から南に下がる地形である。

また、調査区内に断割１～４を設定し、整地層Ⅴの下に、整地層Ⅵ、洪水堆積層、整地層Ⅶを確認した。整地層Ⅵ[1)]・Ⅶの上面では遺構面を確認し、標高はそれぞれ48.2ｍ前後、47.3ｍ前後である。さらに、整地層Ⅶの下では、断割４（図版７）で整地層Ⅷを、断割１・２（図９）で基盤層を確認した。

（２）室町時代から江戸時代前期（断割調査区）の遺構（図８・９）

ここでは、断割調査区ごとに記述する。

断割１（図９）　調査区北部の石室70を利用して、南北約2.5ｍ、東西約1.2ｍの断割調査区を設定した。石室70の床面構築土（図版11－９層）直下の標高46.6ｍ前後で、土坑134～136・141・142を検出した。上面は石室70の構築により削平される。平面形・規模は不明である。各土坑は、にぶい黄褐色粘土の基盤層を掘り込んで成立しており、各土坑の間隔は密である。土取りに伴う土坑群とみられる。土坑134・136から９Ｃ段階[2)]（15世紀後半頃）の土師器皿Ｓ、４条擂目をもつ信楽産擂鉢の破片が出土した。

断割２（図９）　調査区北部の土坑を利用して、南北約1.9ｍ、東西約1.9ｍの断割調査区を設定した。標高47.2ｍ前後、整地層Ⅶ上面で遺構面を確認した（図９－３層上面）。さらに、標高46.6ｍ前後で基盤層を確認した。

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
室町～江戸時代前期 （断割調査区）	土坑134～136・141・142、整地層Ⅷ（京都新城堀埋土）	
江戸時代前期 （第４面）	礎石列１、溝95、石列121、土坑104・116・133・137・149	遺構面は被熱
江戸時代中期 （第３－ｂ面）	石室89・98、階段113、溝75、土坑32・41・50・59・65・67・117・122、土器溜60	
江戸時代後期 （第３－ａ面）	石室70、溝40、土坑139	遺構面は被熱
江戸時代後期 （第２面）	礎石34、溝15、土坑66、集石30	遺構面は被熱
近代 （第１面）	土坑８・11、溝７・13	大正御大典（1915年）時の整地面

断割３　調査区中央部の石室98を利用して、南北約1.5ｍ、東西約0.3ｍの断割調査区を設定した。石室98の床面構築土（図版10－10層）直下の標高46.6ｍ前後で礫層を検出した。礫層は直径15㎝以下の円礫を主体とし、10YR2/3黒褐色細砂が混じる。標高46.5ｍまで確認できた。

断割４（図版７）　調査区南西部の攪乱を利用して、南北約2.0ｍ、東西約1.0ｍの断割調査区を設定した。標高47.4ｍ前後、整地層Ⅶ上面で遺構面を確認した（図版７－31層上面）。さらに、標高47.1ｍ前後で京都新城の堀埋土の可能性がある整地層Ⅷを確認した。整地層Ⅷはボーリングステッキによる調査で標高46.2ｍまで確認できた。

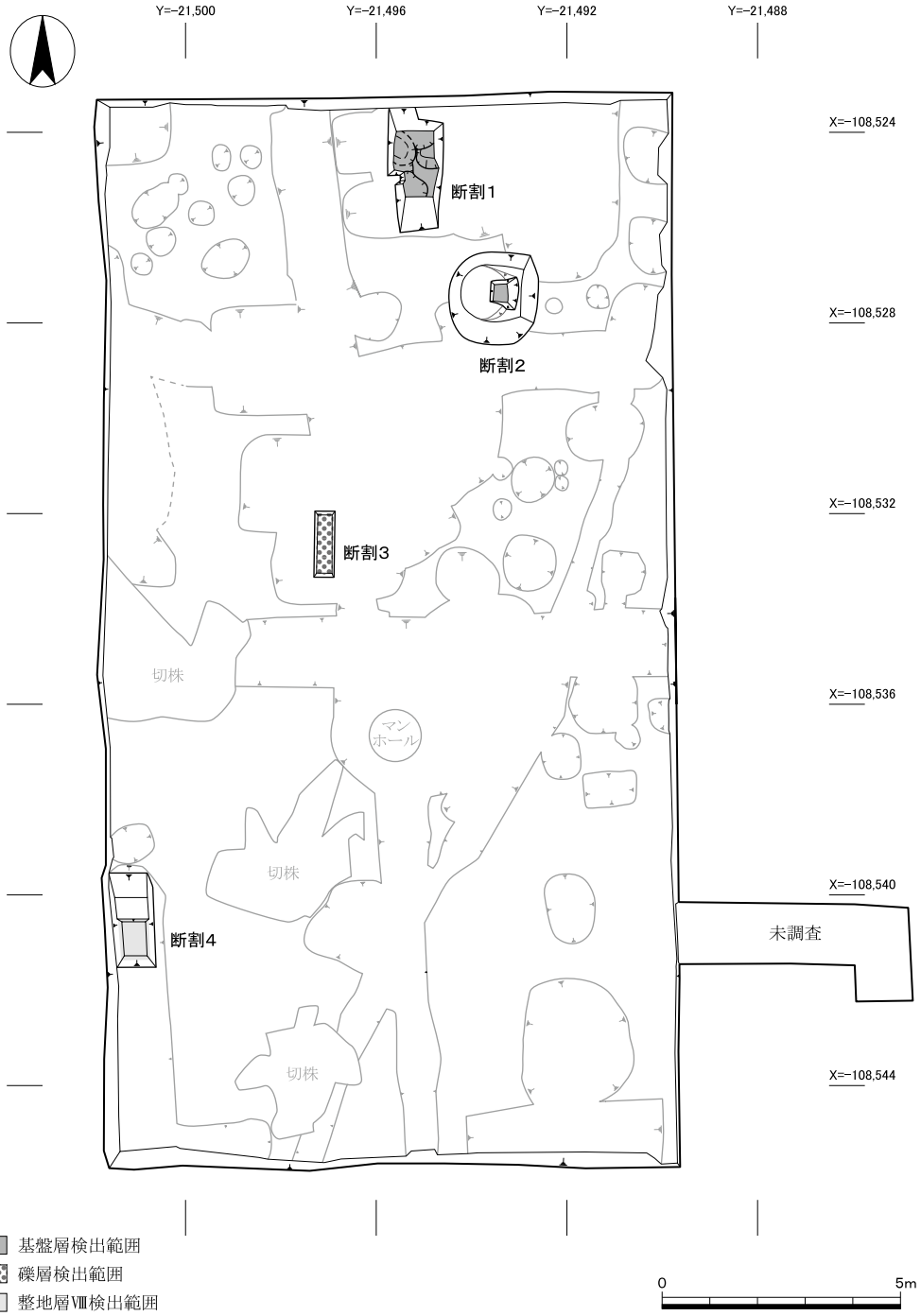


図８　断割位置図（１：150）

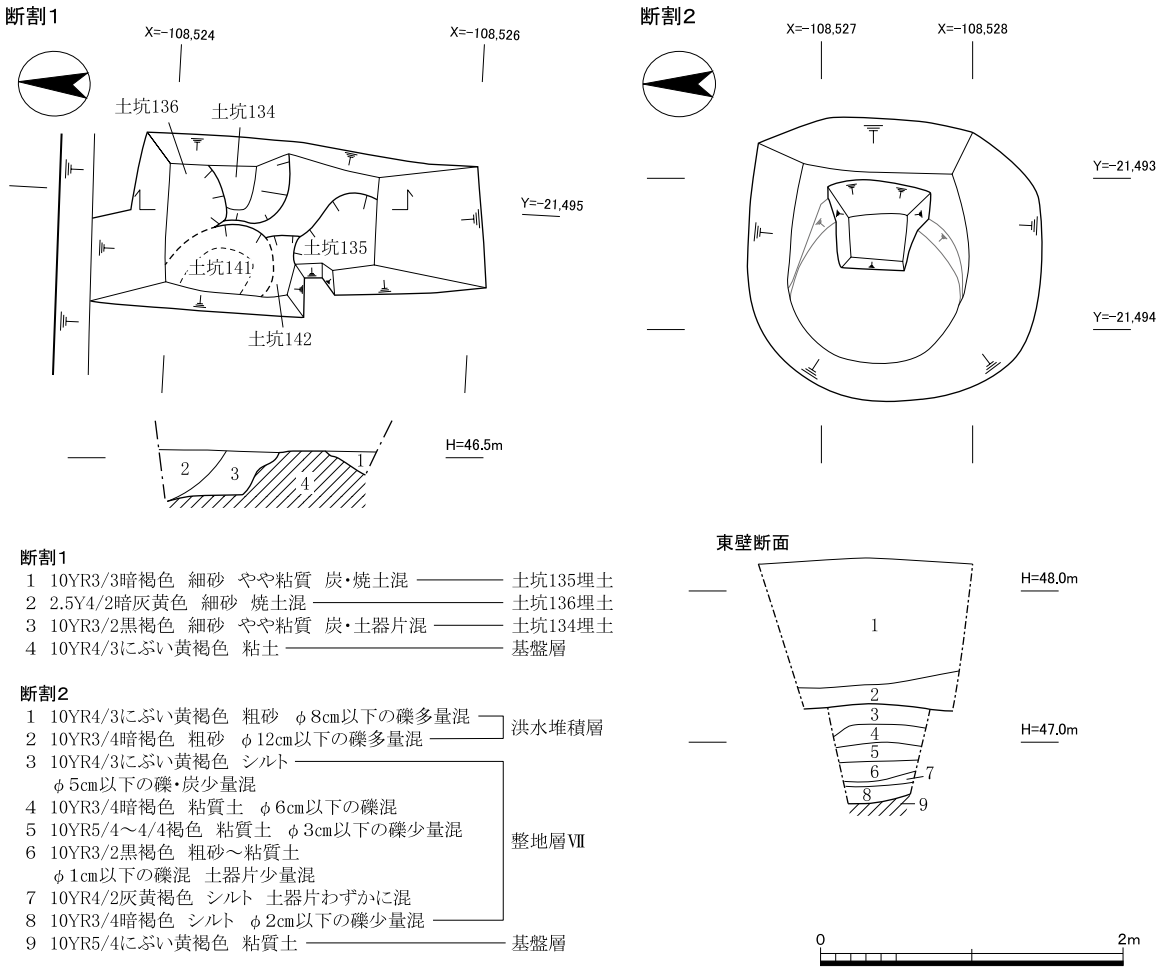


図９　断割１・２実測図（１：50）

（３）江戸時代前期（第４面）の遺構（図版１・17）

江戸時代前期の遺構面（第４面）上で成立する礎石列１、溝95、石列121、土坑104・116・133・137・149を検出した。調査区中央に東西方向の溝95があり、溝以北には礎石列や土坑が集中する。溝以北の遺構面は被熱により赤く変色している。

礎石列１（図10、図版17）　調査区中央東側で検出した。２つの礎石は南北に並び、柱間は約2.0ｍある。北側の礎石79は、一辺約0.4ｍ、厚さ約0.2ｍで上面が平坦な石材である。南側の礎石80は、一辺約0.3ｍ、厚さ約0.1ｍの上面が平坦な石材である。上面が被熱しており、中央に一辺約12cm（４寸）の角柱の炭化痕が残る。

溝95（図版８・17）　調査区中央を東西に延びる石組溝である。東側は調査区外に続き、西側は攪乱により削平される。検出長約9.1ｍで、内法幅約0.4ｍ、深さ約0.2ｍある。掘形は幅約1.5ｍ、深さ約0.3ｍある。方位は北に対し約0.2度西に振る。溝側面の石材は長軸0.3～0.5ｍ、短軸約0.2～0.3ｍ、厚さ約0.2ｍある。溝底面には石材が据えられるが、遺存状況が悪く標高は確認できない。埋土は炭を多量に含むにぶい黄褐色粘質土で、18世紀代の土師器皿が出土した。

石列121（図版７）　調査区南西隅、西壁際で検出した南北方向の石列である。遺構は石組溝東

肩の可能性がある。東半は攪乱に削平され、南端は調査区外に続く。北端で掘形が途切れることから、石列は西側に屈曲する可能性がある。掘形は検出長約3.6ｍ、深さ約0.2ｍある。石材は一辺約0.3ｍ、厚さ約0.2ｍで、西面する。上面は平坦で被熱しており、直上に炭と焼土が堆積する。また、石列西側にも炭と焼土が堆積しており溝埋土の可能性がある（図版７－21層）。

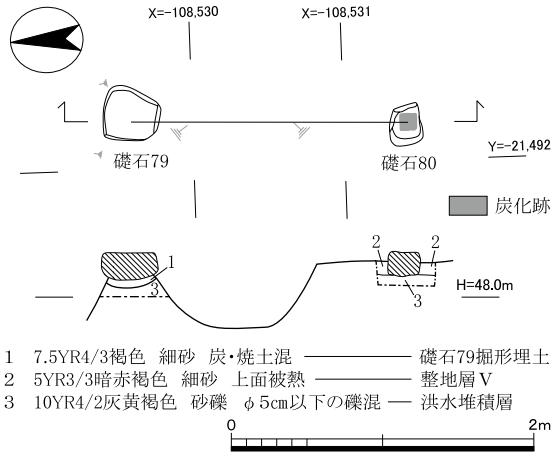


図10　礎石列１実測図（１：50）

土坑104　調査区南西隅、南壁際で検出した。西側は攪乱に削平され、南側は調査区外に続く。掘形の平面形は不明で、検出長は南北約0.8ｍ、東西約1.0ｍ、深さは約0.3ｍある。掘形に厚さ約0.1ｍの褐色粘土を貼りつける。

土坑116・137・149　調査区中央部から北西部にかけて検出した土坑である。

土坑116は調査区北西部で検出した。中央部と東側は攪乱に削平される。掘形の平面形は方形とみられ、南北約2.3ｍ、東西検出長約1.9ｍある。内部は多量の礫で埋まる。

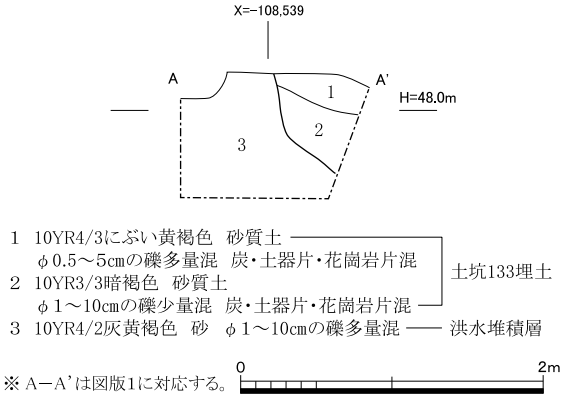


図11　土坑133北部断割断面図（１：50）

土坑137は調査区北西部で検出した。東側は攪乱に削平される。掘形の平面形は隅丸方形とみられ、南北約2.0ｍ、東西検出長約1.5ｍある。内部は多量の礫で埋まる。

土坑149は調査区中央東部で検出した。中央部は溝95に、西側は後述する石室89に削平される。掘形の平面形は隅丸方形で、南北約2.7ｍ、東西約2.8ｍある。内部は多量の礫で埋まる。

これらの土坑は、規模や埋土が本調査検出の石室と類似することから、室の可能性がある。

土坑133（図11）　調査区南東部で検出した。東側は攪乱により削平される。平面形は不定形とみられ、検出長は南北約5.5ｍ、東西約5.2ｍある。北肩は断割、南肩は土坑66の底面で確認した。内部には瓦片や花崗岩片が多量に混じる。その規模から部分的な整地の可能性もある。

（４）江戸時代中期（第３－ｂ面）の遺構（図版２・18）

江戸時代中期の遺構面（第３－ｂ面）上で成立する石室89・98、階段113、溝75、土坑32・41・50・59・65・67・117・122、土器溜60を検出した。調査区中央、東西方向の溝75より北側の遺構面は、被熱により赤く変色し、石室などの遺構が集中する。

石室89（図版９）　調査区中央部で検出した。南西部が攪乱に削平される。掘形の平面形は隅丸方形で、東西約2.6ｍ、南北約2.3ｍ、深さは約1.1ｍある。掘形底に厚さ約0.2ｍの床面を構築した上に石材を積む。石積みの平面形は方形である。内法で一辺約1.7ｍ、深さ約1.3ｍある。石材は、

長軸約0.2～0.5ｍ、短軸約0.2ｍ、厚さ約0.05～0.2ｍで、８段分が残存する。

石室98（図版10） 調査区中央で検出した。掘形の平面形は隅丸方形で、一辺約2.7ｍ、深さは約1.3ｍある。掘形底に厚さ約0.1ｍの床面を構築した上に石材を積む。平面形は南北に長軸をもつ長方形である。規模は内法で南北約1.6ｍ、東西約1.3ｍ、深さは約1.2ｍある。石材は、長軸約0.2～0.7ｍ、短軸約0.1～0.4ｍ、厚さ約0.2～0.4ｍで、石室70・89と比較して大ぶりである。５段分が残存し、一部の石材には転用材や矢穴が確認できるものがある。矢穴の大きさは長辺４～７㎝、深さ５～６㎝で、矢穴間隔は３～６㎝である。埋土から18世紀代の土師器皿が多量に出土した。土器類以外では、ミニチュア土製品の釣瓶、軒丸瓦・平瓦・菊丸瓦、不明銅製品、貝類（ハマグリ・サザエ）などが出土した。

階段113（図12、図版18） 調査区北西隅で検出した石組みの階段である。北辺と西辺は調査区外に続く。掘形の平面形は不明で、検出長は東西約1.4ｍ、南北約1.4ｍ、深さは約0.8ｍある。掘形は西側が東側よりも約0.2ｍ段差をもって低くなる。石材は側壁部の耳石と、段差部の踏石がある。耳石は長軸約0.3ｍ、短軸と厚さは約0.15ｍで、３段分を検出した。踏石は長軸約0.6ｍ、短軸約0.25ｍ、厚さ約0.2ｍで、上下２段分を検出した。階段の構築は、掘形を階段状に掘削したあと、掘形西側の一段低い地点に、下段耳石と下段踏石を据え、その周辺を掘形東側の高さまで埋める。次に中段耳石と上段踏石を据え、その周辺を掘形上端の高さまで埋める。最後に上段耳石を据える。石組みの階段は、類例から石室や石積み井戸に伴うものであると考えられる[3)]。

溝75（図版９） 調査区中央部で検出したＬ字形の石組溝である。北端は攪乱に、東端は後述する溝15に削平される。検出長は東西約5.8ｍ、南北約0.8ｍ、内法幅約0.3ｍ、深さ約0.05ｍある。掘形は幅約0.8ｍ、深さは約0.2ｍある。方位は北に対し約0.4度西に振る。溝側面の石材は長軸約0.3～0.4ｍ、短軸と厚さは約0.2ｍある。溝底面には石材が据えられ、西端・東端ともに標高48.27ｍである。埋土から18世紀代の土器が出土した。

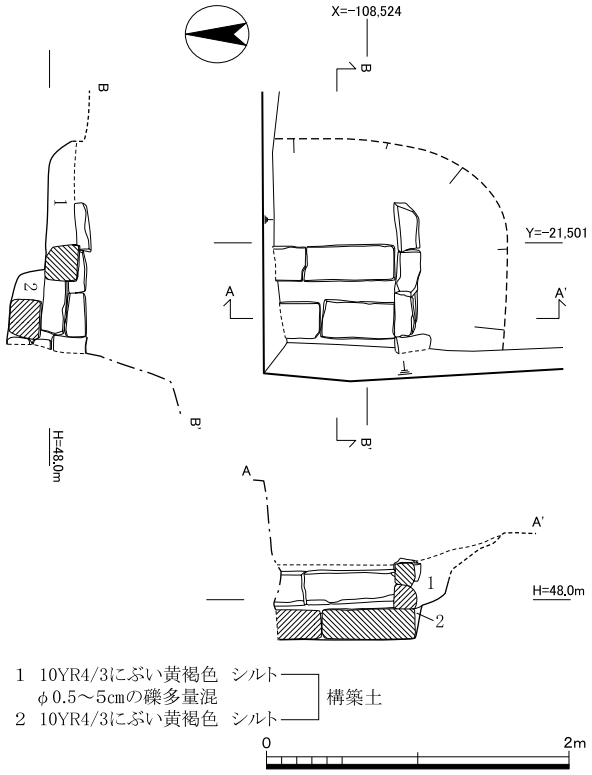


図12 階段113実測図（１：50）

土坑117（図版９） 調査区南西部、西壁際で検出した。西側は調査区外に続く。平面形は楕円形とみられ、東西0.9ｍ以上、南北約0.8ｍ、深さは約0.3ｍある。底面中央部に一辺約0.4ｍ、厚さ約0.2ｍの石材を２段積みにする。石材の周囲には直径３～15㎝程度の多量の礫を充填する。

土坑50（図版７） 調査区中央部、西壁際で検出した。北側と南側は攪乱により削平され、西側は調査区外に続く。平面形は円形と

みられ、検出長が東西約0.3ｍ、南北約0.4ｍ、深さは約0.4ｍある。埋土から18世紀代の土器が出土した。土器類以外では、丸瓦・平瓦、寛永通寶などが出土した。

土坑59（図版７）　調査区中央部、西壁際で検出した。北側は攪乱により削平され、西側は調査区外に続く。平面形は円形とみられ、検出長が東西約0.4ｍ、南北約0.6ｍ、深さは約0.2ｍある。埋土から18世紀代の土器が出土した。土器類以外では、平瓦、銅線などが出土した。

土坑32・122（図版９）　調査区南東部で検出した。土坑32が土坑122を削平する。土坑32は、平面形が隅丸方形で、一辺約1.1ｍ、深さは約0.1ｍある。埋土下位に焼土層と炭層がある。土坑122は、平面形が楕円形で、南北約1.8ｍ、東西約1.2ｍある。埋土から瓦類が多量に出土した。

土坑41　調査区南東部で検出した。平面形は円形で、一辺0.8～1.0ｍ、深さは約0.5ｍある。埋土は下層に一辺0.3ｍ以下の花崗岩片を多量に含み、上層に同大の砂岩片を多量に含む。砂岩片はいずれも被熱により赤く変色する。

土坑65　調査区南東部で検出した。平面形は楕円形で、東西約0.8ｍ、南北約1.0ｍ、深さは約0.5ｍある。埋土から多量の瓦片が出土した。

土器溜60　調査区中央部、西壁付近で検出した。西・南・東側は後述する溝７・13に削平される。東西約0.1ｍ、南北約0.2ｍの範囲に多量の土師器蓋片が集積する。

（５）江戸時代後期（第３－ａ面）の遺構（図版３・18）

江戸時代後期の遺構面（第３－ａ面）上で成立する石室70、溝40、土坑139を検出した。遺構は調査区北半に集中する。調査区北半の整地層（整地層Ⅲ）中には焼土が多量に含まれる。

石室70（図版11）　調査区北部中央の北壁際で検出した。南側は攪乱により削平され、北側は調査区外に続く。掘形の平面形は隅丸方形とみられ、東西約2.5ｍある。掘形底に厚さ約0.2ｍの床面を構築した上に石材を積む。石積みの平面形は方形である。内法で一辺約1.0ｍ、深さは約1.4ｍある。石材は、長軸約0.2～0.4ｍ、短軸約0.2～0.3ｍ、厚さ約0.1～0.2ｍで、最大８段分が残存する。石材には、上面が約0.3ｍ四方に加工された転用材が含まれており、側面を再加工して転用する。埋土下位に焼土層（図版11－６層）、炭層（図版11－７層）が堆積する。炭層から18世紀代の土師器皿が多量に出土した。土器類以外では、軒丸瓦・軒平瓦・菊丸瓦などが出土した。

溝40（図13）　調査区北部中央部、北壁際で検出したコの字形の石組溝である。北側と南側は石室70や攪乱に削平される。検出長は東西約4.0ｍ、南北約2.0ｍ、内法幅約0.2ｍ、深さは約0.1ｍある。掘形は幅約0.9ｍ、深さ約0.3ｍある。方位は北に対し約1.8度西に振る。溝側面の石材は、長軸約0.3～0.4ｍ、短軸と厚さは約0.2～0.3ｍある。埋土から18世紀代の土器が出土した。

土坑139（図版６）　調査区北東部、北壁際で検出した。西側は石室70、溝40、攪乱に削平される。北側は調査区外に続く。掘形は検出長が東西約3.3ｍ、南北約3.8ｍ、深さは約0.35ｍある。掘形に厚さ約0.05ｍのにぶい黄褐色粘土を貼り付ける。埋土から多量の菊丸瓦が出土した。

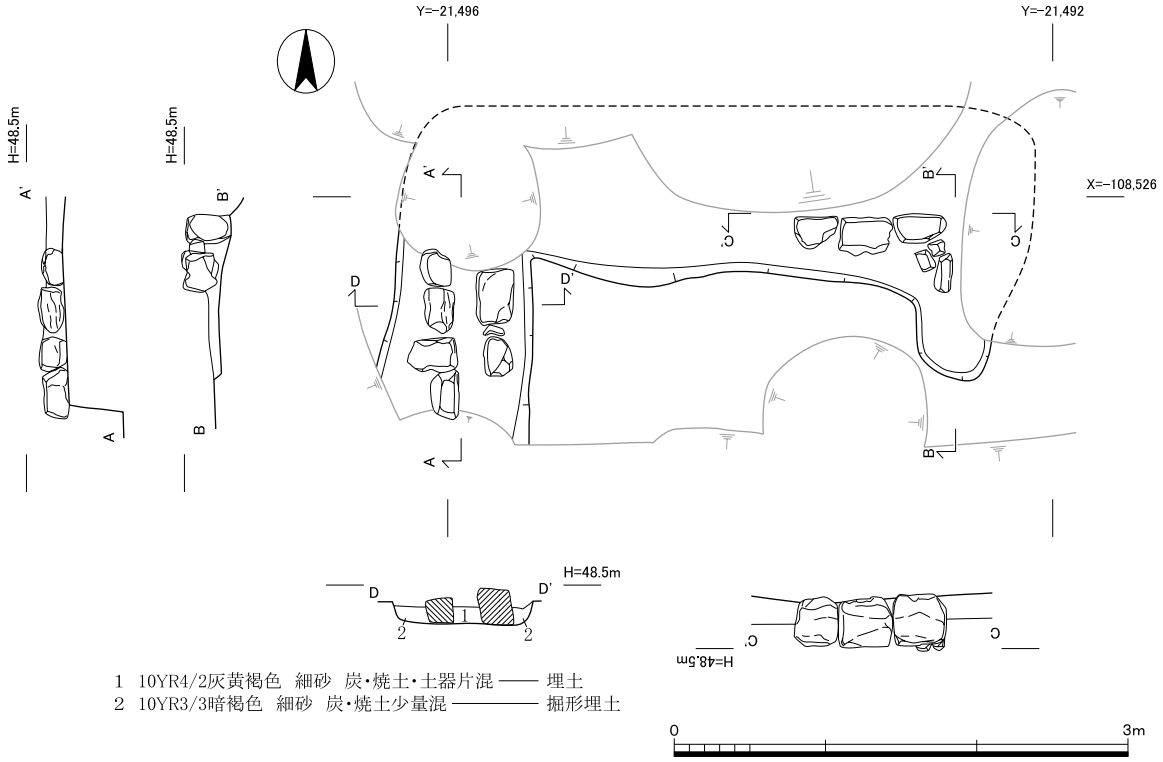


図13　溝40実測図（１：50）

（６）江戸時代後期（第２面）の遺構（図版４・21）

江戸時代後期の遺構面（第２面）上で成立する礎石34、溝15、土坑66、集石30を検出した。調査区北半の遺構面は被熱により赤く変色するが、遺構および遺構埋土中の遺物に顕著な火災痕跡はみられない。

礎石34（図14）　調査区北西部で検出した。掘形の平面形は円形で、直径約0.3ｍ、深さ約0.1ｍある。石材は、長辺約0.2ｍ、短辺約0.1ｍ、厚さ約0.2ｍの上面が平坦である。

溝15（図版12・13）　調査区北部から東部、拡張区にかけて検出した３箇所で屈曲する鉤の手形の石組溝である。調査区北部を西（地点Ａ）から東へ延び、東壁際で屈曲（地点Ｃ）、南へ延び、調査区南東部で再び屈曲する（地点Ｄ）。拡張区を東へ延び、さらに屈曲して（地点Ｅ）南東へ続く（地点Ｆ）。北西端（地点Ａ以西）は攪乱により削平され、南東端（地点Ｆ以南）は拡張区外へ続く。また地点Ａ－Ｃ間の南半、地点Ｃ－Ｄ間の北部、地点Ｄ－Ｆ間の一部は攪乱により削平される。

掘形は幅約1.0ｍ、深さ約0.3ｍある。石組みの心々での検出長は、地点Ａ－Ｃ間が約8.9ｍ、地点Ｃ－Ｄ間が約12.8ｍ、地点Ｄ－Ｅ間が約4.6ｍ、地点Ｅ－Ｆ間が約1.2ｍある。内法幅は約0.4ｍ、深さは約0.2ｍある。方位は、地点Ａ－Ｃ、Ｃ－Ｄ、Ｄ－Ｅ間で北に対し約１度西に振り、地点Ｅ－Ｆ間で北に対し約28度西に振る。側面の石材は、長軸約0.2～0.6ｍ、短軸約0.2～0.3ｍ、厚さ約0.2ｍで、矢穴が確認できるものがある。矢穴の大きさは長辺５～６㎝、深さ４～５㎝で、矢穴間隔は３～４㎝である。地点Ｂ－Ｃ間では石材を２段積みにし、地点Ｃ－Ｅ間では石材を１段とする。溝底面の石材は、長さ約0.05～0.4ｍ、厚さ約0.05ｍで、一部に平面三角形の転用材がある。底

面の標高は、地点Ｂで48.32ｍ、地点Ｃで48.34ｍ、地点Ｄで48.30ｍ、地点Ｅで48.28ｍ、地点Ｆで48.39ｍである。

なお、地点Ｃ付近で石積みの会所を検出した（図版12　Ａ－Ａ’断面東側ほか）。会所の南側は攪乱に削平される。掘形の平面形は不明で、検出長は東西約1.2ｍ、南北約1.1ｍ、深さ約0.5ｍある。石積みの平面形は方形とみられ、側面と底面に石材を据える。検出長は内法で東西約1.1ｍ、南北約0.6ｍある。深さは溝底面から会所底面まで約0.5ｍある。石材は、一辺約0.2～0.4ｍ、厚さ約0.1ｍで、溝底面から数えて３段分ある。底面の標高は47.75ｍである。埋土から19世紀代の土器とともに瓦が出土した。

土坑66（図14）　調査区南東部で検出した。南側は攪乱に削平される。平面形は不整形で、南北約2.6ｍ、東西約2.3ｍ、深さは約0.4ｍある。埋土から19世紀代の土師器皿が多量に出土した。土器類以外では、土人形の牛（中型）、軒瓦・桟瓦・塀瓦・菊丸瓦・輪違瓦、石硯、貝類（アカニシ）などが出土した。

集石30（図14）　調査区南部で検出した。東側は攪乱に削平される。平面形は不定形で、東西約1.7ｍ、南北約1.9ｍ、深さ約0.4ｍある。埋土中の石材は、長辺約0.4ｍ、短辺約0.2ｍの花崗岩と、直径約0.1ｍの円礫がある。花崗岩には加工されたものがある。

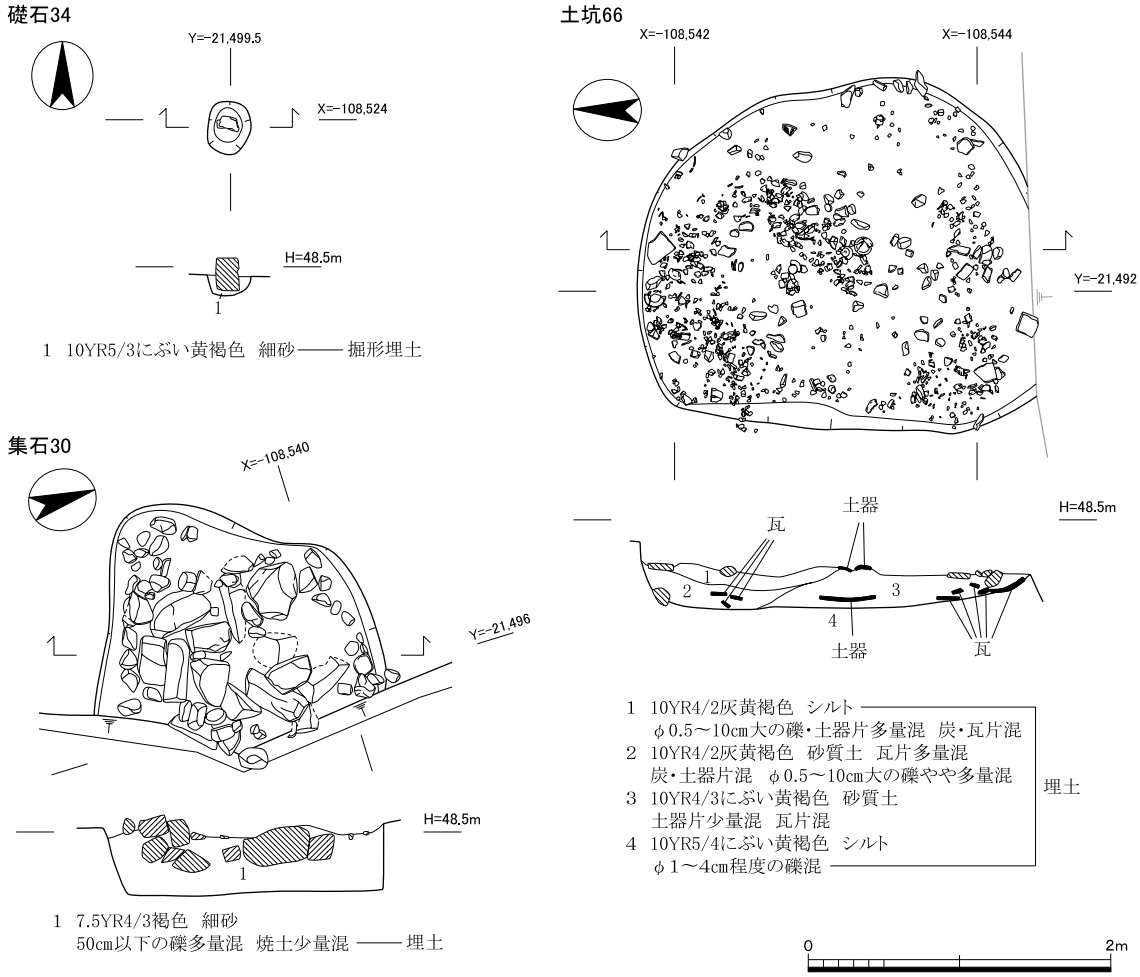


図14　礎石34、集石30、土坑66実測図（１：50）

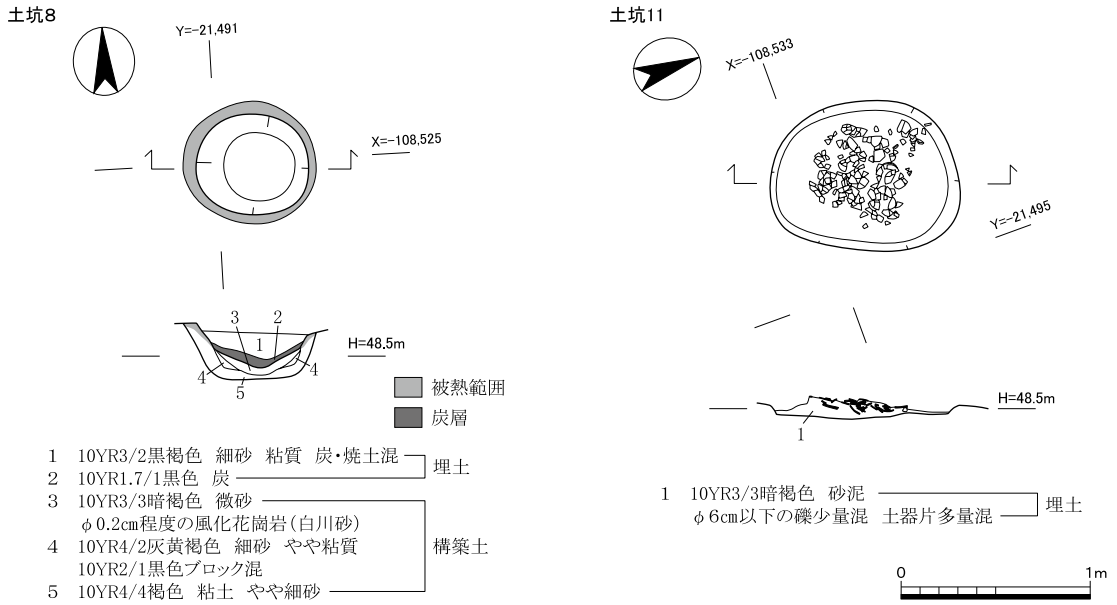


図15　土坑８・11実測図（１：40）

（７）近代（第１面）の遺構（図版５・23）

土坑８・11、溝７・13を検出した。土坑８、溝７は第１面化粧土（図版７－２層）直上で、土坑11、溝13は第１面化粧土直下で成立する。このほか、第１面化粧土直上、調査区南半で幅約0.05㎝、深さ約0.01㎝の轍痕と考えられる溝群を検出した。

土坑８（図15）　調査区北東隅付近で検出した。掘形の平面形は円形で、直径約0.7ｍ、深さは約0.3ｍある。掘形に厚さ約0.1ｍの褐色粘土を貼りつける。その規模は直径約0.6ｍ、深さ約0.2ｍある。平面形は円形である。埋土は下半にいわゆる白川砂[4)]を充填する（図15－３層）。白川砂上面を境に壁面粘土が被熱し、炭層が堆積する。炭層から炭化したイヌガヤの種子[5)]が出土した。

土坑11（図15）　調査区中央部で検出した。平面形は円形で、直径0.8～1.0ｍ、深さ約0.1ｍある。埋土から19世紀代の土師器皿が多量に出土した。

溝７・13（図16）　調査区南西から北東にかけて延びる素掘り溝である。溝13は、南西端が攪乱に削平される。北東端は溝15の石組みを削平して止まる。検出長約14.0ｍ、幅約0.6ｍ、深さは約0.5ｍある。溝７は新・古の２時期ある。溝７（新）は、溝13よりもやや西に主軸を振り、溝15を避けて北東側へ延びる。南西端・北東端ともに攪乱に削平される。検出長約17.0ｍ、幅約0.6ｍ、深さは約0.5ｍある。下部には土管や土管設置に伴う溝７（古）が部分的に残存する。底面の標高は、北東端が48.53ｍ、南西端が48.46ｍである。

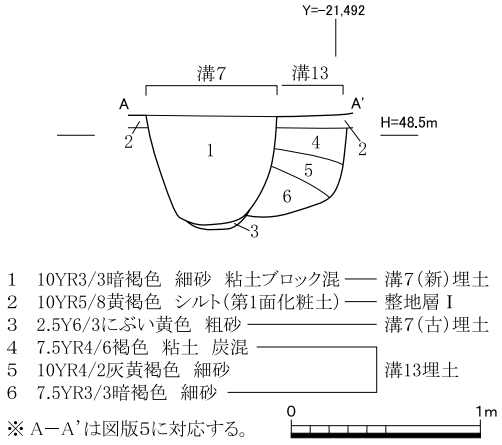


図16　溝７・13断面図（１：40）

土層断面の観察などから、溝の掘削は、溝13（廃

絶後の溝15石材に接触したため掘削中止）→溝７（古）（溝15を避けて掘り直し、土管設置）→整地層Ⅰ（第１面化粧土）敷設→溝７（新）（土管抜き取り）の過程が考えられる。溝７・13からは19世紀以降の土器が出土した。土器類以外では、土管、軒桟瓦などが出土した。

註

１）　断割調査により、洪水堆積層と整地層Ⅴの間に整地層Ⅵがあることが判明した。上面は赤色に変色し、火災により被熱しているようにみえる。また上面から遺構が成立していることから、遺構面の可能性がある。

２）　土師器皿の型式・年代については、平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年　に準拠する。

750年　840年　930年　1020年　1110年　1170年　1260年　1350年　1410年　1500年　1590年　1680年　1740年　1800年　1860年

1			2			3			4			5		6			7			8		9			10			11			12		13		14	
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	A	B

３）　なお、調査終了後に調査区西隣で行われた文化財保護課による立会調査で、階段113が石室に付属する施設であることが判明した。詳細は、京都市文化市民局より近日刊行予定の『京都市内遺跡試掘調査報告　令和４年度』を参照されたい。

階段付き石室は、京都市内では平安京左京三条四坊十町跡（竪穴542）、平安京左京四条四坊一町跡（石室２）で検出事例がある

上村和直ほか『平安京左京三条四坊十町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004－10　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年

松永修平『平安京左京四条四坊一町・烏丸御池遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019－7　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2020年

４）　主として京都市左京区白川に産する砂。白川石の花崗岩が風化した粗い砂で純白を呈する。砂粒は３㎜内外が普通。庭園の敷砂として広く使われている。（下出源七『建築大辞典』「白川砂」彰国社　1974年　p.736）

５）　実からしぼった油は悪臭があるものの炎が明るく、冬にも固まらないため重用された。（木村陽二郎『図説　花と樹の大事典』「イヌガヤ［犬榧］」柏書房　1996年　p.51）

４．遺　　物

（１）遺物の概要

整理コンテナにして48箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器類、瓦類、金属製品、貝類がある（表３）。全体の半数以上を土器類が占め、土器類全体のなかでは土師器が半数以上を占める。時代別では江戸時代の遺物が９割以上を占め、平安時代から室町時代にかけての遺物がわずかに含まれる。平安時代から室町時代にかけての遺物には、土師器皿、須恵器椀・甕、緑釉陶器椀、焼締陶器甕、平瓦などがあるが細片のため図化できなかった。江戸時代の各遺物の詳細については付表１・２にまとめた。

なお、今回の調査で出土した土師器は、胎土の色調によって白色系と赤色系の２種類に分けることができる。以下では、マンセル表色系の色相で2.5Y、10YR、7.5YR（明度８）にあたるものを白色系、7.5YR（明度６・７）、５YRにあたるものを赤色系として報告する。

（２）土器類（図17、図版14～16・25・26、付表１）

溝95出土土器（図版14・25　１～12）　土師器蓋・皿、施釉陶器椀・鍋、磁器蓋・椀などが出土した。土器群は大半が土師器で、13Ａ段階[1)]（18世紀中葉頃）に属する。土師器皿は赤色系が大半を占める。

１～11は土師器である。１～９は皿Ｓである。白色系の１～４は口径11.8～18.8㎝、赤色系の５～９は口径10.1～12.8㎝である。10・11は蓋で、ともに赤色系である。12は磁器の染付蓋である。外面には松竹梅文とその隙間に蕨手文を描く。つまみ内側には「富貴長春」の文字がある。

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
室町時代～江戸時代前期（断割調査区）	土師器、焼締陶器				
江戸時代前期（第４面）	土師器、施釉陶器、磁器、瓦類、金属製品、貝類		土師器11点、磁器１点、金属製品３点		
江戸時代中期（第３－ｂ面）	土師器、施釉陶器、磁器、瓦類、金属製品		土師器64点、施釉陶器６点、磁器15点、金属製品２点		
江戸時代後期（第３－ａ面）	土師器、施釉陶器、磁器、瓦類、金属製品		土師器12点、施釉陶器３点、磁器５点、金属製品２点		
江戸時代後期（第２面）	土師器、施釉陶器、磁器、瓦類、土製品、金属製品、貝類		土師器15点、施釉陶器５点、磁器６点、金属製品２点		
近代（第１面）	土師器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦類、土製品		土師器18点、施釉陶器２点、磁器３点		
合　計		58箱	175点（10箱）	０箱	48箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より10箱多くなっている。

石室98出土土器（図版14・25　13～63）　土師器蓋・皿・高杯・鉢、土師質土器焙烙、施釉陶器蓋・椀・灯明皿・灯明皿受け・合子・鍋・湯桶・急須・土瓶・土瓶蓋・壷、焼締陶器擂鉢・壷、磁器蓋・椀・皿などが出土した。土器群は大半が土師器で、13Ａ段階（18世紀中葉頃）に属する。

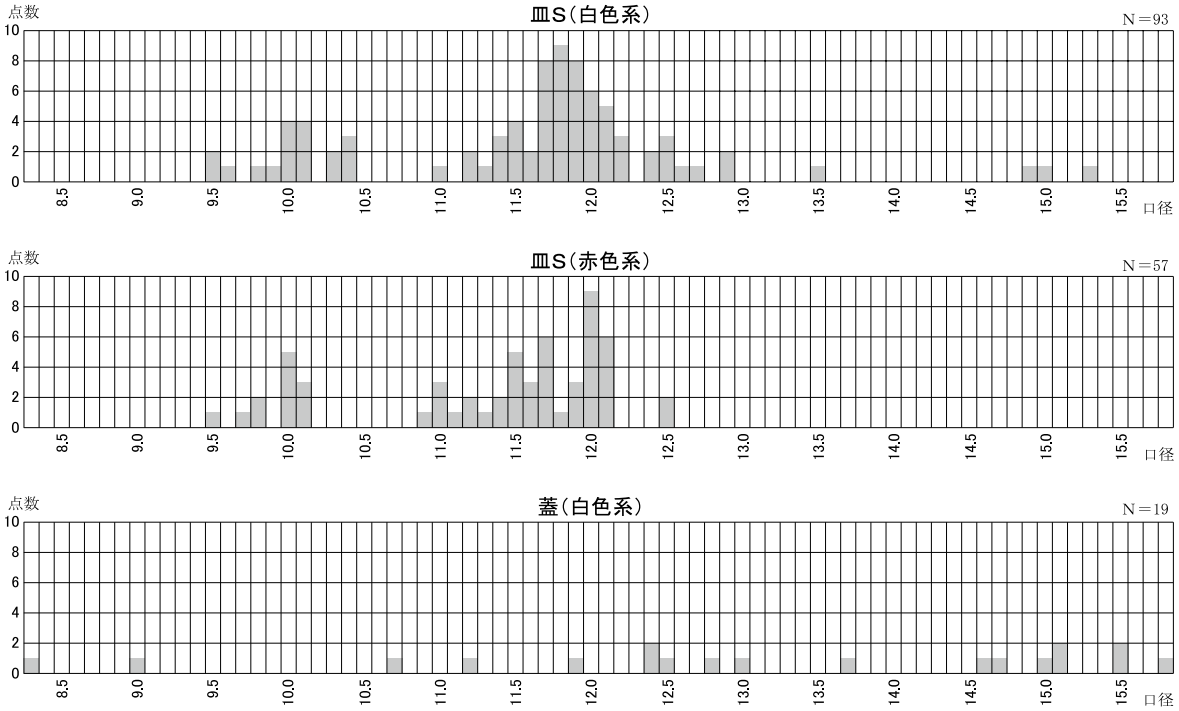
13～49は土師器である。13は皿Sb、14は皿Sbhである。15～40は皿Ｓである。白色系の15～32は口径9.8～15.1㎝、赤色系の33～40は口径9.6～12.1㎝である。16・30・32・39の口縁部には煤が付着する。36は外面に墨書がある。41～46は蓋である。すべて白色系で、口径は8.3～15.3㎝である。47は鉢、48は高杯である。49は回転台で成形された鉢である。外面は、体部下半を回転ヘラケズリ成形したのち、体部全体を回転ヘラミガキ調整する。

土師器皿Ｓの口径分布は、白色系・赤色系ともに10.0㎝前後に小さなピークが、11.9㎝前後に大きなピークがある（表４）。対して、土師器蓋の口径分布には、顕著なピークはみられない。土師器皿Ｓと蓋の比率は、破片数計測法[2)]で皿Ｓ（白色系）65.5％、皿Ｓ（赤色系）31.5％、蓋（白色系）3.0％である。

50～57は磁器の染付である。50・51は蓋である。51は内外面に松竹梅文を描く。52～55は椀である。52は高台内側に印を描く。55は底部内面に松竹梅文を描く。56・57は皿である。56は口縁部が輪花状で、高台は蛇の目高台である。条線を体部外面下半に１条、高台外面に２条施す。57は条線を体部外面下半に１条、高台外面に２条、高台内側に１条施す。高台内側に角福文を描く。このほか禁裏御用品[3)]の椀がある（図17－157・162）。

58～63は施釉陶器である。58～60は蓋である。58は土瓶蓋で、つまみに十六弁菊花文の意匠を施す。61は合子である。62は灯明皿である。口縁部内面に六弁の花文を貼り付ける。63は湯桶である。高台周辺に煤が付着する。このほか「宝山」の刻印がある壷がある。

表４　石室98出土土師器の口径分布表



土坑50出土土器（図版15・26　64～79）　土師器蓋・皿、施釉陶器椀・灯明皿・土瓶・壷、磁器椀・皿などが出土した。土器群は大半が土師器であり、13Ａ段階（18世紀中葉頃）に属する。土師器皿は白色系が大半を占める。

64～78土師器である。64は皿Nr、65・66は皿Sbhである。67～76は皿Ｓである。すべて白色系で、口径は10.1～12.0㎝である。68・70～72・74～76は口縁部に煤が付着する。77・78は蓋で、ともに白色系である。皿Ｓ（白色系）の口径は、10.2㎝前後と11.8㎝前後にピークをもつ。

79は磁器の染付椀である。条線を外面体部下半に１条、外面高台に２条、高台内側に１条施す。高台内側には「大明成（化年製）」の文字がある。このほか禁裏御用品の染付椀がある（図17－158）。

土坑59出土土器（図版15・26　80～86）　土師器蓋・皿・高杯、磁器椀・皿などが出土した。土器群は大半が土師器であり、13Ａ段階（18世紀中葉頃）に属する。土師器皿は赤色系が比較的多い。

80～85は土師器である。80～83は土師器皿Ｓである。白色系の80・81は口径11.9～12.1㎝、赤色系の82・83は口径11.8～12.0㎝である。80・81・83は口縁部に煤が付着する。84は白色系の蓋である。内面に煤が付着する。85は回転台を用いた高杯である。杯部は外面をヘラケズリ成形したのち、内外面を回転ナデ調整する。脚部はしぼりを加えて成形したあと、外面および内面下半を回転ヘラケズリ調整する。外面上位の１箇所を穿孔する。底面には脚台部との剥離痕がある。

86は磁器の染付椀である。外面には亀甲文と十六弁菊文を描く。禁裏御用品である。

土器溜60出土土器（図版15　87～92）　土師器蓋・皿、土師質土器鉢、施釉陶器蓋・鍋、焼締陶器擂鉢、磁器椀・蓋などが出土した。土器群は13Ｂ段階（18世紀後葉頃）に属するとみられる。土師器はほぼすべてが白色系で、全体の形が復元できたものはすべて蓋である。

87～92は土師器蓋である。口径12.4～13.1㎝である。

石室70出土土器（図版15・26　93～111）　土師器蓋・皿、施釉陶器椀・鍋・ミニチュア鍋・土瓶蓋・鉢、磁器蓋・椀・皿などが出土した。土器群は大半が土師器であり、13Ｂ段階（18世紀後葉頃）に属する。土師器皿は赤色系が大半を占め、白色系は１割程度である。

93～104は土師器皿Ｓである。白色系の93・94は口径11.8～12.5㎝、赤色系の95～104は口径9.9～12.1㎝である。赤色系の口径は10.2㎝前後と11.9㎝前後にピークをもつ。98・101・104は口縁部に煤が付着する。

105～108は磁器の染付である。105は蓋である。外面に松竹梅文を描く。106はいわゆる蕎麦猪口である。107・108は椀である。107は外面に鶴と松を、底部内面に松竹梅文を描く。

109～111は施釉陶器である。109は灯明皿である。口縁部内面に十六弁菊文を貼り付ける。110は椀である。いわゆる小杉椀と考えられる。111は鍋である。体部外面に褐色釉が施される。

土坑66出土土器（図版16・26　112～135）　土師器蓋・皿、土師質土器焜炉、施釉陶器蓋・椀・灯明皿・灯明皿受け・徳利・土瓶・土瓶蓋・鍋・鍋蓋・鉢・火入れ・壷、焼締陶器擂鉢、磁器蓋・椀・皿が出土した。土器群は大半が土師器であり、14Ａ段階（19世紀前葉頃）に属する。土師器

皿は赤色系が大半を占め、白色系は１割程度である。

112～126は土師器である。112は皿Nrである。底部を突出させ、ヘソ皿とする。113～122は皿Ｓである。すべて白色系で、口径9.4～13.9cmである。口径は、9.8cm前後と11.3cm前後にピークをもつ。123～125は蓋である。すべて白色系で、口径8.7～14.4cmである。124は内面に墨書がある[4)]。126は不明製品である。内外面をヘラミガキ調整する。

127～130は磁器の染付である。127・128は蓋である。128は外面に大根文、底部内面に松竹梅文を描く。129は椀である。外面に松と雁を描く。130は大皿である。条線を体部外面下半に１条、高台外面に２条、高台内側に１条施す。このほか細片のため図化できなかったが、磁器の染付椀には光格天皇菊御紋[5)]を描くもの（図17－161）がある。

131～135は施釉陶器である。131・132は平椀である。132は底部内面に楼閣山水文を描く。高台内側には墨書がある。133は灯明皿受けである。134は小型鉢である。底部外面に糸切り痕が残る。135は火入れである。口縁部は３箇所を内側に押し窪めて輪花状にする。外面には笹文を描く。

土坑11出土土器（図版16・26　136～148）　土師器皿、施釉陶器灯明皿・鍋、磁器が出土した。土器群は大半が土師器であり、14Ａ段階（19世紀前葉頃）に属する。

136～147は土師器である。136～145は皿Ｓである。白色系の136～143は口径9.6～13.8cm、赤色系の144・145は口径9.9～10.4cmである。146・147は蓋である。ともに白色系で、口径12.4～13.6cmである。土師器皿は白色系が大半を占める。

148は施釉陶器の鍋である。底部外面に煤が付着する。

溝７出土土器（図版16　149～156）　土師器蓋・皿、土師質土器鉢、施釉陶器蓋・椀・皿・瓶・鍋・壷、磁器蓋・椀・皿・徳利、輸入磁器椀・皿が出土した。土師器皿はその特徴から14Ｂ段階以降の可能性がある[6)]。

149～154は土師器皿である。149・150は皿Ｓである。ともに赤色系で、口径11.4～11.6cmである。150は口縁部に煤が付着する。151～154は蓋である。すべて白色系で、口径11.3～13.2cmである。151は内面に煤が付着する。

155・156は磁器の染付である。155は蓋である。外面に松竹梅文を描く。156は皿である。口縁部は輪花状で、条線を体部外面下半に１条、高台外面に２条、高台内側に１条施す。内外面には松喰鶴文を描く。高台内側には「富（貴）長春」の文字がある。このほか禁裏御用品の染付磁器椀、施釉陶器椀がある（図17－159・166）。

その他の出土土器（図17　157～166）　157～166は十六弁菊文を描いた陶磁器である。いずれも細片のため図化はできなかったが、当遺跡の特徴を示す禁裏御用品の遺物であるため報告する。

157～165は磁器の染付である。157～164は椀である。157～159は体部外面に割菱文と十六弁菊文を描く。157は石室98、158は土坑50、159は溝７出土。160は体部外面に十六弁八重表菊文を描く。石室89出土。161は体部外面に桜垣文と光格天皇菊御紋を描く。土坑66出土。162～164は体部外面に紗綾形文と仙洞菊文を描く。162は石室98、163は第２面検出時、164は第２面掘り下げ時出土。165は皿である。内面に笹垣文と仙洞菊文を描く。第３面掘り下げ時出土。

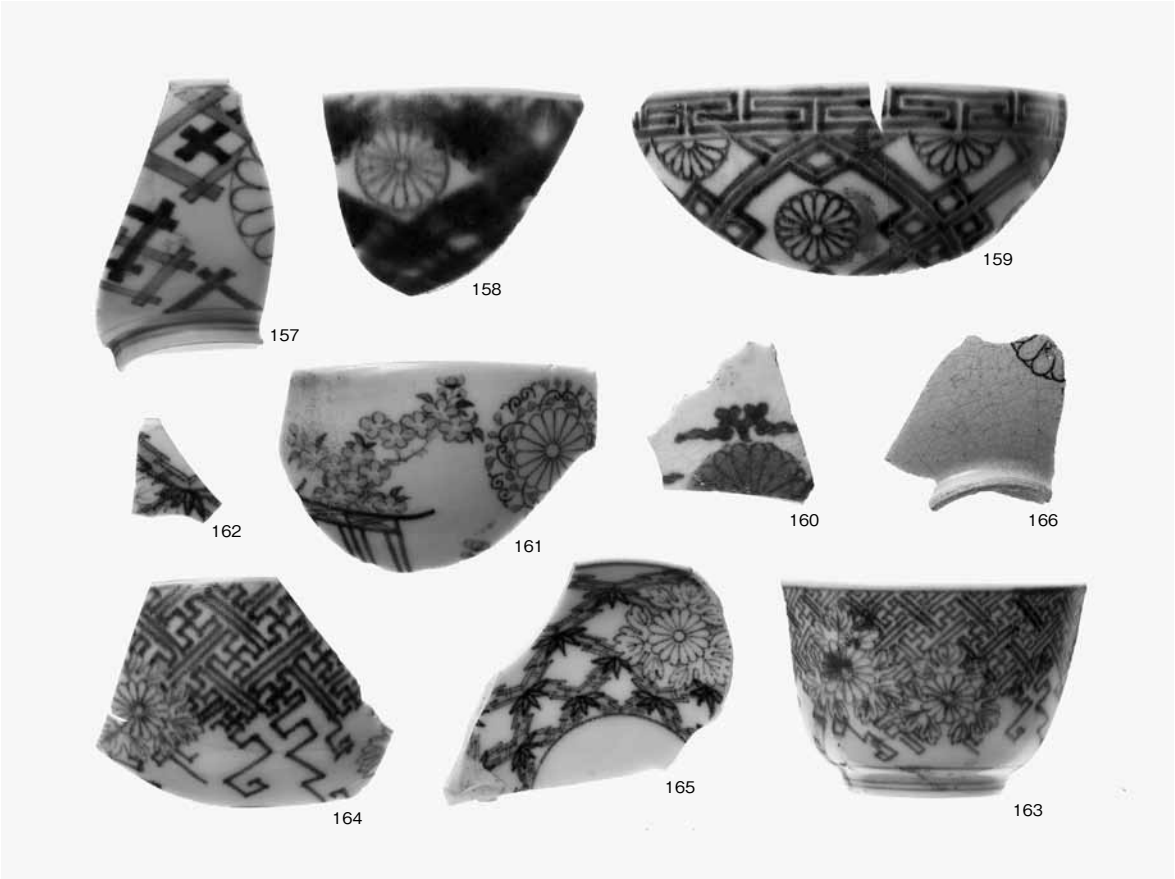


図17　その他の出土土器

166は施釉陶器の椀である。体部外面に十六弁八重表菊文を描く。溝７出土。

（３）金属製品（図18、付表２）

煙管、煙管銭、蓋、簪、銭貨、不明金具がある。

金１は煙管の雁首である。蝋付けの痕跡がある。金２は煙管銭である。金３・4は蓋である。金５～７は不明金具である。金５は表面に亀甲状の文様があり、鍍金が部分的に残存する。金６は表面に揚羽蝶の文様がある鋲状の製品である。金７は双円形の製品で、目貫の可能性がある。金８は

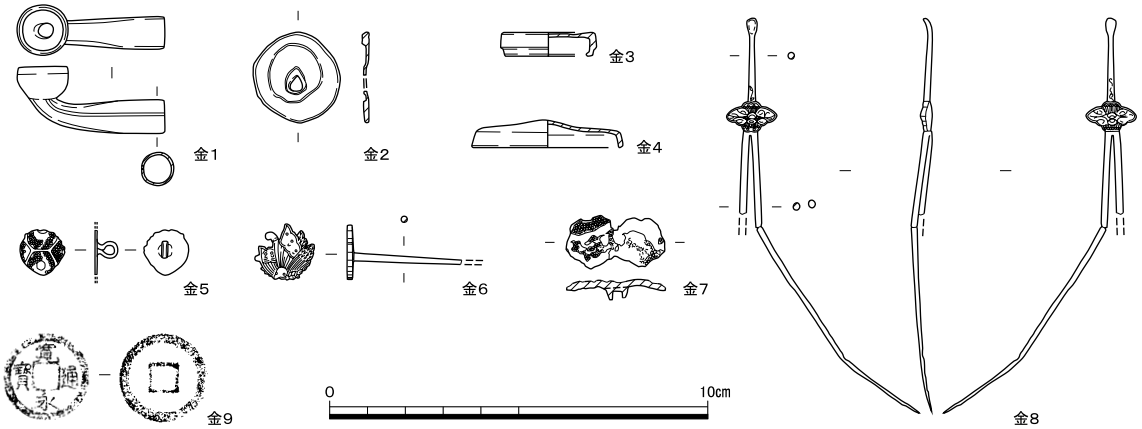


図18　金属製品実測図（１：２）

簪である。金９は寛永通寶である。いわゆる新寛永である。金１・２・８は溝95、金３・６は土坑66、金４は石室70、金５は第２面掘り下げ時、金７は土坑59、金９は土坑50出土。

註

１）　土師器皿の型式・年代については、平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年　に準拠する。

２）　口縁部残存率50％以上の破片を計測対象とした。宇野隆夫「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集　1992年　pp.215-232

３）　佐伯公子「いわゆる「禁裏御用品」肥前産磁器の分類について」『常磐井殿町遺跡・公家町遺跡・相国寺旧境内発掘調査報告書2018』同志社大学歴史資料館調査研究報告第15集　同志社大学歴史資料館　2019年　pp.146～155

４）　ほかに墨書のある土師器皿Ｓが５点出土しているが、小片のため図化はできなかった。

５）　九州国立博物館『御所の器』公家山科家伝来の古伊万里　九州国立博物館　2022年

６）　平尾政幸氏のご教示による。

５．まとめ

京都大宮仙洞御所内で行った本調査では、４面５時期の遺構面を検出した。その結果、室町時代から近代にかけての京都新城、仙洞御所、大嘗宮を構成する遺構群を検出し、土地利用の変遷が明らかとなった。

以下では本調査北隣の2019年度調査（表１・図７－調査23）成果も含めて、遺構の変遷について述べる。

（１）遺構の変遷

遺構は第１期から第７期に区分できる。第１期は室町時代から江戸時代前期、第２～６期は江戸時代、第７期は近代の遺構である。それ以前の時期の遺構については、工事掘削深度に伴う制約から調査では検出していない。ただし、平安時代から鎌倉時代にかけての土器類が検出遺構や整地層に混入している。

第１期（15世紀～17世紀前半）　本調査断割の整地層Ⅷ・基盤層上面、2019年度調査第５面の遺構群が該当する（図19－②）。本調査では、室町時代の土取り土坑群（土坑134・135・136・141・142）と、京都新城の堀埋土を検出した。

土取り土坑群は、基盤層上面を掘り込む。遺構の時期は、出土した土器類から15世紀代とみられる。また、土取りによって少なくとも調査地周辺では、室町時代以前の遺構が削平された可能性がある。

京都新城については、断割１～４で堀の範囲について知見を得た。断割１・２では、標高46.6ｍ前後で基盤層を検出した。調査23で検出した堀の西肩石垣（石垣312）より東へ17.5ｍ地点・15.5ｍ地点にあたる。基盤層は、京都新城成立面（標高47.0ｍ前後、調査23）とわずか約0.4ｍの比高であることから堀底とは考えにくい。堀外にあたると判断できる。断割４では、整地層Ⅷを検出した。西肩石垣より東へ10.0ｍ地点にあたる。整地層Ⅷは、前述の基盤層上面よりも低い、標高46.2ｍ以下まで堆積し、調査23で検出した堀埋土の土質と近似する。京都新城の堀埋土と判断できる。上述の成果から、本調査区近辺における京都新城の堀幅は10.5～15.5ｍの範囲に収まると考えられる。この数値は、既往の高精度表面波探査の成果ともほぼ整合的である[1)]。なお、断割３では、標高46.6ｍ前後で直径15㎝以下の円礫を主体とする礫層を検出した。堀外（断割１・２）と堀埋土（断割４）の中間にあたる。礫層は石垣の裏込めの可能性がある[2)]。

また、断割２の断面観察より、基盤層から第２期（江戸時代前期）までの間に遺構面は確認できない。このことを考慮すれば、京都新城の堀外の遺構は、調査地周辺では、第２期造成に伴い削平されていると考えられる。

第２期（17世紀前半～後半）　本調査の整地層Ⅶ上面、調査23第４面の遺構群が該当する（図19－③）。本調査では遺構は確認できなかった。2019年度調査では柱列や雨落ち溝と考えられる遺構を検出しており、本調査地周辺には建物が広がっていたとみられる。

本調査で検出した遺構面は、厚さ約0.3～0.6ｍの整地層Ⅶ上面にあたり、非常に堅く叩き締められる。直下の整地層Ⅷは、直径1～10㎝以上の礫が多量に混じる暗褐色シルトである。調査23では、これらに類似する土層（整地層、京都新城堀埋土）が確認されている。この土層は、厚さ約0.5ｍで上面が非常に堅く叩き締められる。推定寛永度仙洞御所造営面である。直下の京都新城堀埋土は、直径1～８㎝の礫が多量に混じる黒褐色砂泥である。整地層Ⅶと整地層、整地層Ⅷと京都新城堀埋土は対応すると考えられる。整地層Ⅶは、17世紀初頭頃の土器類が出土することからも、寛永度仙洞御所造営に近い時期の整地と考えられる。なお遺構面は、17世紀前半から後半頃とみられる洪水堆積層によって覆われる。これについては本章第２節で詳述する。

遺構の時期は、上述土層の観察状況から17世紀前半から後半頃と考えられる。

第３期（17世紀後半～18世紀半ば）　本調査第４面の遺構群が該当する。調査23第３面下層がこれに対応する可能性がある（図19－④）。本調査では、東西方向の溝95と、礎石列１、地下室の可能性がある土坑116・137などを検出した。遺構は、溝95の北半から調査23にかけて広がる。

遺構の時期は、前後の遺構面の年代から、17世紀後半から18世紀半ば頃と考える。

第４期（18世紀半ば頃）　本調査第３－ｂ面の遺構群が該当する。調査23第３面上層がこれに対応する可能性がある（図20－⑤）。本調査では、石室89・98、階段113、溝75、土坑41・50・59・65・67などを検出した。とくに北側では石室89・98、地下室の可能性がある土坑67、調査23の石室241などがあり、同じ場所に繰り返し石室を構築したことが窺える。遺構は、溝75の北半から調査23にかけて広がっており、第３期以来の土地区画を踏襲しているとみられる。

遺構の時期は、各遺構から13Ａ段階の土師器皿が出土することから、18世紀半ば頃と考えられる。なお、石室98からは後桜町上皇の頃から使用されたとされる仙洞菊文のある染付椀が出土している。後桜町上皇の仙洞御所への移徙（いし）は明和８年（1771）である。

第５期（18世紀後半～19世紀初頭）　本調査第３－ａ面の遺構群が該当する。調査23第２面と対応する可能性がある（図20－⑥）。本調査では、石室70、溝40、土坑139を検出した。調査23では溝89などがある。遺構の分布は、当期を境に本調査区北側に偏るようになる。この時期に土地区画の変化があった可能性がある。

遺構の時期は、各遺構から13Ｂ段階の土師器皿が出土することから、18世紀後半～19世紀初頭頃と考えられる。

第６期（19世紀前半頃）　本調査第２面の遺構群が該当する（図20－⑦）。本調査では、溝15、土坑66などを検出した。遺構の分布から、第５期以来の土地区画を踏襲している可能性がある。

遺構の時期は、土坑66から14Ａ段階の土師器皿のほか、光格天皇菊御紋のある染付椀が出土しており、光格天皇の仙洞御所への移徙（いし）が文化14年（1817）であることをふまえると、上限は19世紀前半頃と考えられる。

第７期（20世紀前半）　本調査第１面、調査23第１面の遺構群が該当する（図20－⑧）。本調査では、溝７・13、土坑８などを検出した。調査23では柱列１、溝20・21・96などがある。遺構は、調査区北側から調査23にかけて広がる。

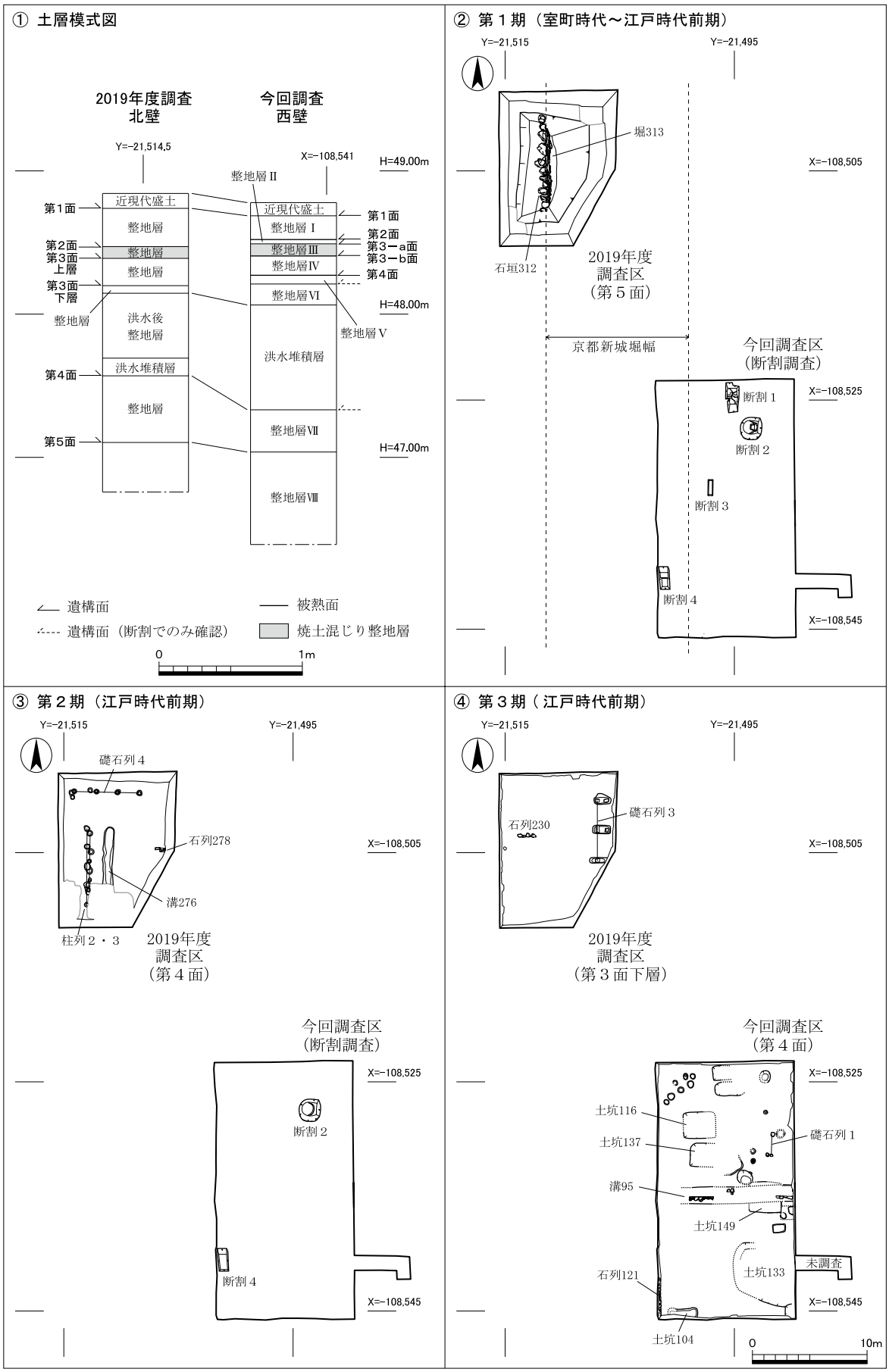


図19　土層模式図（１：40）及び遺構変遷図１（１：500）

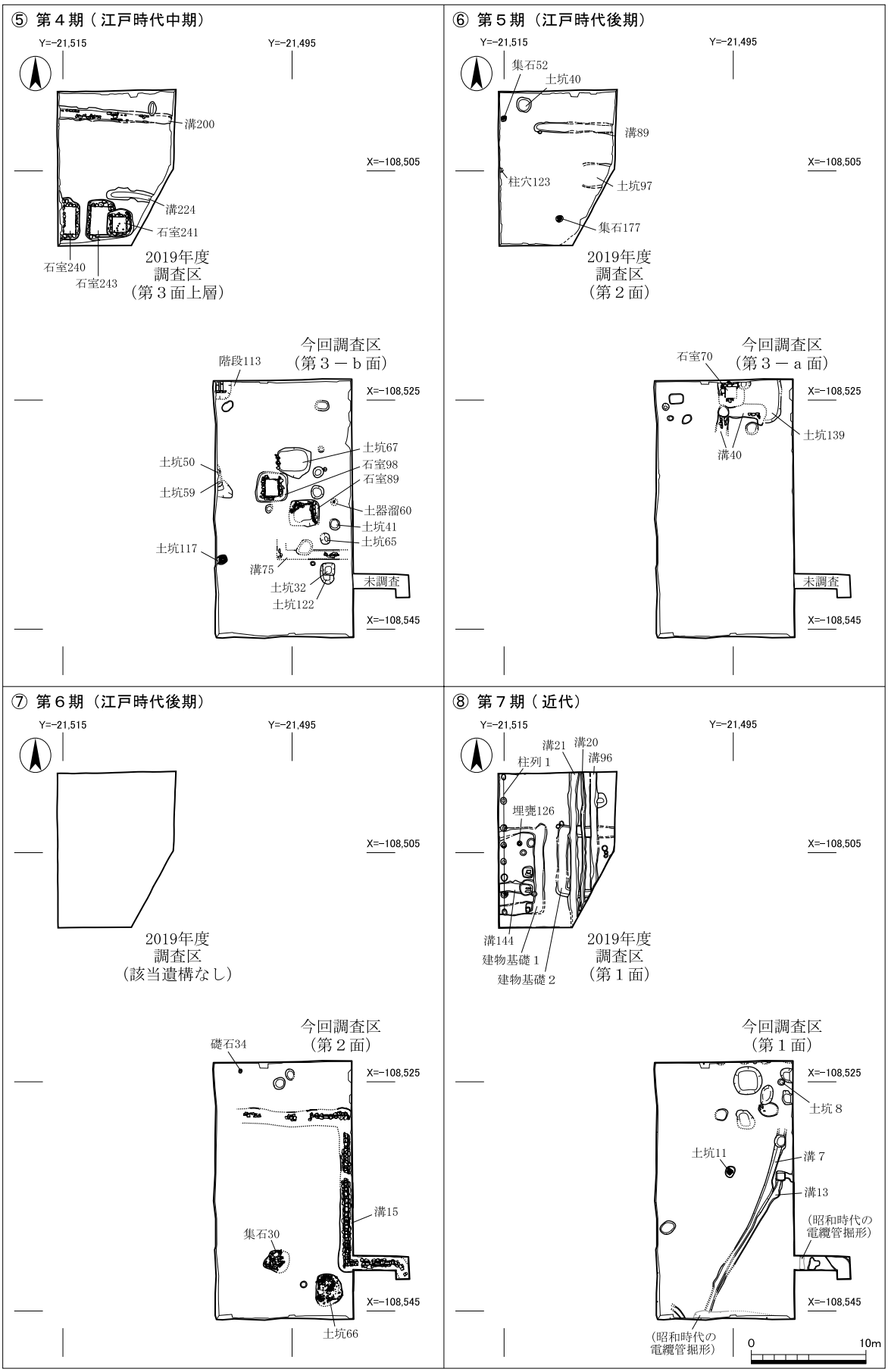


図20　遺構変遷図２（１：500）

当遺構面は、整地層Ⅰ上面に白川砂が撒布されている。『御大禮記録』および『昭和大禮寫眞帖』の写真や記述に白川砂の撒布が確認できることから、遺構面は大正４年（1915）か昭和３年（1928）の大嘗宮造営に伴うと考えられる[3)]。そこで、遺構面と溝７・13の関係性を改めて確認すると、断面観察より、溝13（廃絶後の溝15石材に接触したため掘削中止）→溝７（古）（溝15を避けて掘り直し、土管設置）→第１面化粧土敷設→白川砂撒布→溝７（新）（土管抜き取り）の過程が考えられる。溝７・13は遺構面造成の前後で掘削が行われており、溝７・13が遺構面の時期を特定する手がかりとなる。

このうち溝７（新）は、調査区南壁際で検出した、常滑焼の角型半陶管（電纜管）を埋設した東西方向の溝に削平される。この溝から出土した角型半陶管は、観察から型成形とみられ、杉江製陶で角型半陶管のプレス成形法が考案される昭和２年（1927）以降の製品であるとみられる。このことから、遺構面と溝７・13は、大正４年（1915）の大嘗宮造営に伴うと考えられる[4)]。

なお、現在の京都大宮仙洞御所に大正・昭和時代の大嘗宮の図面を重ね合わせると、土坑８は庭燎舎（宮内の庭にある篝火を焚く施設）付近、調査23検出の溝20・21・96は板垣付近に位置する。これら遺構は大嘗宮に関連する遺構の可能性がある[5)]。

（２）洪水堆積層について

今回の検出事例　前述のとおり、第２期遺構面（整地層Ⅵ上面）廃絶から第３期遺構面（整地層Ⅶ上面）造成までの間に厚さ約0.7ｍの洪水堆積層を確認した（図９－断割２－１層、図版７－30層、図版24）。

洪水堆積構造は、直径13㎝以下の礫を多量に含む。東壁断面（図版24－４）では北から南へ下がるフォーセット層理、礫が北に傾斜をもつインブリゲーション構造が確認できる。南壁断面（図版24－３）ではトラフ型の斜交層理が確認できる（図21）。このことから、砂礫は概ね北から南へ流れ、流速は速かったと考えられる。網状河川の砂礫堆積物であるとみられる[6)]。なお、層には人為的な再堆積が確認できないことから、純粋な自然堆積層であるといえる。流れの向きから、鴨川から運ばれてきたものと考えられる。

以上のことから当時の仙洞御所には、直径13㎝の礫を含む土砂が、かなりの流速をもって鴨川から流れてきたと考えられる。

堆積の時期は、洪水堆積層が17世紀前半から後半頃の整地層Ⅶを覆い、17世紀後半から18世紀半ば頃の整地層Ⅴに覆われるため、17世紀前半から18世紀半ば頃と考えられる。

周辺の調査事例　調査区周辺では、今回検出した洪水堆積層と同規模の洪水堆積層、ないしそれに類する堆積層が確認されている。このうち、検出層厚が0.5ｍ以上にも及ぶ事例が７例確

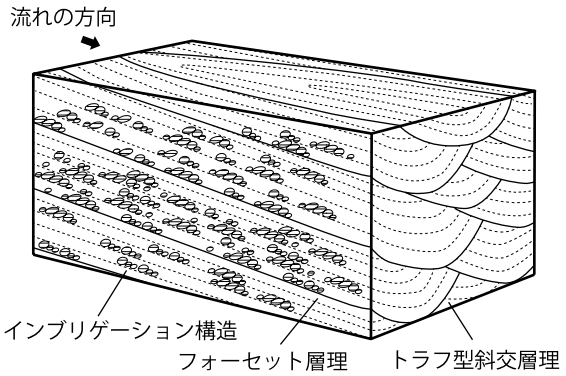


図21　堆積構造模式図

認できた（図22、表５）。

地点１～３では洪水堆積層を検出した。地点１は京都御所の中央部、東外に位置する。河川の氾濫によって形成された堆積層とみられる。堆積層は宝永の大火（1708年）に伴う焼土層に覆われる。流れの向きは、北東から南西である。地点２は京都御所内の中央東側で、荒神口西側に位置する。洪水堆積層は17世紀前半から中葉と想定される遺構面を覆い、宝永の大火（1708年）に伴う

表５　調査地周辺における洪水関連堆積層一覧表

地点	堆積層の性格	堆積層に覆われる遺構（面）	堆積層を覆う遺構（面）	堆積層の時期	文献
地点1	砂礫の自然堆積層。複数回の氾濫や河川堆積によって形成されたと考えられている。	不明。	堆積層を覆う遺構面で墓地を検出、遺構から17世紀末から18世紀初頭頃の土器、元禄5年（1692）銘の墓石が出土。墓地は宝永の大火を機に転出する常念寺に伴うと判断できる。遺構面を覆う焼土層は宝永の大火（1708年）に伴う。	1708年以前	1
地点2	洪水堆積層。	堆積層に覆われる遺構面に明確な遺構なし。17世紀前半から中葉と想定される。	堆積層を覆う2枚の焼土層のうち、上位の焼土層を境に、直下の遺構面で公家町に関する建物と18世紀初頭の土坑を、直上で複数の路面を検出。絵図との対応から、焼土層直下は公家町再編（1708年）前の遺構。貞享度造営面（1684年）か。 下位の焼土層は、貞享の火災（1684年）に伴うか。	17世紀前半頃～1708年	2
地点3	洪水堆積層。	堆積層に覆われる第４面で東福門院下屋敷、二条家邸に関する遺構を検出。絵図との対応から寛文度造営（1662年）。延宝の火災（1675年）で廃絶。	堆積層を覆う第3面は、出土遺物から17世紀後半から18世紀後半の遺構面。第3面直上の焼土層は天明の大火（1788年）に伴うとみられる。造営時期は不明。	1675年～1788年	3
地点4	洪水堆積層。ただし上半は人為的に整地し直されている。	不明。	堆積層を覆う遺構面があり、遺構面から掘り込まれた石室には火災痕跡がある。遺構面と石室は焼土層に覆われる。この石室を削平する、火災痕跡のないの石室から18世紀後半の遺物が出土。焼土層は天明の大火（1788年）に伴うと考えられる。遺構面の造営時期は不明。	1788年以前	4
地点5	ブロック状泥土を含む、洪水堆積に類する層。洪水堆積層を人為的に整地した層とみられる。	堆積層に覆われる土坑から17世紀後半の遺物が出土。	堆積層を掘り込む土坑から17世紀末の遺物が出土。 堆積層を覆う焼土層から18世紀初頭の遺物が出土。	17世紀後半～末頃	5
地点6	砂礫層。しまりが悪く地山とは考え難い。洪水堆積に関連する土層か。	不明。	焼土層が堆積層直上の土坑を覆う。土坑から18世紀第3四半期の遺物が出土。焼土層は天明の大火（1788年）に伴うと考えられる。	1788年以前	6
地点7	洪水堆積に関連する層。	不明。	堆積層を覆う3枚の焼土層のうち、中位の焼土層を境として、直下の遺構面で内裏内に設置された埒と考えられる柵を、直上で内裏南側路面を検出。絵図との対応から、焼土層直下は内裏拡張（1788年）前の遺構面。 よって下位の焼土層は宝永の大火（1708年）以前の火災層、造営は貞享度（1684年）以前。	1684年以前	7

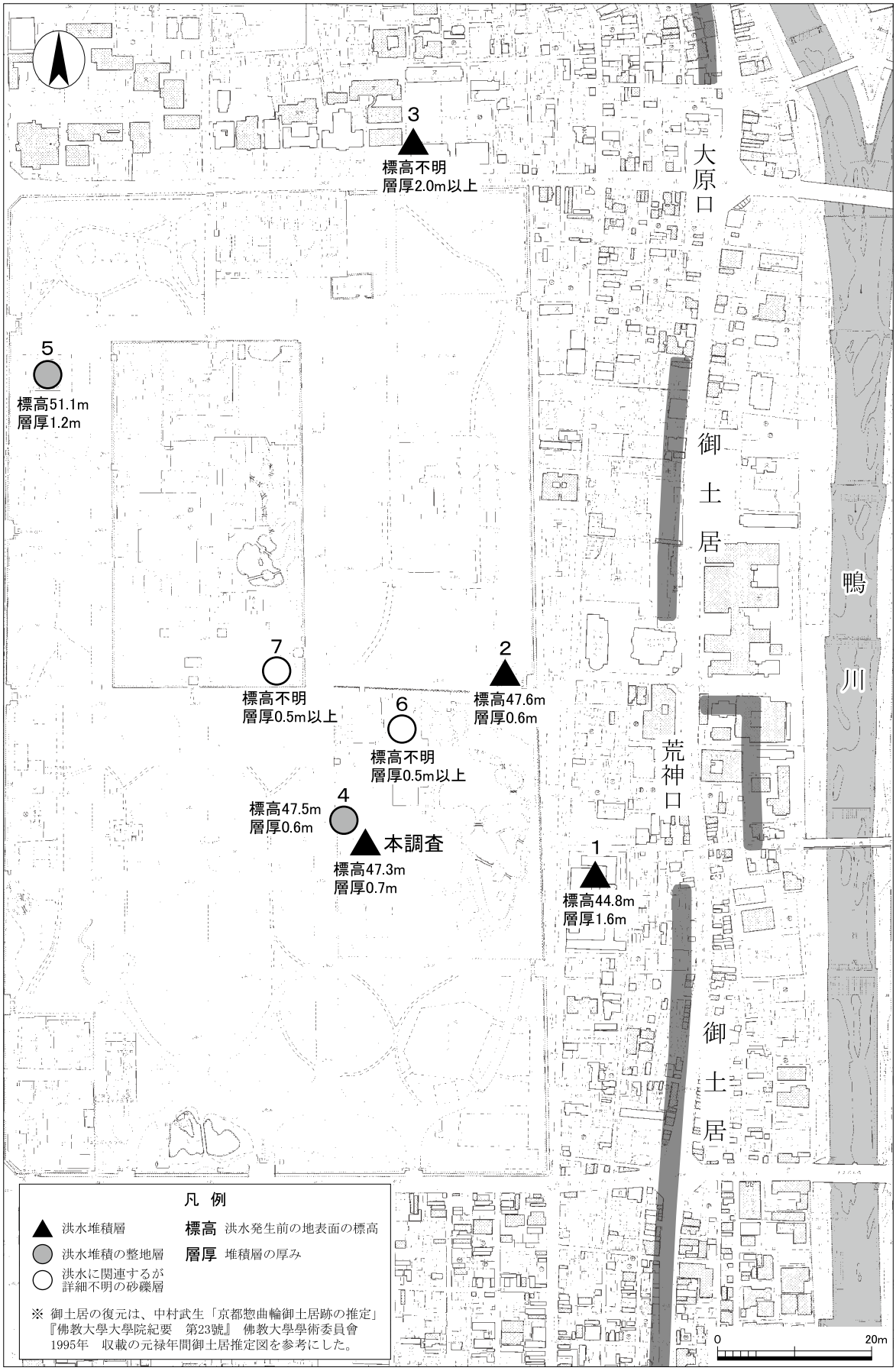


図22 調査地周辺で確認された洪水関連の堆積層分布図（1：7,500）

焼土層に覆われる。地点３は京都御所の北西外で、大原口西側に位置する。洪水堆積層は延宝の大火（1675年）で廃絶した二条家邸の遺構面を覆い、天明の大火（1788年）に伴う焼土層に覆われる。流れの向きは東から西である。

地点４～７では洪水に関連する堆積層を確認した。地点４は京都御所内の中央部、やや南側に位置する。層の下位にわずかに洪水堆積層を確認できるが、ほとんどは洪水堆積を人為的に整地した層である。堆積層は天明の大火（1788年）に伴う焼土層に覆われる。地点５は京都御所内の北西部に位置する。洪水堆積を人為的に整地した層と考えられる。堆積層は17世紀後半の土坑を覆い、17世紀末の土坑に掘り込まれる。地点６は京都御所内の中央部、やや東側に位置する。洪水に関連する堆積層とみられる。堆積層は天明の大火（1788年）に伴う焼土層に覆われる。地点７は京都御所内の中央部に位置する。洪水に関連する堆積層とみられる。堆積層は貞享度内裏造営面（1684年）に覆われる。

小結　以上、本調査を含め８つの事例をみてきた。本調査および地点１～３では、洪水に伴う砂礫の堆積によって、土地の標高が0.5ｍ以上高くなったことが判明した。これら砂礫の堆積により建物は、人間の膝下程度までの高さが埋まり甚大な被害を与えたことが考えられる。周囲の景観は一時期、河原のような状態になっていたことが想定できる。こうした明確な洪水被害を確認できたのは、既往の調査では内裏や御所の周辺部に限られており、仙洞御所の中心部にまで被害が及んでいたことが明らかとなったのは今回が初めてである。江戸時代の鴨川洪水の被害状況を明らかにするうえで重要な知見となった。ただし、内裏や御所の洪水被害による再建・修理に関する記事が、江戸時代を通して文献史料から見出せない点は今後の課題となる。

砂礫層の堆積時期については、既往の調査では、17世紀前半から1788年までの期間のなかに収まり、今回の洪水堆積層の堆積時期と重なる。いずれの事例も、具体的な洪水記事に対応させることは難しいが、甚大な被害をもたらした洪水がこの時期に発生したことが確認できた点は重要である。先行研究によれば、16世紀以降の鴨川周辺では、鴨川の天井川化によって洪水が頻発したことが指摘されている。とくに17世紀から18世紀にかけての時期は、御土居の撤去が進むことで洪水が市街地にまで達するようになったとされる。また寛文新堤の建設（1669年）により川幅が狭くなり、かえって天井川化が進み洪水が増加したとされる[7)]（図23）。今回検出した洪水堆積層を含む８つの事例は、17世紀から18世紀にかけての鴨川周辺における、上述のようなの変化によって引き起こされた洪水に伴ったものと考えられる。

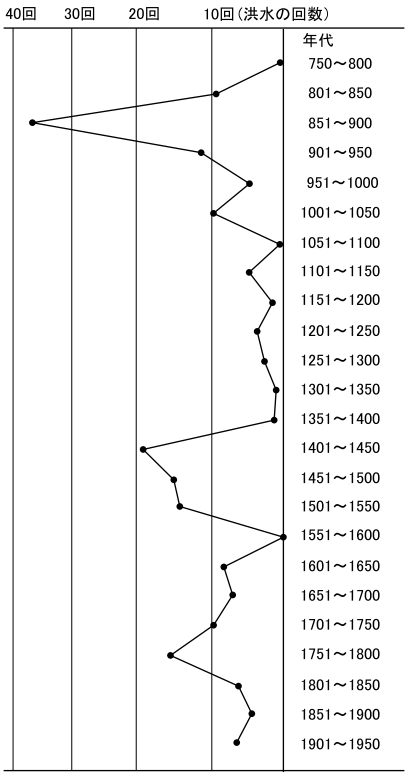


図23　半世紀ごとの鴨川の洪水回数
（吉越2012をトレース）

註

1） 本調査区を東西に横断するzr測線上において堀幅約20ｍと想定された（釜井俊孝・土井一生・古川匠「付章２　高精度表面波探査による堀跡の調査」『平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019－11　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2020年）。なお、調査終了後に調査区南隣で行われた文化財保護課による立会調査で、京都新城の堀と堀東肩石垣が検出され、今回調査区周辺では堀幅が約11ｍであることが判明した。詳細は、京都市文化市民局より近日刊行予定の『京都市内遺跡試掘調査報告　令和４年度』を参照されたい。

2） この礫の大きさは、西肩石垣（調査23）の0.05～0.1ｍよりも大振りではあるが、東肩石垣（上述立会）のものとはほとんど同じである。

3） 山口信雄『御大禮記録』 朝日新聞社　1916年　p.96、大禮使『昭和大禮寫眞帖』1930年。

4） 角型半陶管については、市村慎太郎氏よりご教示を得た。また、かつて角型半陶管（電纜管）を生産されていた杉江製陶株式会社のホームページを参考にした。https://www.sugie.co.jp/corp_info/index.html（2022年11月21日閲覧）

5） 大嘗宮の位置と構造は大正時代と昭和時代ではほぼ変わらない。山口信雄『御大禮記録』 朝日新聞社　1916年　p.236、大禮使『昭和大禮寫眞帖』1930年　図58。

6） 増田富士雄『ダイナミック地層学』近未来社　2019年。なお、辻　康男氏（パレオ・ラボ）に現地で堆積構造についてご教示いただいた。

7） 吉越昭久「京都・鴨川の堤防建設にみる近世の治水観」『京都の歴史災害』 思文閣出版　2012年　pp64-74

文献一覧表（表５　調査地周辺における洪水関連堆積層一覧表　の文献番号に対応する）

1　中川和哉ほか『京都府遺跡調査報告集第172冊』寺町旧域・法成寺跡　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター2018年

2　丸川義広ほか『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年

3　若林邦彦ほか『常磐井殿町遺跡・公家町遺跡・相国寺旧境内発掘調査報告書2018』 同志社大学歴史資料館2019年

4　小檜山一良『平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019－11　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2020年

5　丸川義広『公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009－5　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2009年

6　木下保明『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005－14　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年

7　長戸満男「平安京左京一条四坊」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2000年

付表１　土器観察表

No.	器種	器形	法量(cm)			残存率(%)	色調	出土地点・遺構	備考
			口径	底径	器高				
1	土師器	皿S	11.8		1.2	55	10YR8/2灰白色	溝95	白色系
2	土師器	皿S	12.0		1.9	50	10YR8/3浅黄橙色	溝95	白色系
3	土師器	皿S	12.1		2.3	35	7.5YR8/4浅黄橙色	溝95	白色系
4	土師器	皿S	18.8		2.5	25	7.5YR8/4浅黄橙色	溝95	白色系
5	土師器	皿S	10.1		1.9	90	7.5YR7/4にぶい橙色	溝95	赤色系
6	土師器	皿S	10.3		1.8	60	5YR7/4にぶい橙色	溝95	赤色系
7	土師器	皿S	11.8		2.0	70	7.5YR7/4にぶい橙色	溝95	赤色系
8	土師器	皿S	11.9		1.9	45	7.5YR7/4にぶい橙色	溝95	赤色系
9	土師器	皿S	12.8		1.7	75	7.5YR7/4にぶい橙色	溝95	赤色系
10	土師器	蓋	8.1		(1.5)	95	7.5YR7/4にぶい橙色	溝95	赤色系
11	土師器	蓋	12.1		(1.9)	95	7.5YR7/4にぶい橙色	溝95	赤色系
12	染付磁器	蓋	9.7		2.7	80	N8/0灰白色	溝95	外面に松竹梅文と蕨手文、 つまみ内側に「富貴長春」の文字
13	土師器	皿Sb	7.7		1.8	30	7.5YR6/6橙色	石室98	赤色系
14	土師器	皿Sbh	8.8		1.7	25	10YR7/3にぶい黄橙色	石室98	白色系
15	土師器	皿S	9.8		1.8	85	10YR8/4浅黄橙色	石室98	白色系
16	土師器	皿S	9.9		2.0	100	7.5YR8/4浅黄橙色	石室98	白色系、口縁部に煤付着
17	土師器	皿S	10.2		2.1	100	7.5YR8/4浅黄橙色	石室98	白色系
18	土師器	皿S	10.8		1.7	50	10YR8/3浅黄橙色	石室98	白色系
19	土師器	皿S	11.1		1.8	100	7.5YR8/3浅黄橙色	石室98	白色系
20	土師器	皿S	11.1		2.0	80	10YR8/4浅黄橙色	石室98	白色系
21	土師器	皿S	11.4		1.9	90	7.5YR8/4浅黄橙色	石室98	白色系
22	土師器	皿S	11.7		2.1	100	10YR8/1灰白色	石室98	白色系
23	土師器	皿S	11.7		2.2	100	7.5YR8/4浅黄橙色	石室98	白色系
24	土師器	皿S	11.8		2.2	100	10YR8/4浅黄橙色	石室98	白色系
25	土師器	皿S	11.8		1.8	100	7.5YR8/4浅黄橙色	石室98	白色系
26	土師器	皿S	12.0		2.2	100	7.5YR8/4浅黄橙色	石室98	白色系
27	土師器	皿S	12.2		2.2	30	10YR8/3浅黄橙色	石室98	白色系
28	土師器	皿S	12.3		2.1	30	10YR7/4にぶい黄橙色	石室98	白色系
29	土師器	皿S	12.6		1.9	25	7.5YR8/4浅黄橙色	石室98	白色系
30	土師器	皿S	14.9		2.0	40	10YR7/3にぶい黄橙色	石室98	白色系、口縁部に煤付着
31	土師器	皿S	14.9		2.3	30	10YR7/4にぶい黄橙色	石室98	白色系
32	土師器	皿S	15.1		1.8	70	10YR8/3浅黄橙色	石室98	白色系、口縁部に煤付着
33	土師器	皿S	9.6		1.9	50	7.5YR7/6橙色	石室98	赤色系

※（ ）は残存数値

No.	器種	器形	法量(cm)			残存率(%)	色調	出土地点・遺構	備考
			口径	底径	器高				
34	土師器	皿S	9.8		2.0	90	7.5YR7/6橙色	石室98	赤色系
35	土師器	皿S	10.0		1.7	45	7.5YR7/4にぶい橙色	石室98	赤色系
36	土師器	皿S	11.5		2.1	35	7.5YR7/6橙色	石室98	赤色系、外面に墨書
37	土師器	皿S	11.6		2.1	100	5YR7/6橙色	石室98	赤色系
38	土師器	皿S	11.7		2.2	100	7.5YR7/4にぶい橙色	石室98	赤色系
39	土師器	皿S	11.9		1.9	65	7.5YR7/4にぶい橙色	石室98	赤色系、口縁部に煤付着
40	土師器	皿S	12.1		2.1	35	7.5YR7/4にぶい橙色	石室98	赤色系
41	土師器	蓋	8.3		(1.3)	65	2.5Y8/2灰白色	石室98	白色系
42	土師器	蓋	9.0		(1.3)	95	10YR8/2灰白色	石室98	白色系
43	土師器	蓋	10.7		(1.7)	70	10YR8/2灰白色	石室98	白色系
44	土師器	蓋	12.3		(1.9)	95	10YR8/3浅黄橙色	石室98	白色系
45	土師器	蓋	14.6		(2.6)	95	10YR8/3浅黄橙色	石室98	白色系
46	土師器	蓋	15.3		(2.0)	80	10YR8/3浅黄橙色	石室98	白色系
47	土師器	鉢	4.7		1.7	100	10YR7/4にぶい黄橙色	石室98	
48	土師器	高杯	8.3		(2.7)	杯部 100	7.5YR7/4にぶい橙色	石室98	
49	土師器	鉢	9.4	6.0	5.2	45	2.5Y8/2灰白色	石室98	回転台成形
50	染付磁器	蓋	7.2		1.0	95	N9/0白色	石室98	
51	染付磁器	蓋	9.7		2.7	50	N9/0白色	石室98	内外面に松竹梅文
52	染付磁器	椀	11.0	4.0	5.9	90	N9/0白色	石室98	高台内側に印
53	染付磁器	椀	8.0	3.0	3.6	30	N9/0白色	石室98	
54	染付磁器	椀	10.4	3.4	4.9	50	N9/0白色	石室98	
55	染付磁器	椀	10.0	4.0	6.2	35	N9/0白色	石室98	底部内面に松竹梅文
56	染付磁器	皿	12.0	7.8	2.6	40	N9/0白色	石室98	口縁部が輪花状、蛇の目高台
57	染付磁器	皿	10.3	5.7	1.9	90	N9/0白色	石室98	高台内側に角福文
58	施釉陶器	蓋	5.3	2.3	9.7	100	7.5YR7/6橙色 (釉)7.5YR4/2灰褐色	石室98	土瓶蓋 つまみに十六弁菊文の意匠
59	施釉陶器	蓋	9.1		3.1	55	10YR8/3浅黄橙色 (釉)10YR7/2灰白色	石室98	
60	施釉陶器	蓋	3.2		1.9	95	10YR8/4浅黄橙色	石室98	
61	施釉陶器	合子	4.5	2.6	2.3	50	5Y8/2灰白色	石室98	
62	施釉陶器	灯明皿	9.0	2.0	4.5	50	2.5Y7/2灰黄色 (釉)5Y6/2灰オリーブ色	石室98	口縁部内面に六弁の花文を貼付
63	施釉陶器	湯桶	12.0	8.8	9.9	50	5Y8/2灰白色	石室98	高台周辺に煤付着
64	土師器	皿Nr	5.1		1.3	70	5YR6/6橙色	土坑50	
65	土師器	皿Sbh	6.1		1.3	55	10YR8/3浅黄橙色	土坑50	
66	土師器	皿Sbh	8.1		1.7	100	7.5YR7/4にぶい橙色	土坑50	

※( )は残存数値

No.	器種	器形	法量(cm)			残存率(%)	色調	出土地点・遺構	備考
			口径	底径	器高				
67	土師器	皿S	10.1		1.8	100	7.5YR8/4浅黄橙色	土坑50	白色系
68	土師器	皿S	10.1		1.6	95	7.5YR8/3浅黄橙色	土坑50	白色系、口縁部に煤付着
69	土師器	皿S	10.1		1.8	90	7.5YR8/4浅黄橙色	土坑50	白色系
70	土師器	皿S	10.2		1.8	95	10YR8/2灰白色	土坑50	白色系、口縁部に煤付着
71	土師器	皿S	11.5		2.1	65	10YR8/2灰白色	土坑50	白色系、口縁部に煤付着
72	土師器	皿S	11.7		1.8	65	10YR8/1灰白色	土坑50	白色系、口縁部に煤付着
73	土師器	皿S	11.7		2.0	50	7.5YR8/4浅黄橙色	土坑50	白色系
74	土師器	皿S	11.8		2.1	100	10YR8/2灰白色	土坑50	白色系、口縁部に煤付着
75	土師器	皿S	11.9		2.1	95	10YR8/2灰白色	土坑50	白色系、口縁部に煤付着
76	土師器	皿S	12.0		2.2	95	10YR8/3浅黄橙色	土坑50	白色系、口縁部に煤付着
77	土師器	蓋	12.5		1.9	95	7.5YR8/4浅黄橙色	土坑50	白色系
78	土師器	蓋	13.1		1.9	50	10YR8/3浅黄橙色	土坑50	白色系
79	染付磁器	椀	9.9	4.3	5.4	45	N8/0灰白色	土坑50	高台内側に「大明成(化年製)」
80	土師器	皿S	11.9		2.1	50	7.5YR8/4浅黄橙色	土坑59	白色系、口縁部に煤付着
81	土師器	皿S	12.1		2.4	35	7.5YR8/4浅黄橙色	土坑59	白色系、口縁部に煤付着
82	土師器	皿S	11.8		2.4	90	5YR6/6橙色	土坑59	赤色系
83	土師器	皿S	12.0		2.4	95	5YR6/6橙色	土坑59	赤色系、口縁部に煤付着
84	土師器	蓋	13.0		(1.9)	35	10YR7/3にぶい黄橙色	土坑59	白色系、内面に煤付着
85	土師器	高杯	10.9		(11.5)	杯部 50 脚部 85	5YR6/6橙色	土坑59	赤色系、回転台成形
86	染付磁器	椀	9.2	3.8	5.3	55	N8/0灰白色	土坑59	亀甲文と十六弁菊文、禁裏御用品
87	土師器	蓋	12.4		(1.7)	95	10YR8/3浅黄橙色	土器溜60	白色系
88	土師器	蓋	12.6		(2.3)	60	10YR8/2灰白色	土器溜60	白色系
89	土師器	蓋	12.7		(1.9)	70	10YR8/3浅黄橙色	土器溜60	白色系
90	土師器	蓋	12.8		(2.0)	85	10YR8/2灰白色	土器溜60	白色系
91	土師器	蓋	12.8		(1.3)	40	10YR8/2灰白色	土器溜60	白色系
92	土師器	蓋	13.1		(2.0)	80	10YR8/2灰白色	土器溜60	白色系
93	土師器	皿S	11.8		1.8	95	7.5YR8/4浅黄橙色	石室70	白色系
94	土師器	皿S	12.5		2.2	75	10YR7/4にぶい黄橙色	石室70	白色系
95	土師器	皿S	9.9		1.7	100	7.5YR7/4にぶい橙色	石室70	赤色系
96	土師器	皿S	10.1		1.7	100	7.5YR7/3にぶい橙色	石室70	赤色系
97	土師器	皿S	10.4		1.3	70	7.5YR7/4にぶい橙色	石室70	赤色系
98	土師器	皿S	11.4		1.8	85	7.5YR7/4にぶい橙色	石室70	赤色系、口縁部に煤付着
99	土師器	皿S	11.7		1.8	95	7.5YR7/4にぶい橙色	石室70	赤色系

※( )は残存数値

No.	器種	器形	法量(cm)			残存率(%)	色調	出土地点・遺構	備考
			口径	底径	器高				
100	土師器	皿S	11.7		1.8	100	7.5YR7/4にぶい橙色	石室70	赤色系
101	土師器	皿S	11.9		2.2	100	5YR7/6橙色	石室70	赤色系、口縁部に煤付着
102	土師器	皿S	11.9		1.9	100	7.5YR7/4にぶい橙色	石室70	赤色系
103	土師器	皿S	11.9		2.0	95	7.5YR6/6橙色	石室70	赤色系
104	土師器	皿S	12.1		2.3	95	7.5YR6/6橙色	石室70	赤色系、口縁部に煤付着
105	染付磁器	蓋	9.9		3.1	60	N8/0灰白色	石室70	外面に松竹梅文
106	染付磁器	猪口	7.1	5.2	5.6	55	N8/0灰白色	石室70	いわゆる蕎麦猪口
107	染付磁器	椀	13.6	4.6	6.6	75	N8/0灰白色	石室70	外面に鶴と松、底部内面に松竹梅文
108	染付磁器	椀	9.8	4.4	3.4	100	N8/0灰白色	石室70	外面に鶴と松、底部内面に松竹梅文
109	施釉陶器	灯明皿	12.7	4.8	2.8	70	10YR6/3にぶい黄橙色 (釉)2.5Y6/3にぶい黄色	石室70	口縁部内面に十六弁菊文を貼付
110	施釉陶器	椀	9.5	3.7	5.8	15	2.5Y8/2灰白色 (釉)2.5Y8/4淡黄色	石室70	いわゆる小杉椀
111	施釉陶器	鍋	14.2	6.4	7.8	95	10YR6/2灰黄褐色 (釉)5YR4/4にぶい赤褐色	石室70	
112	土師器	皿Nr	4.7		1.0	35	10YR8/3浅黄橙色	土坑66	白色系、ヘソ皿
113	土師器	皿S	9.4		1.7	100	10YR8/3浅黄橙色	土坑66	白色系
114	土師器	皿S	9.5		1.4	60	10YR8/2灰白色	土坑66	白色系
115	土師器	皿S	9.6		1.6	40	10YR8/3浅黄橙色	土坑66	白色系
116	土師器	皿S	10.5		1.8	75	7.5YR8/4浅黄橙色	土坑66	白色系
117	土師器	皿S	10.7		2.0	40	10YR8/3浅黄橙色	土坑66	白色系
118	土師器	皿S	10.9		1.8	30	10YR8/3浅黄橙色	土坑66	白色系
119	土師器	皿S	11.2		2.0	100	10YR8/3浅黄橙色	土坑66	白色系
120	土師器	皿S	11.3		1.8	100	10YR8/3浅黄橙色	土坑66	白色系
121	土師器	皿S	11.7		1.7	95	2.5Y8/2灰白色	土坑66	白色系
122	土師器	皿S	13.9		2.1	30	10YR8/3浅黄橙色	土坑66	白色系
123	土師器	蓋	8.7		1.9	95	10YR8/2灰白色	土坑66	白色系
124	土師器	蓋	10.7		2.3	35	10YR8/3浅黄橙色	土坑66	白色系、内面に墨書
125	土師器	蓋	14.4		(2.2)	50	10YR8/2灰白色	土坑66	白色系
126	土師器	不明	9.0		(2.2)	25	10YR8/3浅黄橙色	土坑66	白色系、内外面をヘラミガキ調整
127	染付磁器	蓋	9.9		3.1	50	N8/0灰白色	土坑66	
128	染付磁器	蓋	11.0		(3.2)	90	N8/0灰白色	土坑66	外面に大根文、底部内面に松竹梅文
129	染付磁器	椀	10.4	4.2	5.1	85	N8/0灰白色	土坑66	外面に松と雁
130	染付磁器	皿	23.8	15.0	3.4	10未満	N8/0灰白色	土坑66	
131	施釉陶器	椀	12.5	3.8	4.2	80	2.5Y8/3淡黄色 (釉)2.5Y8/3淡黄色	土坑66	
132	施釉陶器	椀	12.3	3.0	4.2	55	2.5Y8/3淡黄色 (釉)2.5Y8/3淡黄色	土坑66	底部内面に楼閣山水文、 高台内側に墨書

※(　)は残存数値

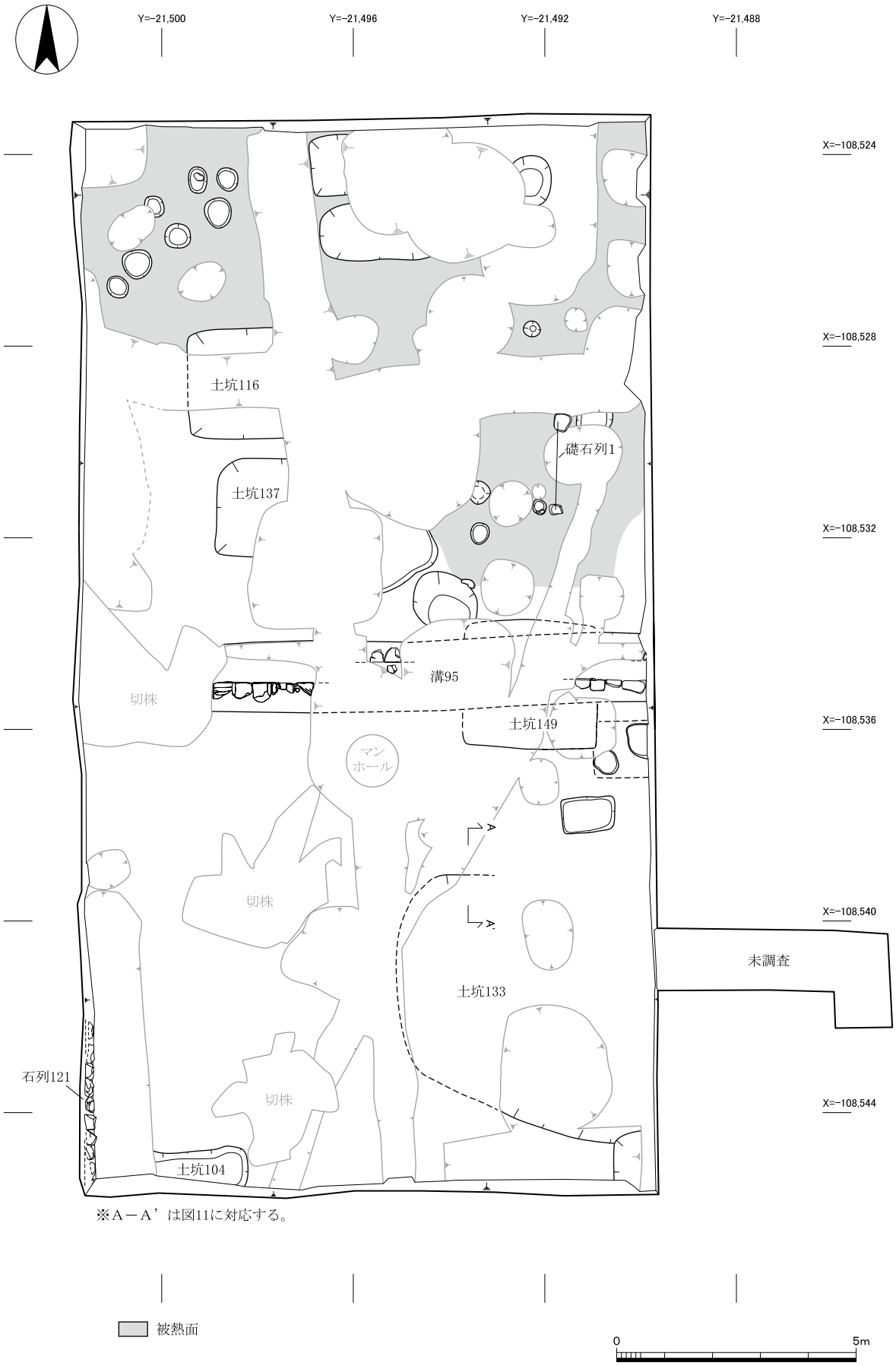
No.	器種	器形	法量(cm)			残存率(%)	色調	出土地点・遺構	備考
			口径	底径	器高				
133	施釉陶器	灯明皿受け	10.8	4.3	1.8	60	N8/0灰白色 (釉)5Y7/1灰白色	土坑66	
134	施釉陶器	鉢	4.1	4.3	5.4	80	10YR6/1灰色 (釉)10YR6/1灰色	土坑66	
135	施釉陶器	火入	9.8	4.2	7.6	70	7.5YR6/4にぶい橙色 (釉)10YR6/1灰色	土坑66	
136	土師器	皿S	9.6		1.4	50	10YR8/2灰白色	土坑11	白色系
137	土師器	皿S	9.9		1.8	70	2.5Y8/2灰白色	土坑11	白色系
138	土師器	皿S	10.2		1.9	100	2.5Y8/2灰白色	土坑11	白色系
139	土師器	皿S	10.2		1.6	70	10YR8/2灰白色	土坑11	白色系
140	土師器	皿S	10.5		1.6	50	10YR8/2灰白色	土坑11	白色系
141	土師器	皿S	11.8		1.6	95	10YR8/3浅黄橙色	土坑11	白色系
142	土師器	皿S	11.9		2.1	90	10YR8/2灰白色	土坑11	白色系
143	土師器	皿S	13.8		1.9	35	10YR8/2灰白色	土坑11	白色系
144	土師器	皿S	9.9		2.1	60	7.5YR7/4にぶい橙色	土坑11	赤色系
145	土師器	皿S	10.4		1.8	55	7.5YR7/4にぶい橙色	土坑11	赤色系
146	土師器	蓋	12.4		1.9	95	10YR8/3浅黄橙色	土坑11	白色系
147	土師器	蓋	13.6		2.0	45	2.5Y8/2灰白色	土坑11	白色系
148	施釉陶器	鍋	17.0	8.0	9.8	90	5YR6/4にぶい橙色 (釉)7.5YR3/1黒褐色	土坑11	外面底部に煤付着
149	土師器	皿S	11.4		2.1	30	7.5YR7/6橙色	溝7	赤色系
150	土師器	皿S	11.6		2.2	40	5YR6/6橙色	溝7	赤色系、口縁部に煤付着
151	土師器	蓋	12.4		(2.0)	45	10YR8/2灰白色	溝7	白色系、口縁部に煤付着
152	土師器	蓋	12.5		(1.9)	40	10YR8/3浅黄橙色	溝7	白色系
153	土師器	蓋	13.2		(1.8)	50	10YR8/1灰白色	溝7	白色系
154	土師器	蓋	11.3		(1.8)	70	2.5Y8/2灰白色	溝7	白色系
155	染付磁器	蓋	12.0		(2.7)	35	N9/0白色	溝7	外面に松竹梅文
156	染付磁器	皿	11.6	7.2	2.6	50	N8/0灰白色	溝7	口縁部は輪花状、内外面に松喰鶴文、高台内側に「富(貴)長春」
157	染付磁器	椀	10.1	4.5	5.1	10	10YR8/2灰白色	石室98	体部中位の厚み3㎜ 割菱文と十六弁菊文、禁裏御用品
158	染付磁器	椀	10.1		(5.1)	10	10YR8/2灰白色	土坑50	体部中位の厚み3㎜ 割菱文と十六弁菊文、禁裏御用品
159	染付磁器	椀	10.2		(4.1)	20	10YR8/2灰白色	溝7	体部中位の厚み2.5㎜ 割菱文と十六弁菊文、禁裏御用品
160	染付磁器	椀			(3.8)	10以下	10YR8/2灰白色	石室89	体部中位の厚み4㎜ 十六弁八重表菊文、禁裏御用品
161	染付磁器	椀	10.1		(4.4)	10	10YR8/2灰白色	土坑66	体部中位の厚み2.5㎜ 桜垣文と光格天皇菊御紋、禁裏御用品
162	染付磁器	椀			(2.2)	10以下	10YR8/2灰白色	石室98	体部中位の厚み2.5㎜ 紗綾形文と仙洞菊文、禁裏御用品
163	染付磁器	椀	7.7	3.5	4.8	30	10YR8/2灰白色	第2面 検出時	体部中位の厚み3㎜ 紗綾形文と仙洞菊文、禁裏御用品
164	染付磁器	椀			(4.9)	10以下	10YR8/2灰白色	第2面 掘り下げ時	体部中位の厚み3㎜ 紗綾形文と仙洞菊文、禁裏御用品
165	染付磁器	皿	10.6	6.0	2.3	15	10YR8/2灰白色	第3面 掘り下げ時	体部中位の厚み3㎜ 笹垣文と仙洞菊文、禁裏御用品
166	施釉陶器	椀		4.0	(2.0)	10以下	2.5Y8/2灰白色 (釉)2.5Y8/4淡黄色	溝7	体部中位の厚み3.5㎜ 十六弁八重表菊文、禁裏御用品

※( )は残存数値

付表２　金属製品観察表

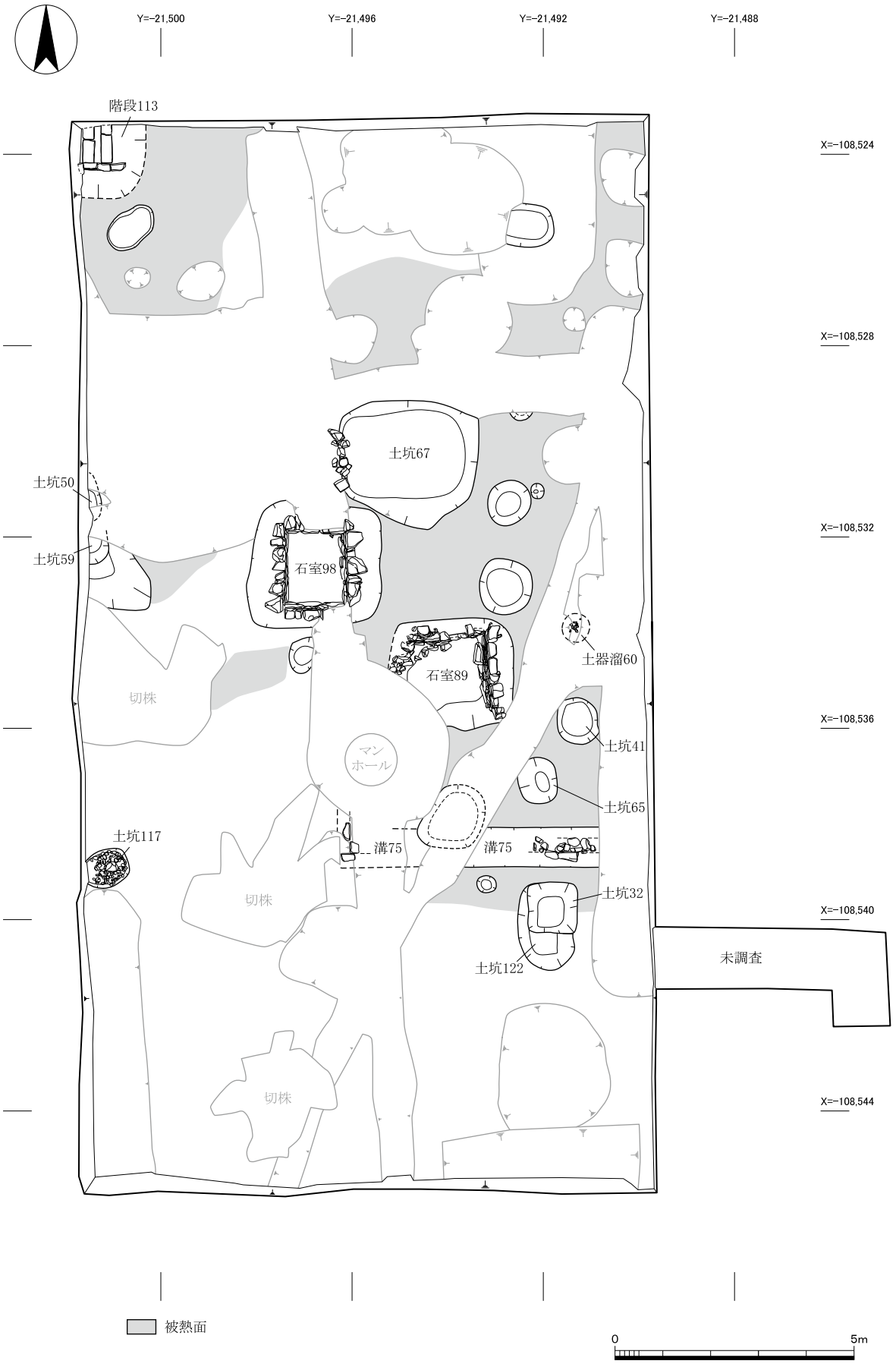
No.	種類	法量	重量	出土地点・遺構	備考
金1	煙管	長さ3.9㎝、高さ1.8㎝、幅1.4㎝	7.0g	溝95	蝋付けの痕跡あり
金2	煙管銭	直径2.3～2.4㎝、厚さ0.2㎝	3.0g	溝95	
金3	蓋	口縁径2.3㎝、体部最大径2.6㎝、高さ0.7㎝	7.1g	土坑66	鉛製か
金4	蓋	口縁径4.0㎝、高さ0.7㎝	9.8g	石室70	鉛製か
金5	不明製品	縦幅1.2㎝、横幅1.2㎝、奥行き0.6㎝	0.5g	第2面掘り下げ時	銅製、亀甲状の文様あり
金6	不明製品	縦幅1.5㎝、横幅1.6㎝、奥行き3.1㎝	2.0g	土坑66	鋲状の製品、揚羽蝶文
金7	不明製品	縦幅1.4㎝、横幅2.6㎝、奥行き0.5㎝	2.8g	土坑59	双円形の製品、目貫か
金8	簪	長さ10.4㎝、幅1.3㎝、厚さ0.2㎝	2.3g	溝95	
金9	銭貨「寛永通寶」	直径2.4㎝、厚さ0.1㎝	2.3g	土坑50	新寛永

図　　版

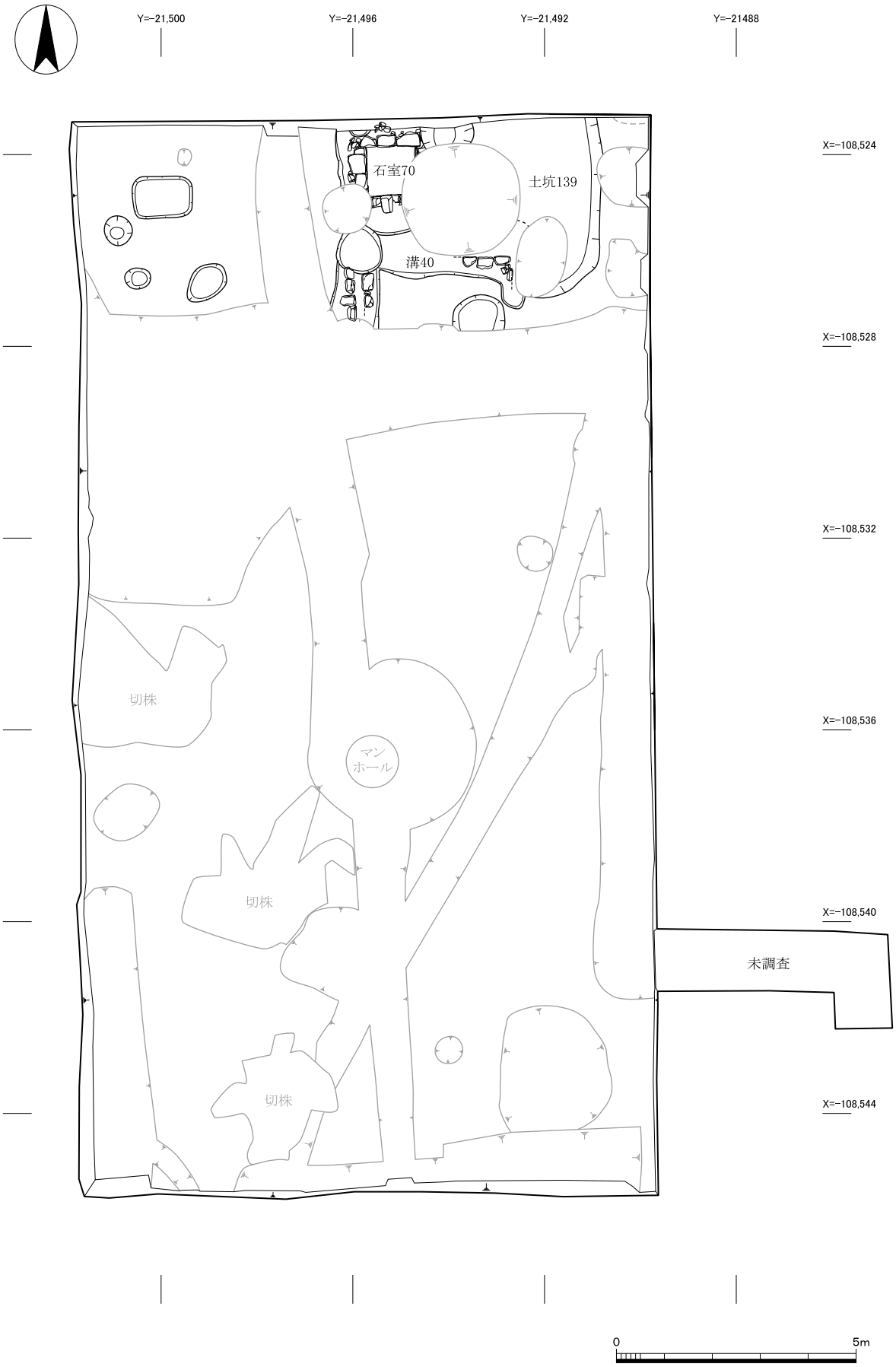


※Ａ－Ａ’は図11に対応する。

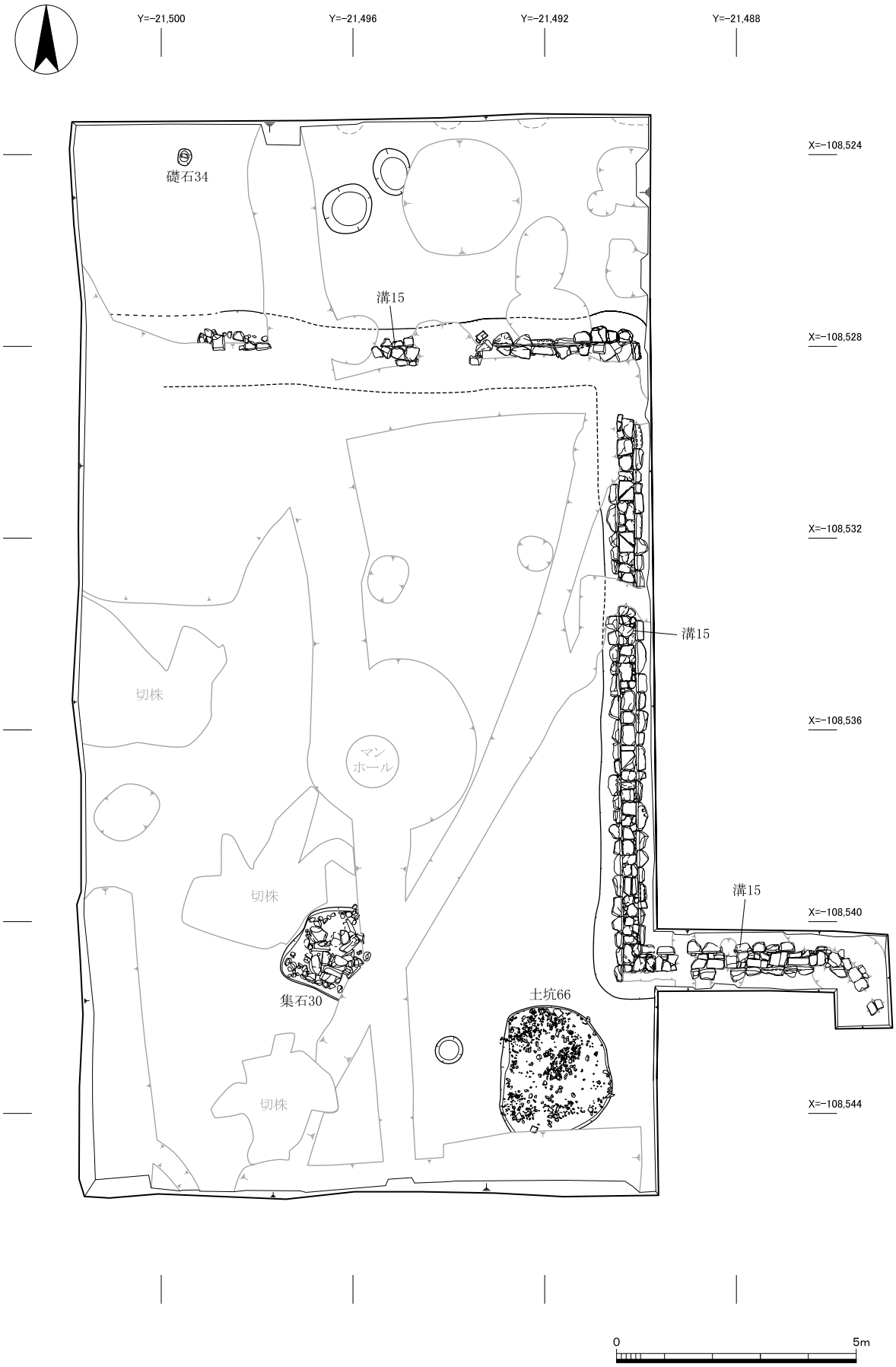
第４面遺構平面図（１：120）



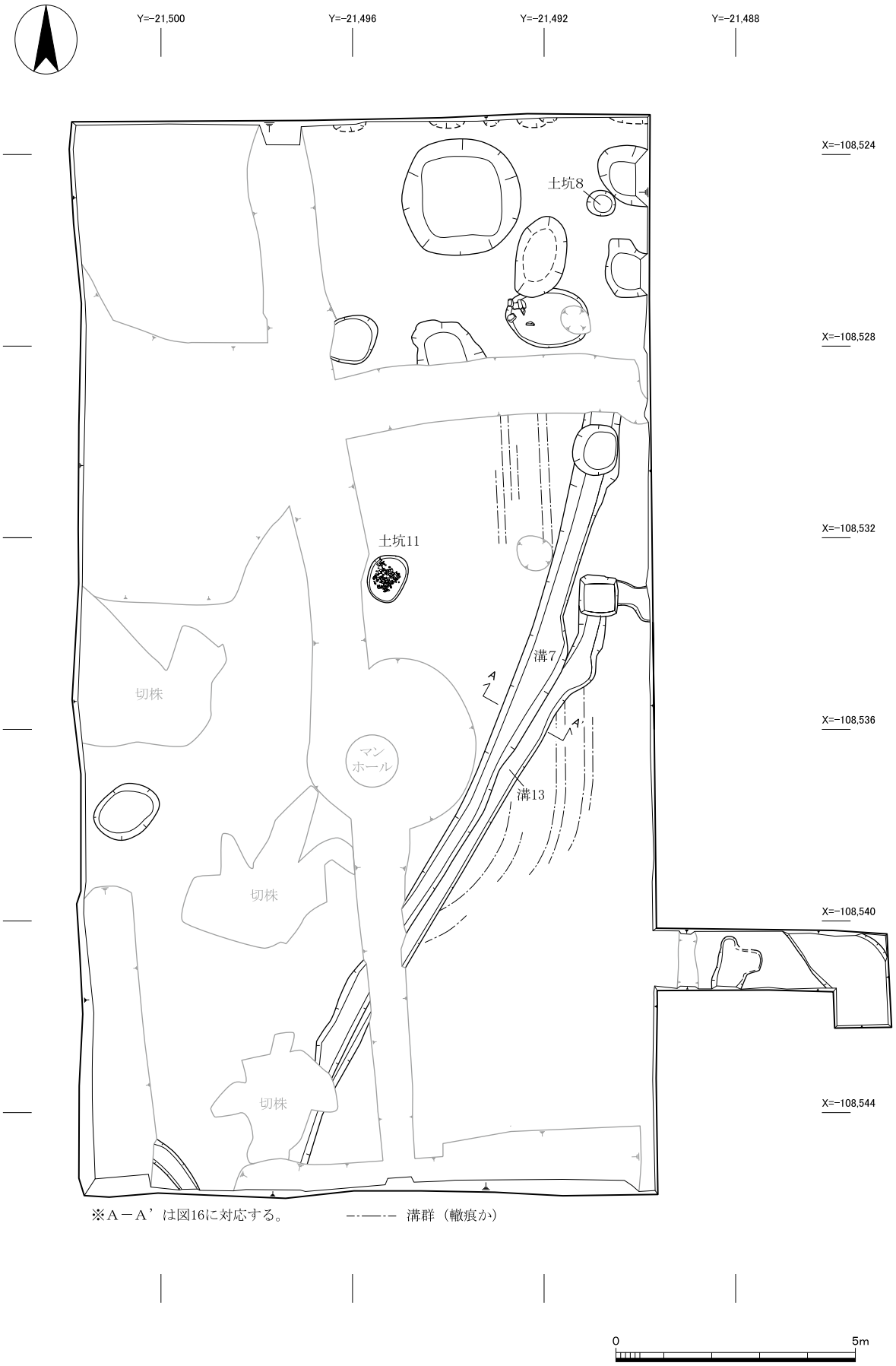
第３－ｂ面遺構平面図（１：120）



第３－ａ面遺構平面図（１：120）

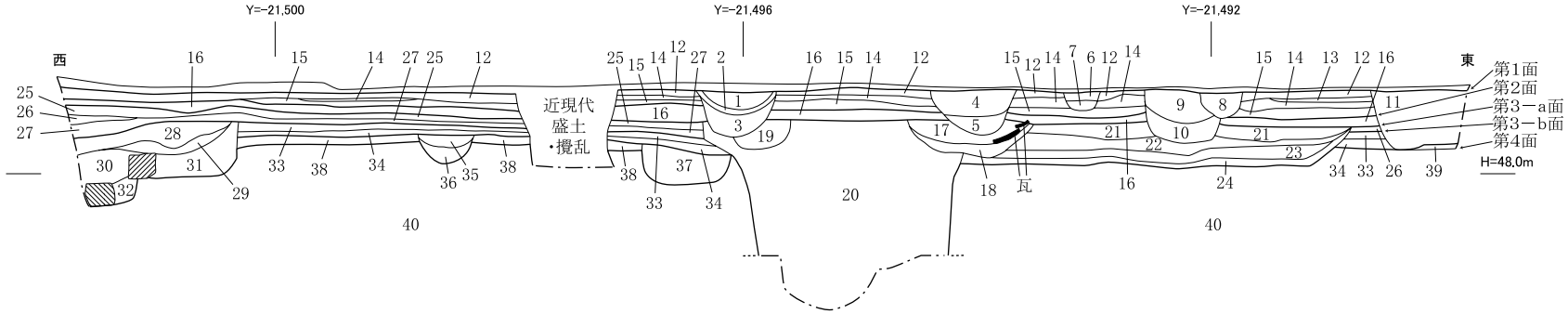


第２面遺構平面図（１：120）



※A－A’は図16に対応する。　　溝群（轍痕か）

第１面遺構平面図（１：120）



1 10YR5/3にぶい黄褐色 微砂 土器片混
2 10YR4/6褐色 シルト
3 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂礫 φ10cm以上の礫・花崗岩片多量混
土坑143埋土

4 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂
5 10YR3/4暗褐色 細砂 瓦片混
土坑144埋土

6 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂 焼土多量混
7 10YR5/3にぶい黄褐色 細砂
土坑145埋土

8 10YR5/3にぶい黄褐色 細砂
土坑151埋土

9 7.5YR5/6明褐色 粘土 瓦片混
10 10YR4/2灰黄褐色 細砂 焼土混
土坑146埋土

11 10YR5/3にぶい黄褐色 細砂 φ1～10cmの礫多量混
土坑147埋土

12 10YR5/8黄褐色 シルト(化粧土)
13 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト
14 10YR5/3にぶい黄褐色 細砂
15 10YR5/3にぶい黄褐色 細砂 φ1～3cmの礫多量混
整地層Ⅰ

16 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 粘性あり φ0.2cm程度の礫混
整地層Ⅱ

17 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 瓦片多量混
18 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂 花崗岩片混
土坑148埋土

19 7.5YR3/3暗褐色 細砂
土坑54埋土

20 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ1～20cmの礫多量混 粗砂混
石室70掘形埋土

21 10YR6/3にぶい黄橙色 細砂 瓦片混 花崗岩片混
22 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂
23 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 花崗岩片混
土坑139埋土

24 10YR4/3にぶい黄褐色 粘土
土坑139構築土

25 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土混
26 10YR3/3暗褐色 シルト 炭混 焼土多量混
27 10YR4/2灰黄褐色 微砂 粘質 炭・焼土混
整地層Ⅲ

28 7.5YR4/4褐色 シルト 焼土多量混
29 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂
30 10YR4/3にぶい黄褐色 砂質土 φ0.5～15cmの礫混
階段113埋土

31 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト φ0.5～5cmの礫・瓦片多量混
32 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト φ0.5～5cmの礫
階段113構築土

33 10YR4/4褐色 シルト φ0.5～2cmの礫多量混 土器片・焼土混
34 10YR4/1褐灰色 シルト φ2～4cm礫混
整地層Ⅳ

35 10YR4/2灰黄褐色 微砂 φ2～5cmの礫多量混
36 10YR4/2灰黄褐色 微砂 炭・土器片混
土坑93埋土

37 10YR4/4にぶい黄褐色 細砂
土坑101埋土

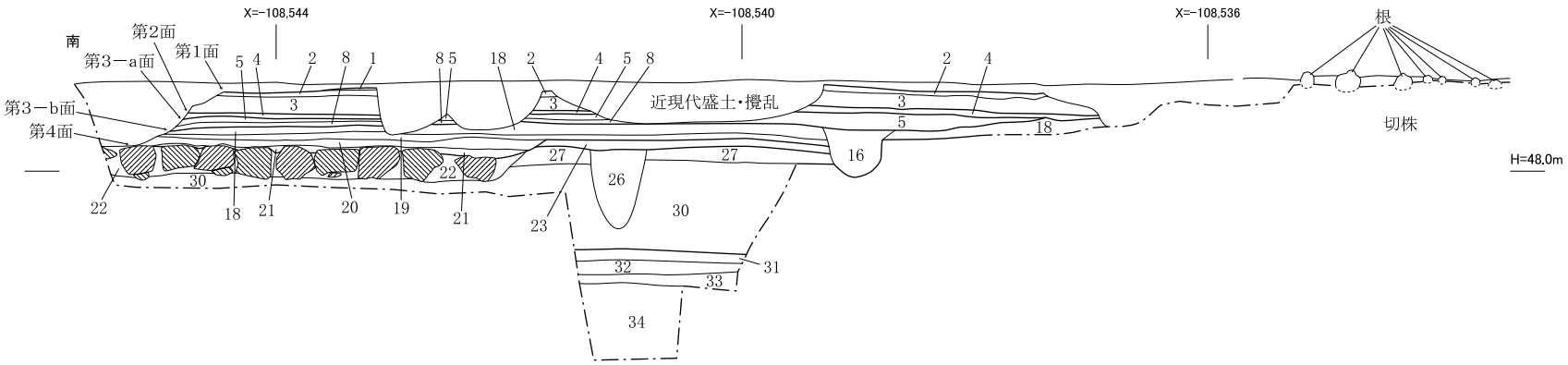
38 10YR4/2灰黄褐色 微砂 φ0.2～2cmの礫・炭・焼土混
39 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土多量混
整地層Ⅴ

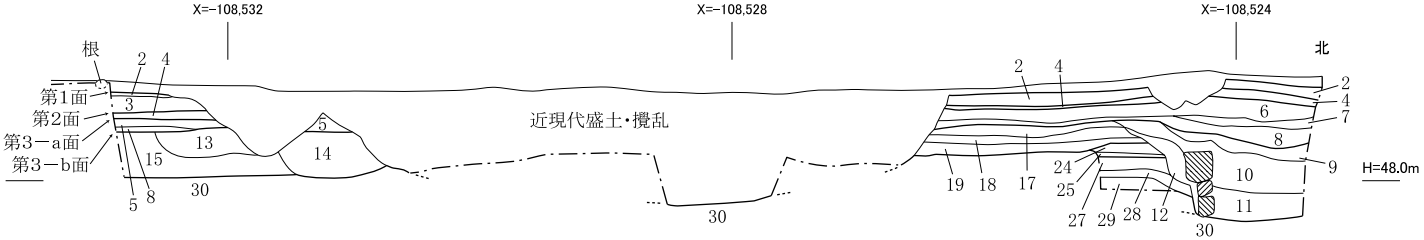
40 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂 φ1～13cmの礫多量混
ブロック状のシルトわずかに混
洪水堆積層

0 3m

調査区北壁断面図（1：60）

調査区西壁断面図（1：60）





1 10YR6/1褐灰色 粗砂 φ0.2cm程度の風化花崗岩(白川砂)
2 10YR5/8黄褐色 シルト(化粧土)
3 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂 φ1～2cmの礫混
4 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 粘質 φ0.2cm程度の礫混
5 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 シルト混 φ0.3～0.4cmの礫混
6 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土混
7 10YR3/3暗褐色 シルト 炭混 焼土多量混
8 10YR4/2灰黄褐色 微砂 粘質 炭・焼土混
9 7.5YR4/4褐色 シルト 焼土多量混
10 10YR4/3にぶい黄褐色 砂質土 φ0.5～15cmの礫混
11 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト φ0.5～5cmの礫・瓦片多量混
12 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト φ0.5～5cmの礫多量混
13 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ0.5～1cmの礫混 炭・土器片混 上面被熱
14 10YR3/3暗褐色 細砂 φ0.5～1cmの礫混 炭・土器片多量混
15 7.5Y5/4にぶい褐色 シルト 焼土多量混
16 10YR4/2灰黄褐色 微砂 φ1～10cmの礫少量混

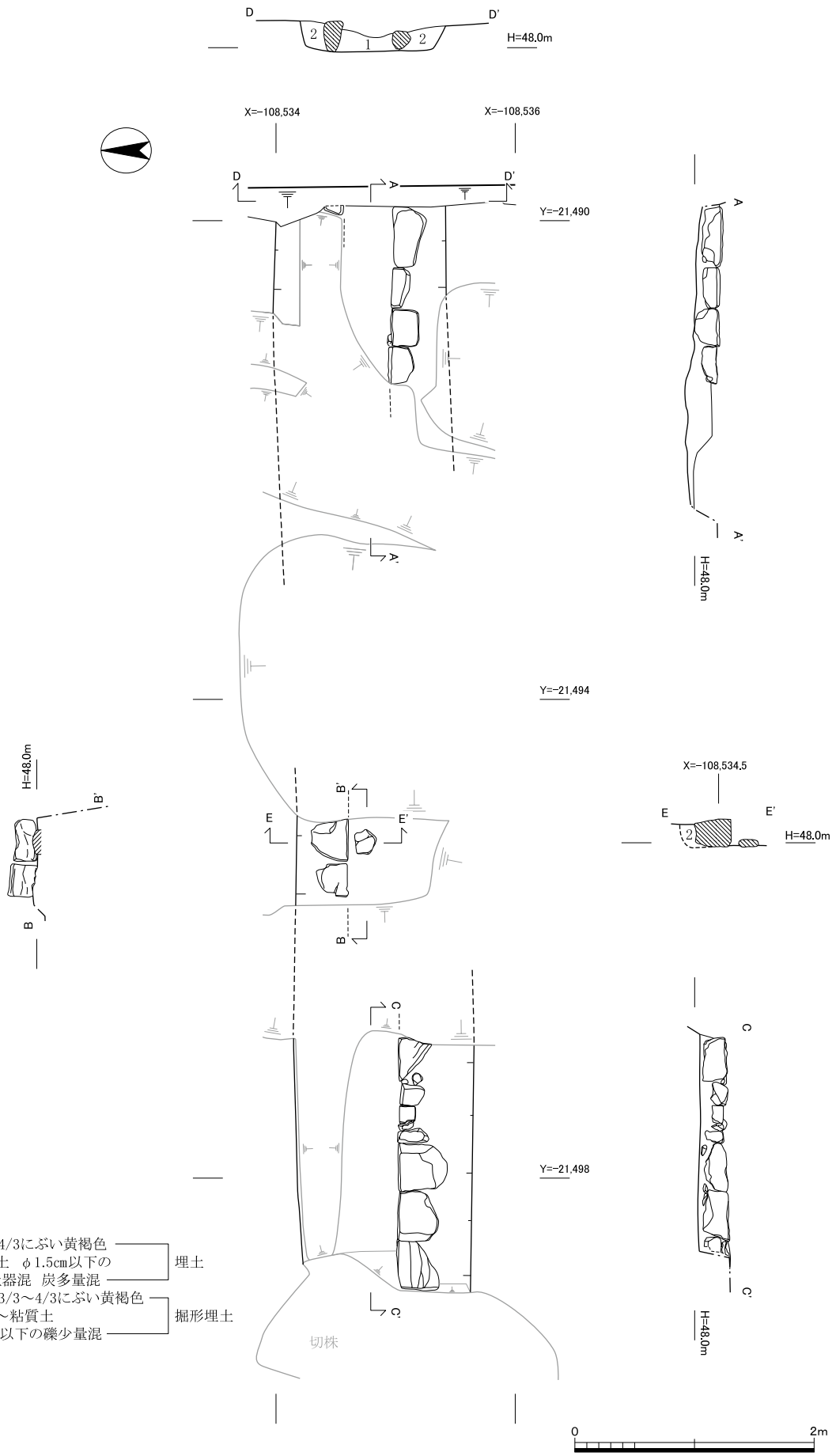
整地層Ⅰ
整地層Ⅱ
整地層Ⅲ
階段113埋土
階段113構築土
土坑59埋土
土坑50埋土
土坑125埋土
土坑117埋土

17 10YR4/4褐色 シルト φ0.5～2cmの礫多量混 土器片・焼土混 上面被熱
18 10YR4/1褐灰色 シルト φ2～4cmの礫混
19 10YR4/2灰黄褐色 微砂 φ0.2～2cmの礫混 炭・焼土混
20 10YR3/3暗褐色 細砂 φ0.5～1cmの礫多量混
21 7.5YR4/2灰褐色 シルト 焼土多量混
22 10YR4/2灰黄褐色 細砂 φ1～5cmの礫多量混
23 10YR4/2灰黄褐色 シルト 炭混 上面被熱
24 10YR3/3暗褐色 微砂 焼土混
25 7.5YR3/3暗褐色 微砂 焼土多量混
26 7.5YR4/6褐色 細砂 鉄分多量混
27 10YR4/2灰黄褐色 シルト 上面被熱
28 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂 φ1～2cmの礫・焼土多量混
29 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ1～5cmの礫多量混 上面被熱か
30 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂 φ1～13cmの礫多量混
ブロック状のシルトわずかに混 しまる
31 7.5YR3/1黒褐色 シルト φ2cm程度の礫極少量混
32 10YR3/1黒褐色 シルト φ2～10cmの礫極少量混
33 10YR2/1黒色 シルト やや粘質
34 10YR3/3暗褐色 シルト φ1～10cm以上の礫多量混

整地層Ⅳ
石列121構築土
整地層Ⅴ
土坑152埋土
整地層Ⅵ
洪水堆積層
整地層Ⅶ
整地層Ⅷ

0 3m

図版7 遺構

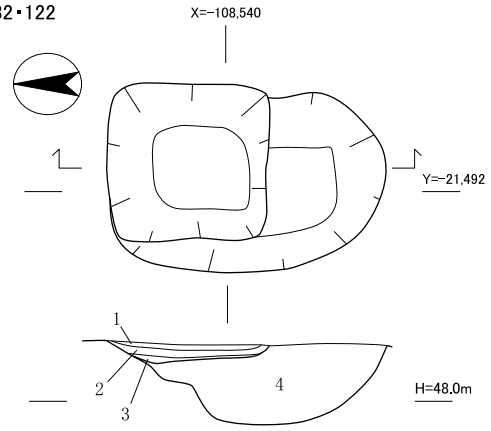


1　10YR4/3にぶい黄褐色
粘質土　φ1.5cm以下の
礫・土器混　炭多量混　埋土

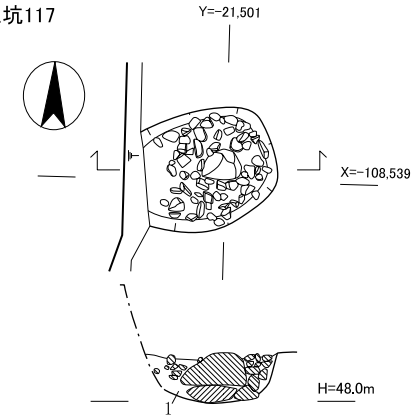
2　10YR3/3〜4/3にぶい黄褐色
粗砂〜粘質土
φ4cm以下の礫少量混　掘形埋土

溝95実測図（1：50）

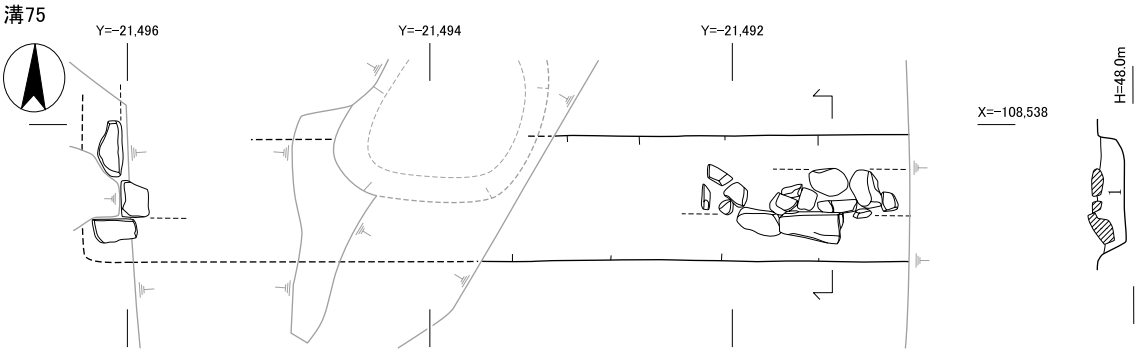
土坑32・122



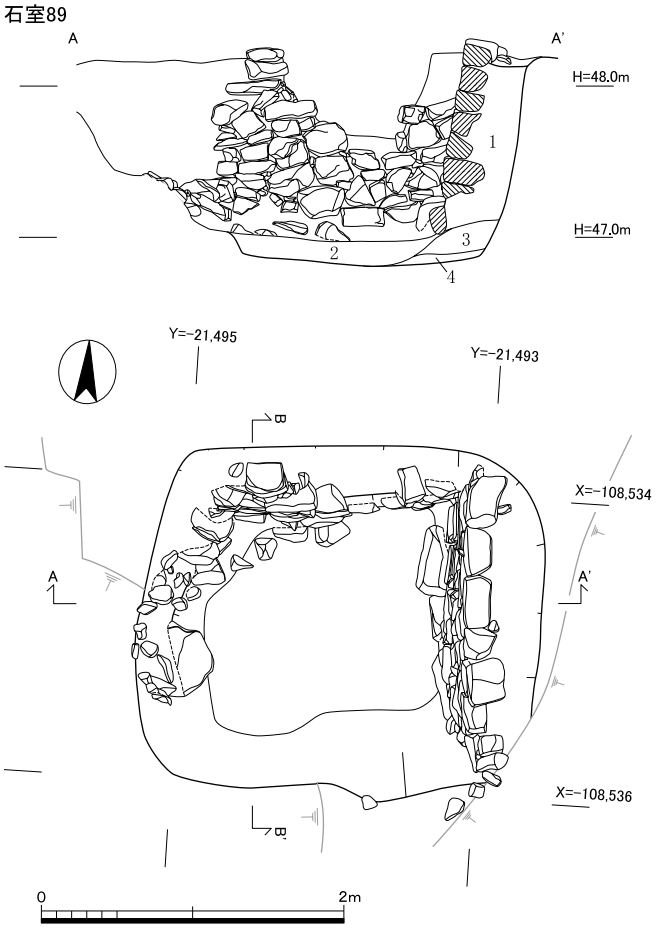
土坑117

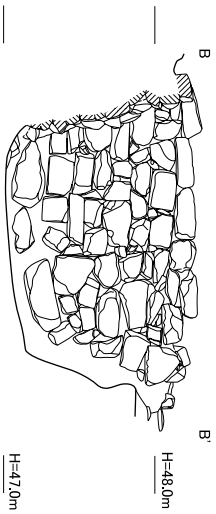


溝75



石室89





土坑32・122

1	10YR5/2灰黄褐色　細砂　焼土・炭・瓦片混	土坑32埋土
2	N1.5/0黒色　炭	土坑32埋土
3	5YR4/3にぶい赤褐色　細砂　焼土多量混	土坑32埋土
4	10YR4/1褐灰色　細砂　瓦片多量混、土器片少量混	土坑122埋土

土坑117

1	10YR3/2黒褐色　砂質土　φ50cm程度の石材・φ15～40cm程度の礫混　φ3～15cm程度の礫多量混	掘形埋土

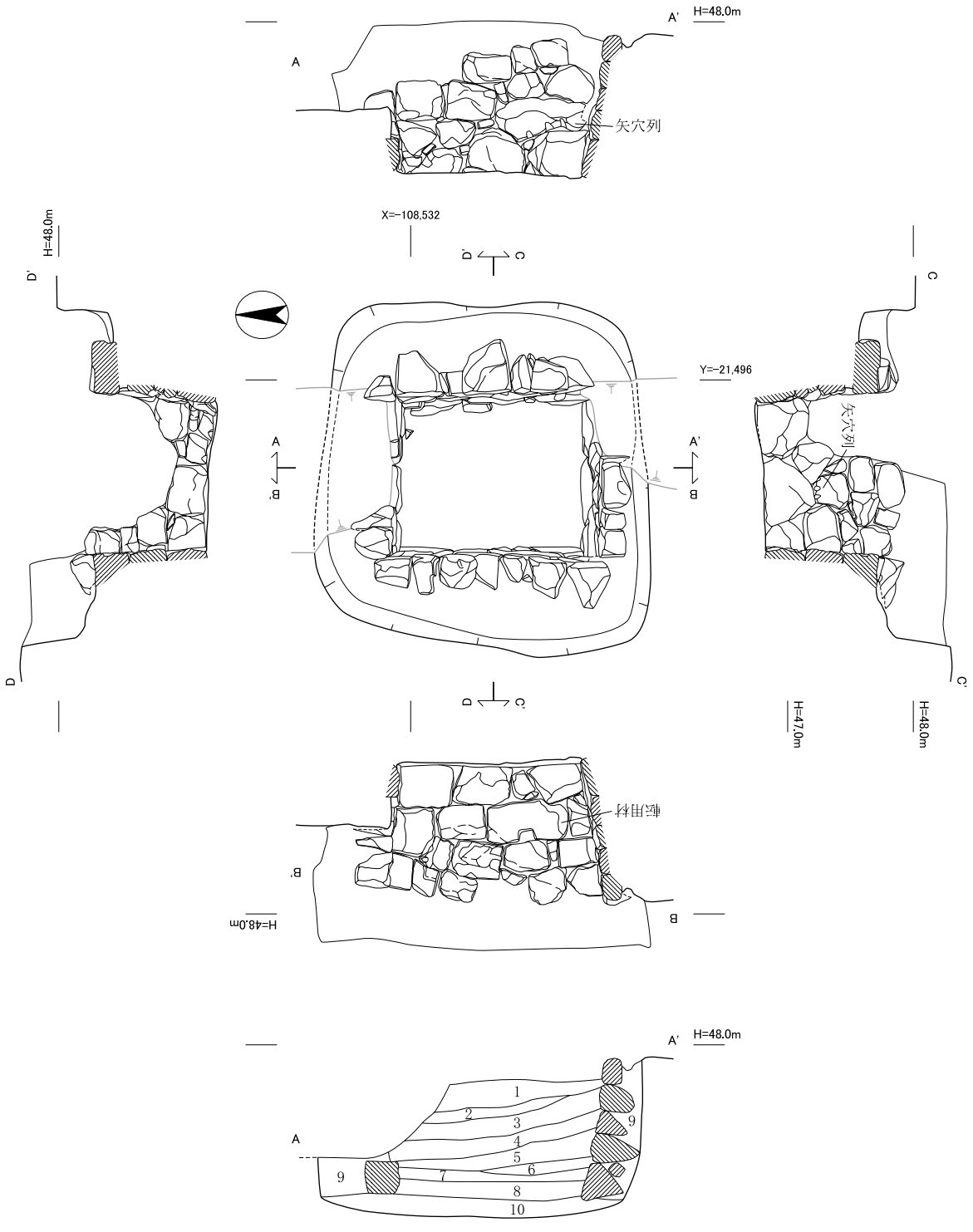
溝75

1	7.5YR4/2灰褐色　細砂　炭少量混　焼土混　φ3cm以下の礫混	掘形埋土

石室89

1	7.5YR3/4暗褐色　粗砂	掘形埋土
2	10YR3/4暗褐色　砂質	床面構築土
3	10YR4/3にぶい黄橙色　粗砂　粘質	床面構築土
4	10YR3/4暗褐色　粘質	床面構築土

土坑32・117・122、溝75、石室89実測図（1：50）

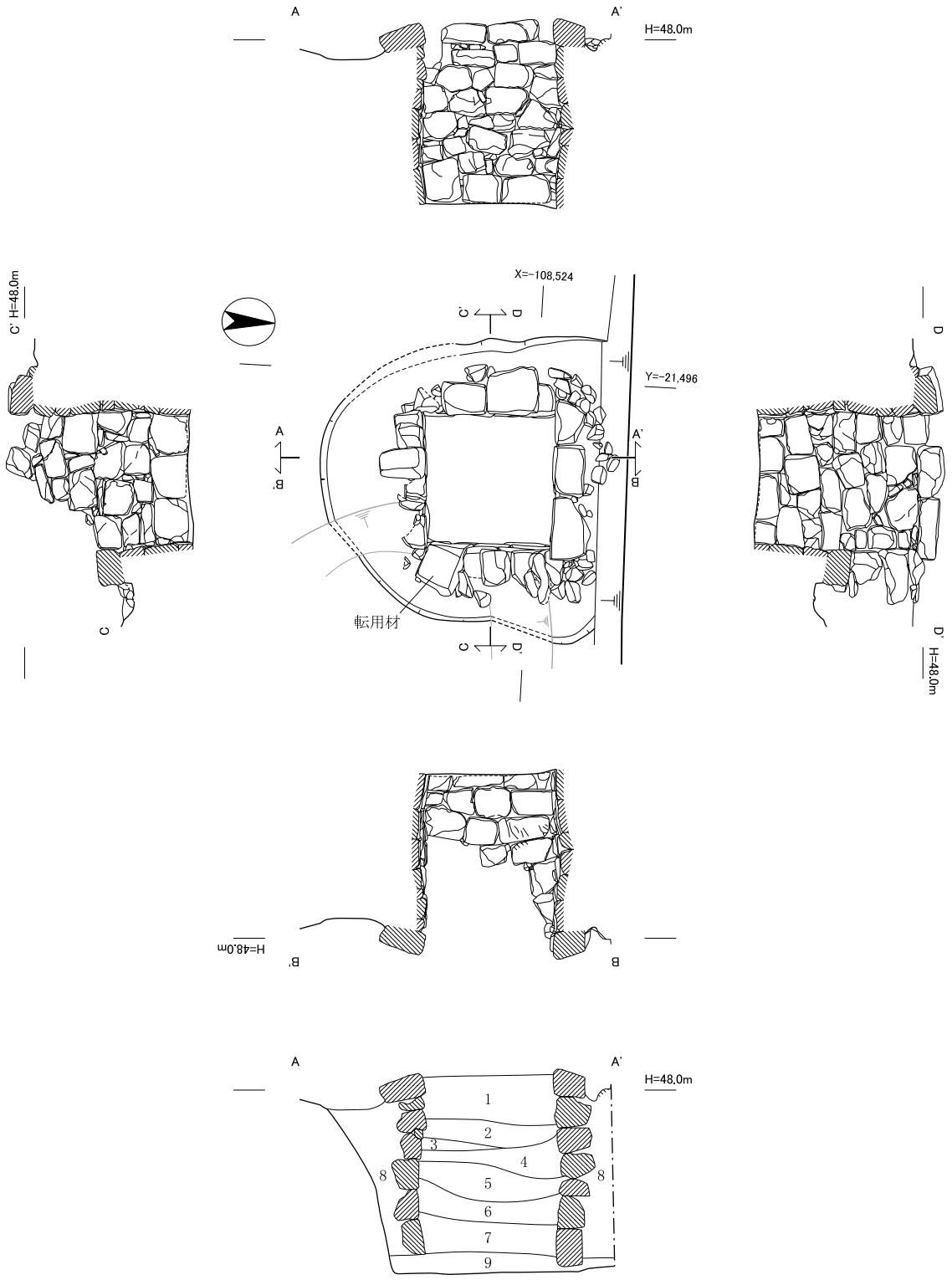


1 10YR3/2黒褐色 細砂 炭・焼土・土器片混
2 10YR4/1褐灰色 粘質微砂 炭少量混
3 10YR3/2黒褐色 粘質細砂 炭・土器片多量混
4 7.5YR3/1黒褐色 細砂 炭・焼土混 土器片多量混
5 7.5YR3/2黒褐色 細砂 φ8cm程度の礫多量混 土器片混
6 10YR4/1褐灰色 細砂 炭・土器片混
7 10YR3/2黒褐色 細砂 炭中量混 土器片少量混
8 10YR4/2灰黄褐色 細砂 炭・焼土混 φ5cm程度の礫混
9 10YR3/2黒褐色 細砂 φ10cm以下の礫混
10 7.5YR3/4暗褐色 細砂 炭・焼土混

埋土
掘形埋土
床面構築土

0 2m

石室98実測図（1：50）

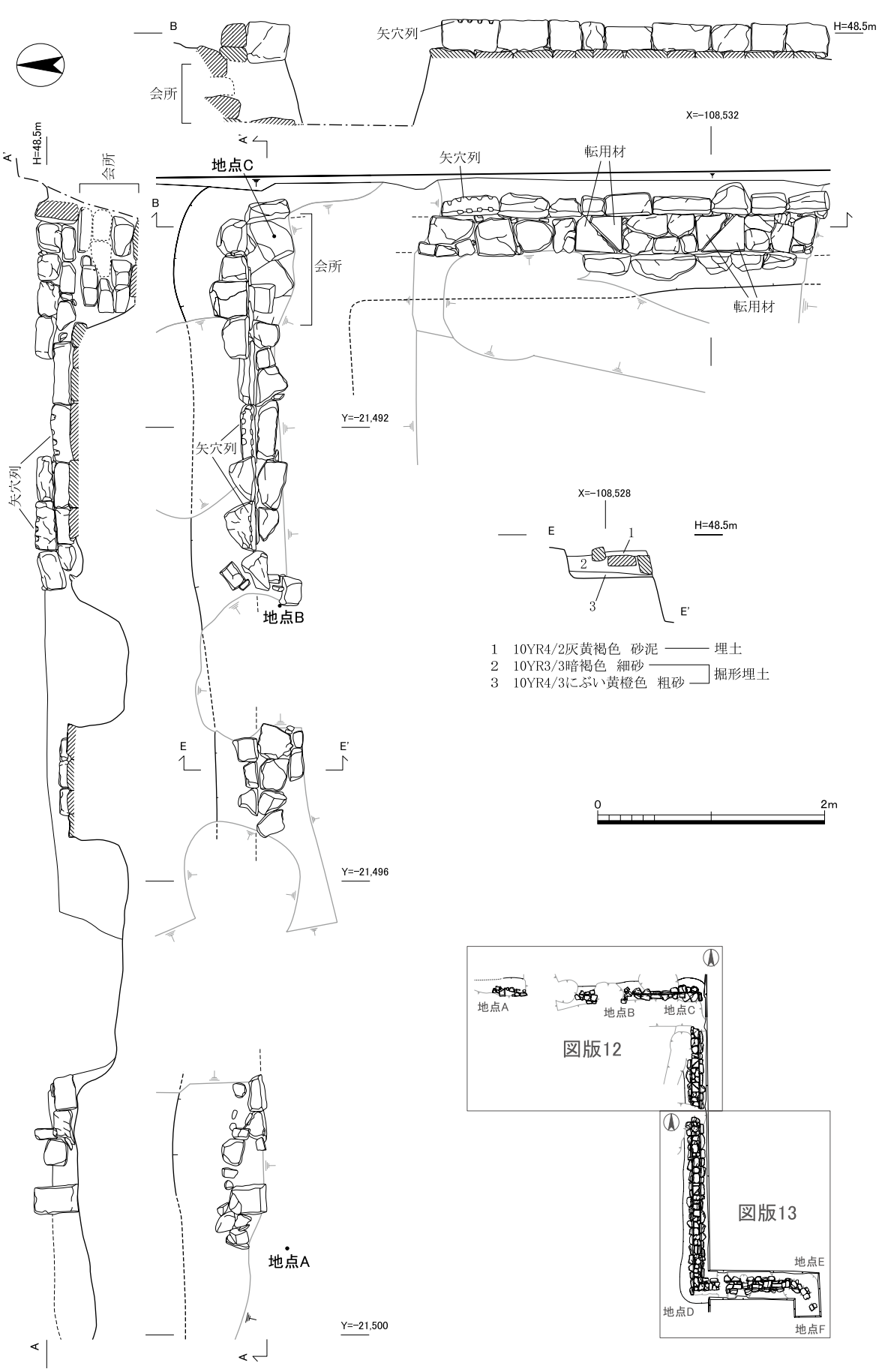


1　7.5YR3/2黒褐色　細砂　φ5cm以下の礫少量混　炭・焼土混
2　10YR3/2黒褐色　細砂　φ5cm以下の礫混　炭・焼土少量混
3　7.5YR4/3褐色　細砂　炭・焼土混
4　7.5YR4/2灰褐色　細砂　φ10cm程度の礫多量混
5　10YR4/2灰黄褐色　細砂　炭・焼土・漆喰ブロック混
6　7.5YR3/3暗褐色　細砂　φ2cm程度の礫・炭混　焼土ブロック多量混
7　7.5YR3/1黒褐色　細砂　炭・土器片多量混、焼土少量混
8　10YR4/2灰黄褐色　細砂　φ5～15cmの礫混
9　7.5YR3/2黒褐色　細砂　φ3～8cmの礫混

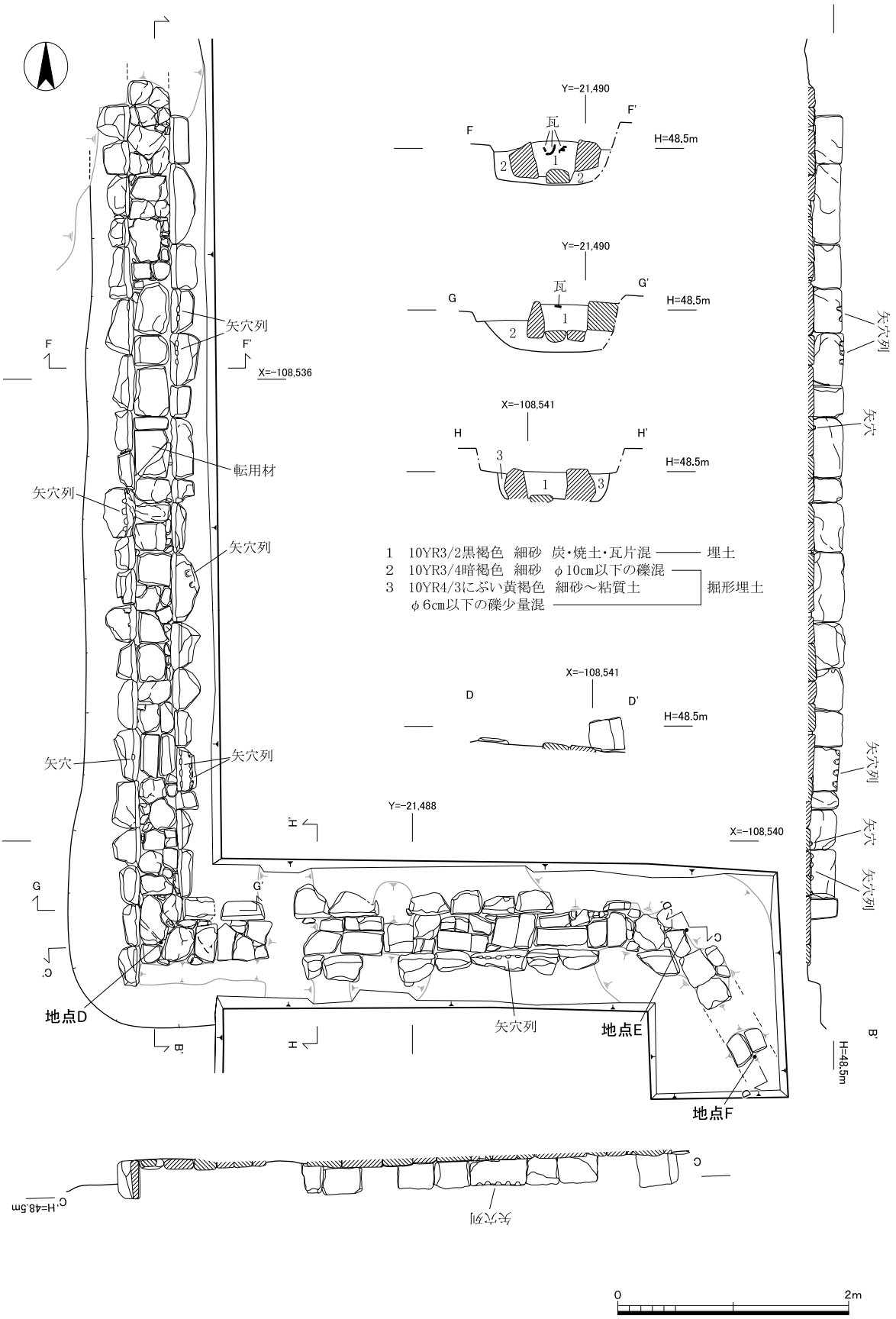
埋土
掘形埋土
床面構築土

0　2m

石室70実測図（1：50）

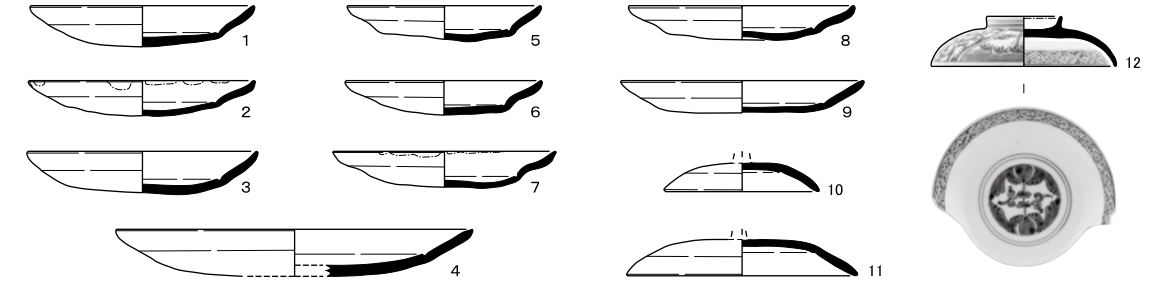

B
矢穴列
H=48.5m
会所
A'
H=48.5m
会所
地点C
矢穴列
転用材
X=−108,532
B
会所
転用材
Y=−21,492
矢穴列
矢穴列
X=−108,528
E
1
H=48.5m
2
3
E'
地点B
1 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 埋土
2 10YR3/3暗褐色 細砂
3 10YR4/3にぶい黄橙色 粗砂
掘形埋土
E
E'
0
2m
Y=−21,496
地点A
図版12
地点A
地点B
地点C
図版13
地点E
地点D
地点F
Y=−21,500
A
A

溝15実測図1（1：50）

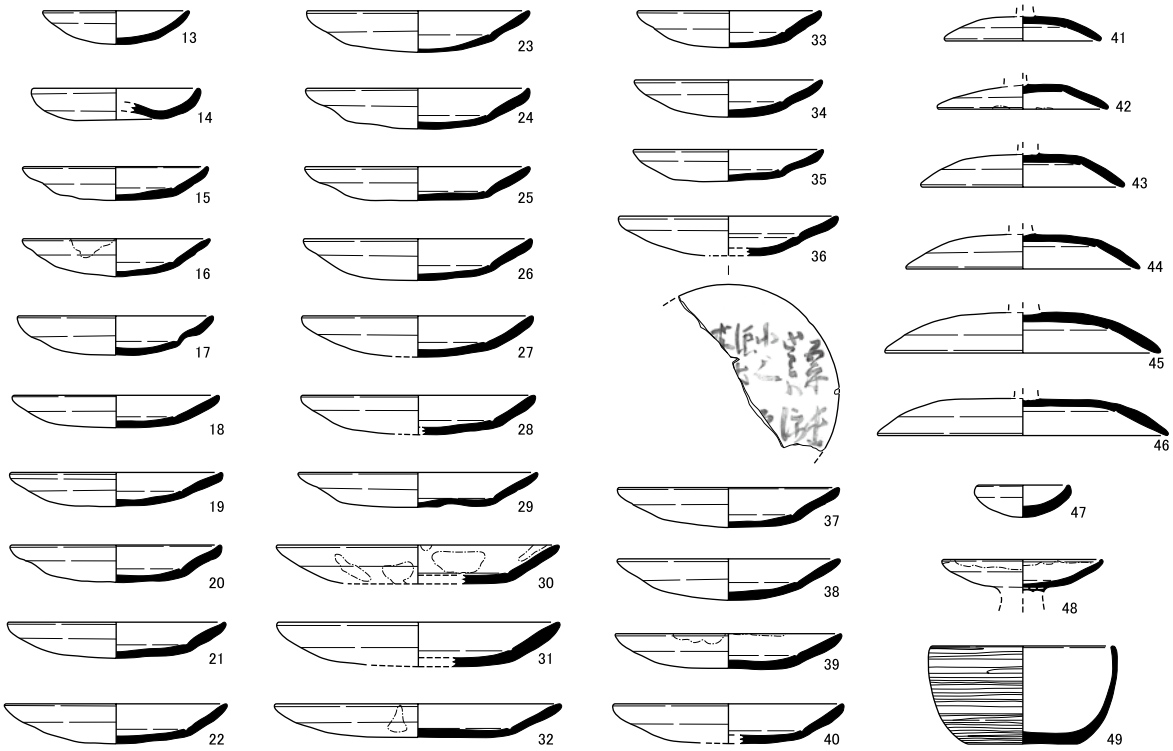

Y=-21,490
F
F'
瓦
H=48.5m
1
2
Y=-21,490
G
G'
瓦
H=48.5m
1
2
X=-108,541
H
H'
3
1
3
H=48.5m
1 10YR3/2黒褐色 細砂 炭・焼土・瓦片混 埋土
2 10YR3/4暗褐色 細砂 φ10cm以下の礫混
3 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～粘質土 掘形埋土
φ6cm以下の礫少量混
X=-108,541
D
D'
H=48.5m
矢穴列
矢穴
X=-108,536
転用材
Y=-21,488
X=-108,540
地点D
地点E
地点F
H=48.5m
C'
H=48.5m
0
2m

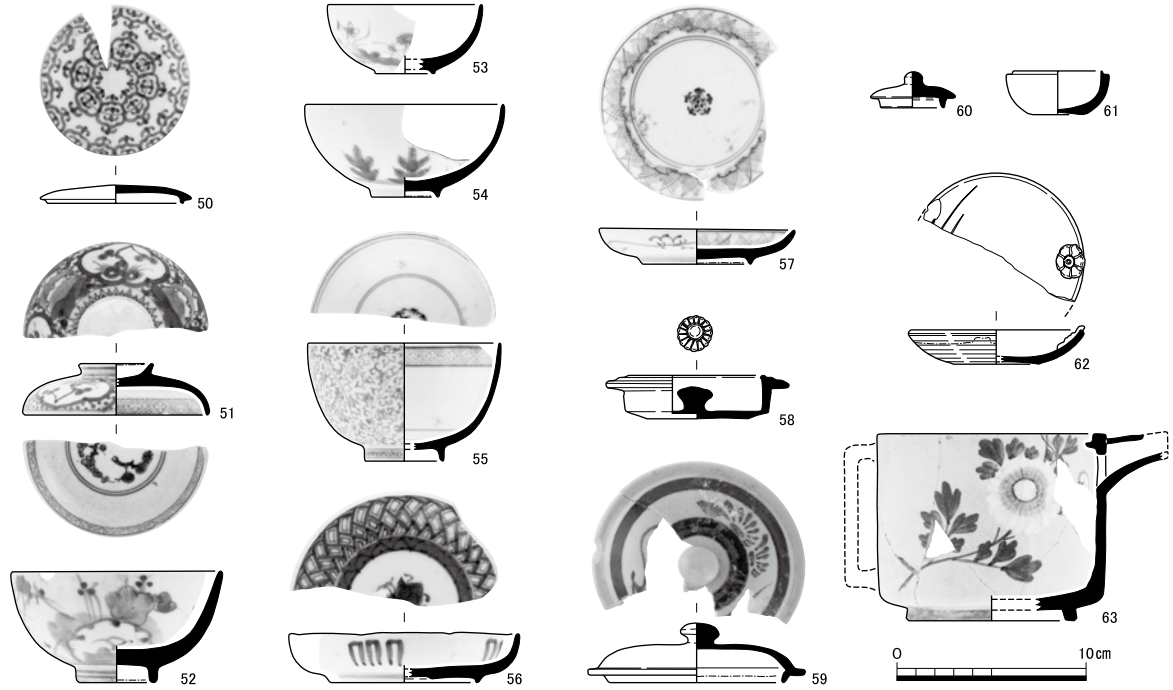
溝15実測図２（１：50）

溝95



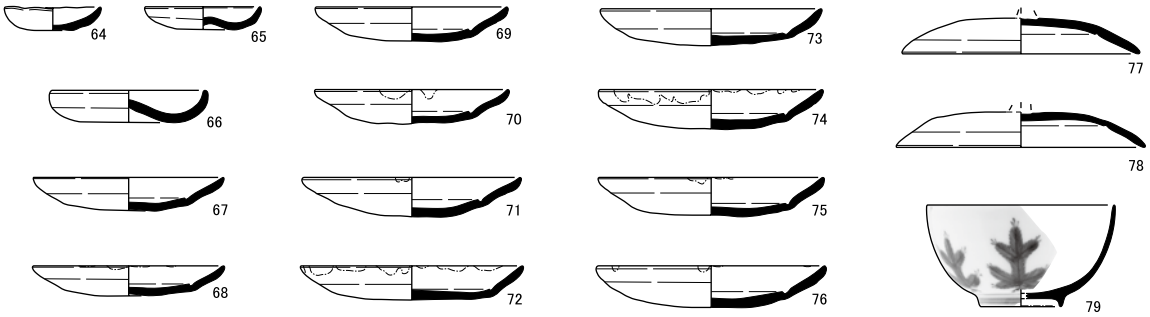
石室98



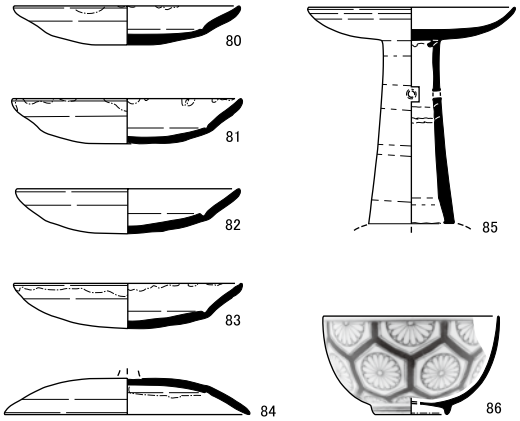


溝95、石室98出土土器実測図（1：4）

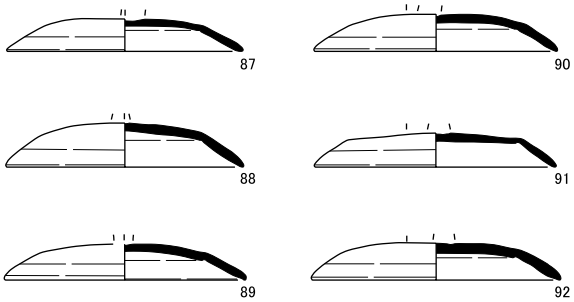
土坑50



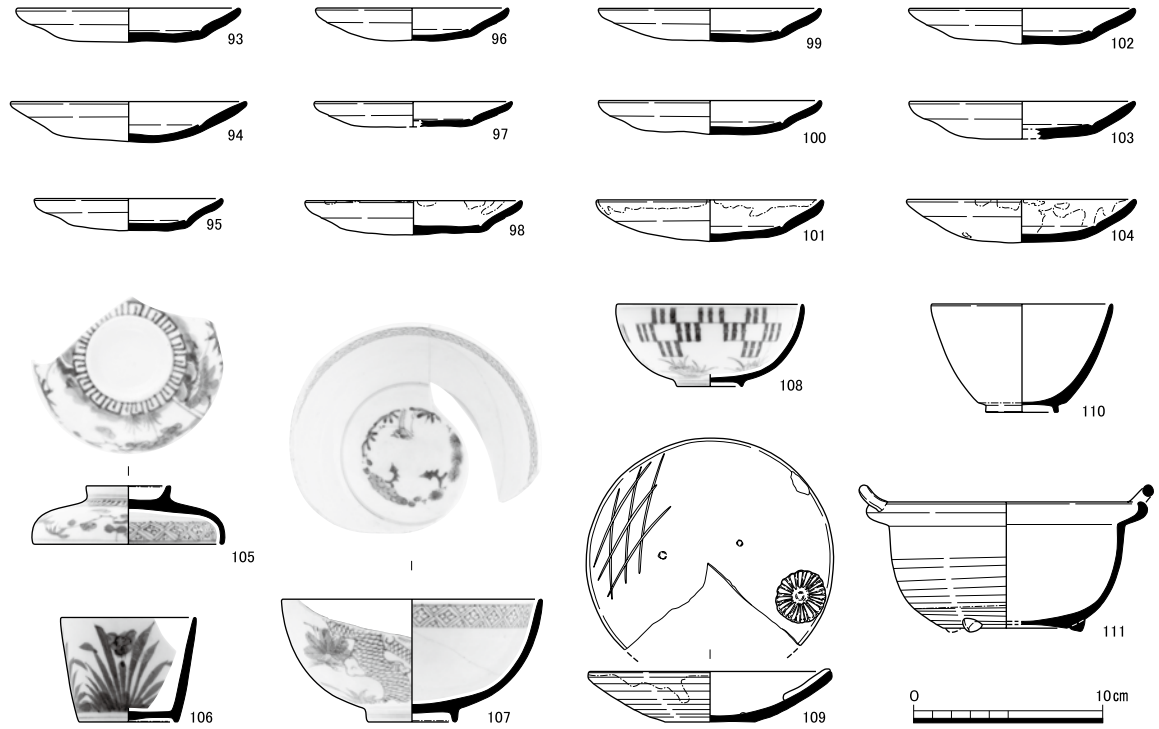
土坑59



土器溜60

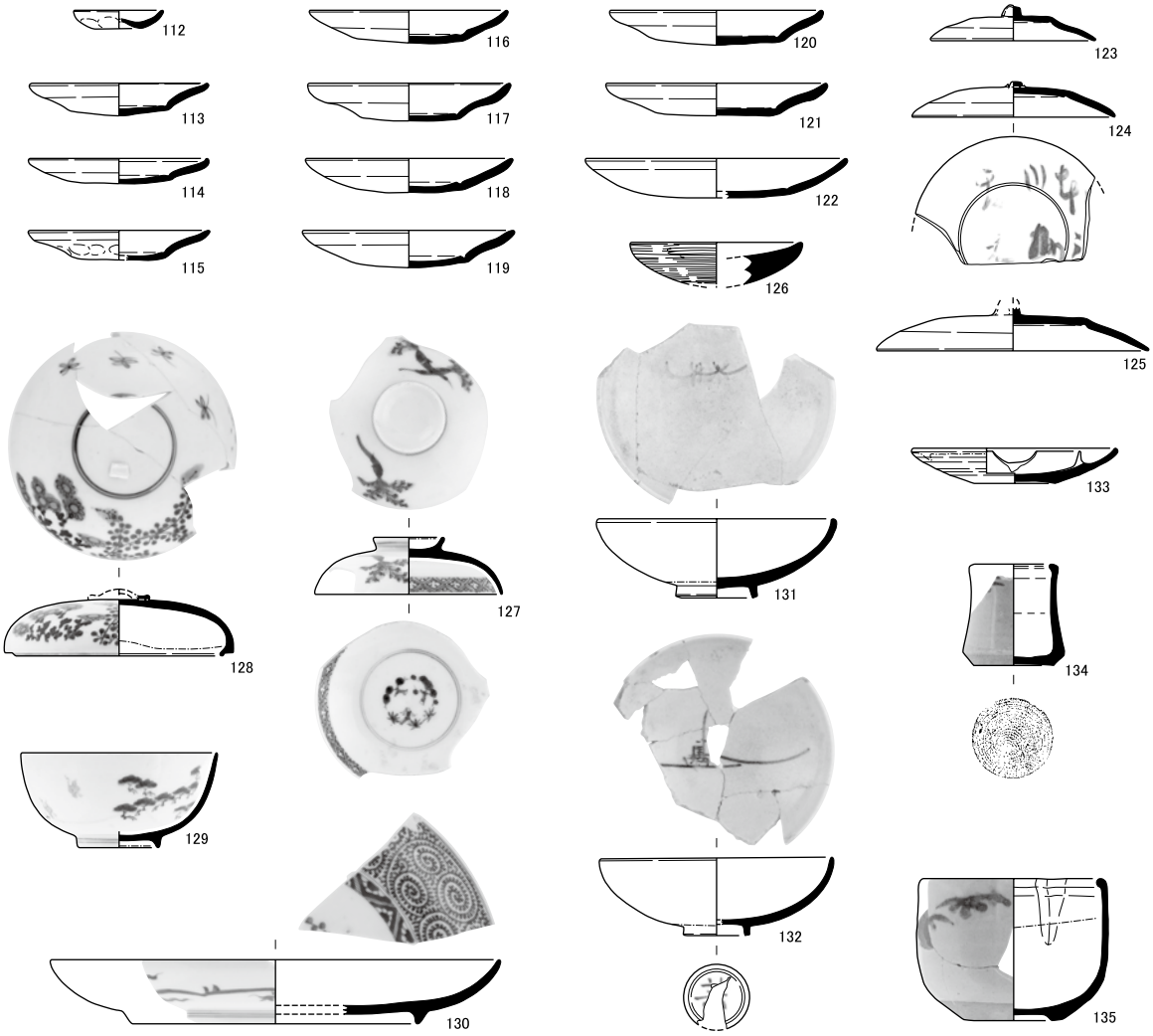


石室70

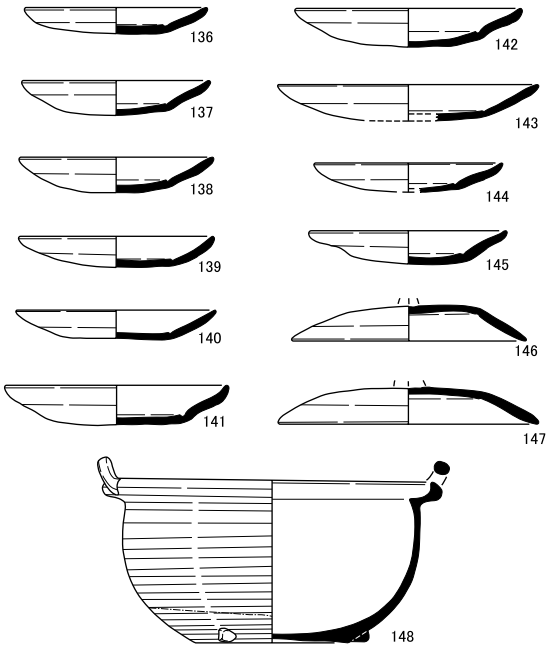


土坑50・59、土器溜60、石室70出土土器実測図（1：4）

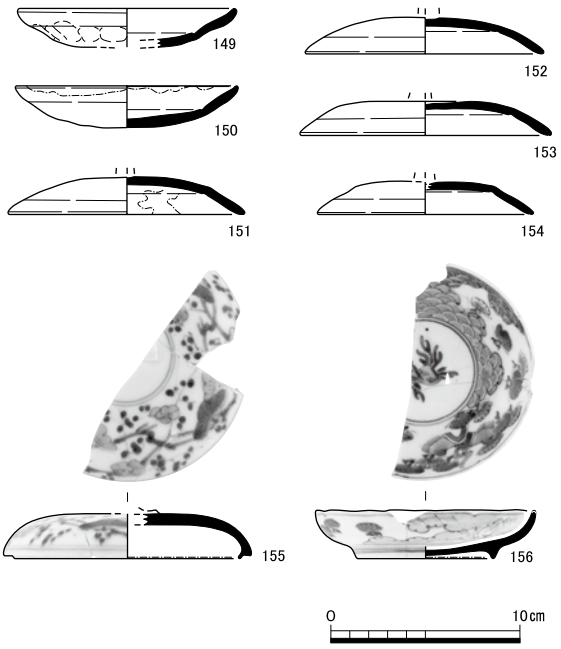
土坑66



土坑11



溝7



土坑11・66、溝７出土土器実測図（１：４）

1　第４面全景（北から）

2　礎石列１（南東から）

3　溝95（北東から）

1　第３面全景（北から）

2　土坑117（東から）

3　土坑117半裁（南から）

4　階段113（北東から）

1　石室89（西から）

2　石室89北東隅　細部（南西から）

3　石室98（北から）

4　石室98北西隅　細部（南東から）

1　石室70（東から）

2　石室70北西隅　細部

3　溝75東部（北東から）

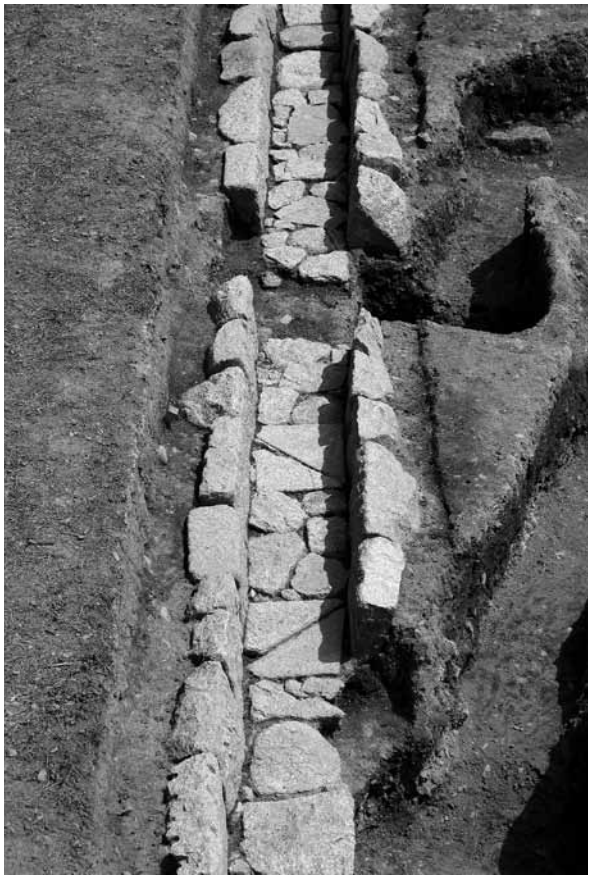
4　溝40西部（南から）

1　第２面全景（北から）

2　土坑66（北から）

3　集石30（東から）

1　溝15　地点A～C（東から）



2　溝15　地点C～D（北から）

3　溝15　地点D（南西から）

4　溝15　地点D～F（北西から）

1　第１面全景（北から）

2　土坑８　炭層検出（北から）

3　土坑８　構築土半裁（南から）

4　土坑11（北東から）

1　断割２　東壁（西から）

2　断割４　西壁（東から）

3　調査区中央部　洪水堆積層（北から）

4　調査区中央部　洪水堆積層（西から）

5

10

16

24

42

45

60

58

1

7

34

37

36

63

溝95、石室98出土土器

66

74

85

86

95

109

101

123

113

124

119

138

141

土坑11・50・59・66、石室70出土土器

報　告　書　抄　録

ふりがな	へいあんきょうさきょういちじょうしぼうじゅっちょうあと・くげまちいせき・きょうとしんじょうあと
書名	平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２２－２
編著者名	中谷俊哉
編集機関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2022年12月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京跡（へいあんきょうあと） 公家町遺跡（くげまちいせき） 京都新城跡（きょうとしんじょうあと）	京都市上京区（きょうとしかみぎょうく） 京都御苑３（きょうとぎょえん）	26100	1 241 249	35度 01分 17秒	135度 45分 52秒	2022年６月６日～2022年８月12日	278㎡	消火施設整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡	都城跡	室町時代	土坑	土師器、焼締陶器	江戸時代前期から後期にかけての仙洞御所の変遷を確認した。 17世紀頃の鴨川洪水堆積層を確認した。 京都新城の堀幅を想定できる知見を得た。
公家町遺跡	邸宅跡	安土桃山時代	堀	土師器、瓦	
京都新城跡	平城跡	江戸時代	礎石列、石室、階段、溝、集石、土坑	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦類、金属製品、石製品、貝類	
		近代	溝、土坑	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦類、金属製品、貝類	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2022-2

平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡

発行日　2022年12月28日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　℡ 075-256-0961